

上 桜 井 北

長野県佐久市上桜井北遺跡発掘調査報告書

1978年3月

佐久市教育委員会

序 文

佐久市教育委員会

教育長 浅沼 騩

上桜井北遺跡調査が文字通り発掘調査されました。動機は東信土地改良事務所施行によります農業近代化を志向いたしますほ場整備事業によるものでした。

昭和52年8月23日から10月5日まで現地で調査は続行された訳ですがほ場整備事業としてその進捗の度合は農家に対しても敏感な経済的反応をもつものであり、又事業推進とこれに抗するかたちで発掘調査と云う、二律背反的状況の中で調査にも速度が要求され、従って調査にたずさわっていただきました団長の藤沢先生始め調査員各位にも格段の心身面にご負担をおかけいたしました。

幸い東信土地改良事務所を始め、地元桜井の方々の古代史並びに郷土意識の高い次元のご理解をいただき絶大のご協力を賜りまして苦難の中にも無事調査を成し得て感謝を申し上げる次第です。

本遺跡は古墳時代の終りから平安時代にかけましての集落址であり、この解明も適確になされ、そして集落址が時代の変遷の中で墓域として利用されたことが判然といたしました。

桜井地籍と云う河川礫層地帯であり調査にも当然困難性を伴いましたが慎重綿密な進行の中で考証は適確に行われ今更乍ら信頼に足る権威ある調査と感銘いたしました。

調査員、調査補助員の協力体勢も一糸乱れない一体性をもち和気藹々の中には場整備事業の時限との調整の上に事を成し終えた訳であります。数多い調査も回を重ねて遺構遺物の実測図の作成もレポート執筆もそれぞれ調査員各自の責任において分担していただき蓄積を傾けていただきました。埋蔵調査は云うまでもなく一連の調査パターンの中におきましても学研と同時に高度の判断と経験と学殖が要求されます。ほ場整備事業を契機として佐久市でも古代のベールが好むと好まざるとにかかわらず次々に地上に姿を顯わすことは如何に秩序ある開発とは云え、こうした事実は文化財保存の意義からは遺憾なことですが農業近代化への過程の脱皮として否定論のみに終始できない実情もある訳であります。

本調査を終りまして団長として、ご繁多中お引受願い調査に万端ご配意を下さいました藤沢平治先生を始め点検作業に特段のご協力をいただきました北佐久郡御代田町教育委員会の土屋長久先生・臼田武正・青木幸男・花岡弘諸先生、県教委関孝一・丸山徹一郎両指導主事又調査員・調査補助員各位に満腔の感謝の誠を捧げまして一言のご挨拶といたします。

例　　言

- 1 本書は、昭和52年8月23日～10月5日までにわたって発掘調査された、長野県佐久市大字桜井に所在する上桜井北遺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、東信土地改良事務所の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、藤沢平治を発掘担当者とし、佐久考古学会有志を調査員とし、地元桜井地区の人々の協力を得て実施した。
- 4 本書に挿入した遺構、遺物の実測図作製は、調査員全員が行ない、トレスを島田恵子が主に担当して行なった。
- 5 本書の執筆は、各遺構担当調査員が行ない、文末にそれぞれの文責を記した。
- 6 本書の編集は、林、高村が行ない藤沢がこれを校閲、監修した。
- 8 本書の資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

なお青木幸男氏には、忙がしい中、最終編集及び点検作業の協力ををしていただき、土屋長久、臼田武正、花岡弘氏からは、報告書作成に關しいいろいろ御助言をいただいた。又県教育委員会、関孝一、丸山敬一郎の両指導主事には、調査に關し適切な御指導をいただき、更に地元の方々からは、物心両面にわたる、御援助を賜わりここに厚くお礼申し上げる。

凡 例

- 1 本報告書は、5章と図版からなり、I章は調査の動機、概要、日誌に分割して調査の全体的な把握を容易にするため、簡単にまとめてある。II章は自然的環境、桜井の歴史及び周辺遺跡についてふれてあり、本遺跡をとりまく時間的、空間的な両面における環境についてまとめてある。III章は、発掘区内における全体層序及び遺構覆土層位を試掘調査と考えあわせてIV章で記述を進めやすくするため、全体的観点から概略してある。IV章は、本発掘調査によって検出された遺構、遺物について記述した章で、本調査が緊急調査で時間的制約を受けざるを得なく、今後の基礎資料として使用できるよう、実測図及び表に力をそそぎまとめてある。V章はIV章で提示された基礎資料をもとに、現時点での把握できた本調査の成果を総括してある。
- 2 本遺跡で検出された遺構は、住居址18軒、特殊遺構10基で、住居址についてはH、特殊遺構についてはTの略号を使用している。
※ 特殊遺構とは、本調査で認識できた遺構で、住居址以外のものについて、括的に使用している。

3 遺構実測図及び土器実測図の見方

本報告書では、図により遺構及び土器の資料的価値の度合ができるだけわかりやすくするために下記のように、線の使い方を変えて表示してある。但し、初めての試みのため多少の混乱はさけられなかった。

○遺構実測図に使用した線の分類

—— (実 線)	調査時に検出されたプランの線
----- (破 線)	調査時に検出されたプランで、切り合い関係のため、他の遺構によって破壊された部分を示す。(本遺構より古い遺構で、本遺構の床面に達しない遺構プラン線のみである)
— (1点鎖線)	遺構の掘り下げ前のプランで、上面での線
— (2点鎖線)	調査時に種々の障害にあり、プランがつかめなかった遺構のプランを想像した線

○土器実測図の中央線による分類

(P) 中央線が——実線

土器が、どのような部位であっても器壁がほぼ1周し
※
内外面の調整が一般的実測によって観察できる個体
を、その実測法によって行う方法（完全実測）。

(R) 中央線が——1点鎖線

口縁部or底部を有した破片で、口径or底径が $\frac{1}{4}$ 付近
現存し、その径の推測値の信頼性が高いと判断した
個体について、同一部分を 180° 回転させて実測する
方法（回転実測）。

(F) 中央線がなく破片形を表
示してあるもの

器形を実測するには、その推測値の信頼性は低くな
るが口径or底径が $\frac{1}{4}$ 内外で、担当者が資料として使
用したい個体について実測する方法（破片実測）。

※ 大井晴男著「野外考古学」による。

4 遺物一覧表の見方

— No — 挿図番号と対応。

—器形— 第1図の名称に従う。

—土器破片分類及び部位—

土器破片分類は下記による、又部位は第1図に従う。

A ; 口縁部or底部の破片で 口径or底径が $\frac{1}{4}$ 以上の 破片	1 ; 全部位が存在するもの (底部～口縁部まで連続)	1 ; 無キズ (完形) 〈A11〉 2 ; 口径&底径が $\frac{3}{4}$ 以上 〈A12〉 3 ; 1・2以外の個体 〈A13〉
	2 ; 全部位が存在しないも の (底部～口縁部まで 不連続)	1 ; 口径or底径が $\frac{3}{4}$ 以上 〈A21〉 2 ; 1以外の個体 〈A22〉
B ; A以外の破片	1 ; 特筆すべき破片 〈B 1〉	
	2 ; 1以外の破片 〈B 2〉	

但し、今回表に示した破片分類は、十分に接合を行ない復元した個体についての分類で
ある。

—実測図分類—

完全実測を P、回転実測を R、破片実測を F と略号を用いて表示。

一法量一

口径、器高、底径の順に記し、() 内の数値は推測値、—線は不明、計測値はcmで表示し
0.5cm単位の近似値とした。

一器形の特徴一 部位名称は第1図に従う。

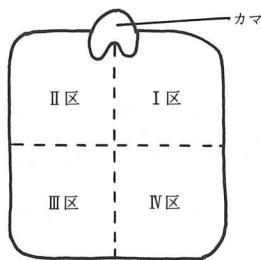
一内面及び外面の調整一

部位は第1図に従い、調整用語の、ヘラケズリ、ヨコナデ、凹線文、ヘラミガキとも概む
ね「紫雲出」遺跡調査報告書の基準に従がう。しかし、クシバ状工具による調整という用
語を本報告書で使用したが、「紫雲出」による刷毛目整形に相当し、ただ工具的イメージ
が合致しないため、上述の用語を使用することとした。なおこれらの特徴的使用部及び実
測の書き方は第1図に示してある。

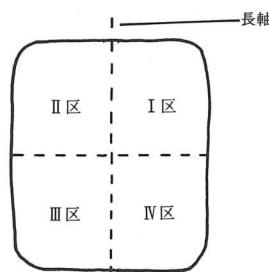
一備考一

胎土、色調、焼成、及び遺存状態、成形で顕著な例、出土位置、その他気づいたことについ
いて記載した。

なお住居址の平面的出土位置は下記の例に従う。



〈カマドが明確な時〉

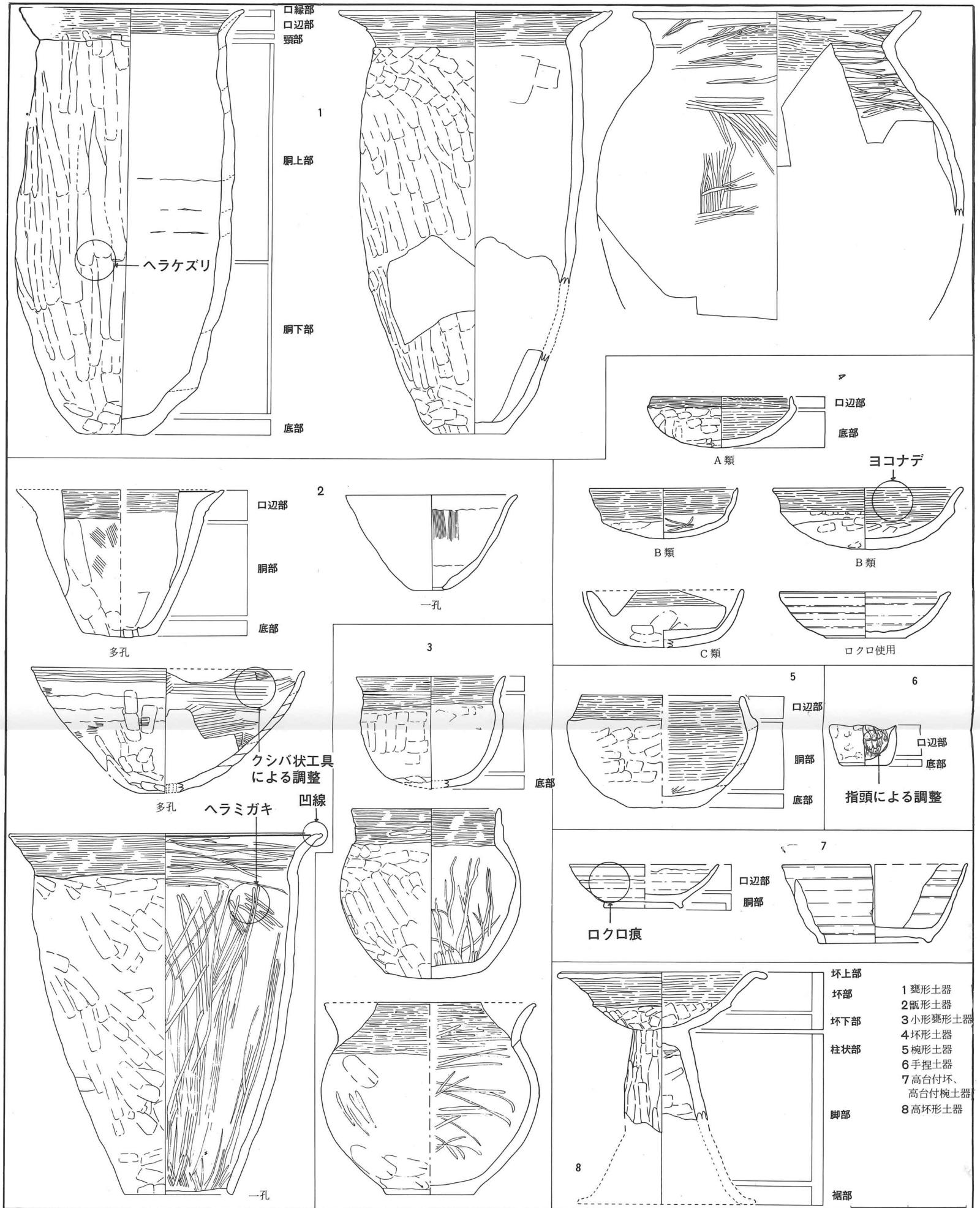


〈カマドが明確でない時〉

又出土土器の内、須恵器については、表及び挿図番号ともゴシック体となっている。

5 断面図及びエレベーション図

断面図及びエレベーション図の平面レベルは、標高662.40mに統一してある。
(但しH14号住居址の断面図は662.26m)



第1図 上桜井北遺跡出土土器器種、部位等名称図 (1 : 6)

本文目次

序文	I
例言	III
凡例	IV
本文目次	IX
付表目次	X
挿図目次	XI
図版目次	XIII
I 発掘調査の経緯	(1~9)
1 調査に至る動機	1
2 調査の概要	2
3 発掘調査日誌	2
II 遺跡の環境	(10~18)
1 上桜井北遺跡付近の自然環境	10
2 歴史環境	12
1) 周辺遺跡	12
2) 桜井の歴史 一原始時代から中世まで一	15
III 層序	(19~21)
IV 遺構と遺物	(22~87)
1 住居址	22
1) H 1 号住居址	22
2) H 2 号 "	26
3) H 3 号 "	27
4) H 4 号 "	29
5) H 5 号 "	38
6) H 6 号 "	39
7) H 7 号 "	44
8) H 8 号 "	45

9)	H 9号住居址	56
10)	H 10号	"	57
11)	H 11号	"	63
12)	H 12号	"	66
13)	H 13号	"	68
14)	H 14号	"	70
15)	H 15号	"	73
16)	H 16号	"	75
17)	H 17号	"	77
18)	H 18号	"	79
2	特殊遺構	79
1)	T 1号特殊遺構	79
2)	T 2・3・7号特殊遺構	82
3)	T 4・5・6号	"	82
4)	T 8・9・10号	"	85
3	その他	85
V	総括	(88~101)
	参考文献	101

付 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	14
第2表	遺構覆土層位一覧表	21
第3表	H 1号住居址出土土器一覧表	25
第4表	H 2号	"	27
第5表	H 3号	"	28
第6表	H 4号	"	36
第7表	H 5号	"	38
第8表	H 6号	"	43
第9表	H 7号	"	53
第10表	H 8号	"	57
第11表	H 9号	"	62

第12表	H 11号住居址出土土器一覧表	65		
第13表	H 12号	"	"	67
第14表	H 13号	"	"	70
第15表	H 14号	"	"	72
第16表	H 15号	"	"	75
第17表	H 16号	"	"	76
第18表	H 17号	"	"	78
第19表	T 2号特殊遺構出土土器一覧表	83		
第20表	T 3号	"	"	83
第21表	T 4号	"	"	83
第22表	上桜井北遺跡検出住居址一覧表	98		

挿 図 目 次

第1図	上桜井北遺跡出土土器器種、部位等名称図 (1 : 6)	VII・VIII
第2図	上桜井北遺跡位置及び発掘区設定図 (1 : 150,000 & 1 : 7,500)	1
第3図	佐久平地形区分図 (1 : 600,000)	10
第4図	周辺遺跡分布図 (1 : 40,000)	13
第5図	上桜井北遺跡土層図 (平面図 1 : 400)	20
第6図	H 1号住居址実測図 (1 : 80)	23
第7図	" 出土遺物実測図 (1 : 3)	24
第8図	H 2号住居址実測図 (1 : 60)	26
第9図	" 出土遺物実測図 (1 : 3)	27
第10図	H 3号住居址実測図 (1 : 60)	28
第11図	" 出土遺物実測図 (1 : 3)	28
第12図	H 4号住居址実測図 (1 : 80)	30
第13図	" カマド実測図 (1 : 30)	31
第14図	" 出土遺物実測図 〈その1〉 (1 : 3)	32
第15図	" " 〈その2〉 (1 : 3)	33
第16図	" " 〈その3〉 (1 : 3)	34
第17図	" " 〈その4〉 (1 : 3)	35
第18図	H 5号住居址実測図 (1 : 60)	38

第19図	H 5号住居址出土遺物実測図 (1:3)	38
第20図	H 6号住居址実測図 (1:60)	40
第21図	" カマド実測図 (1:20)	41
第22図	" 覆土内礫群実測図 (1:60)	42
第23図	" 出土遺物実測図 (1:3)	43
第24図	H 7号住居址実測図 (1:60)	44
第25図	H 8号住居址実測図 (1:60)	46
第26図	" カマド実測図 (1:30)	47
第27図	" 覆土内礫群実測図 (1:60)	48
第28図	" 出土遺物実測図〈その1〉(1:3)	49
第29図	" 〈その2〉(1:3)	50
第30図	" 〈その3〉(1:3)	51
第31図	" 〈その4〉(1:3、但し39は1:1)	52
第32図	H 9号住居址実測図 (1:60)	56
第33図	" 出土遺物実測図 (1:3)	57
第34図	H 10号住居址実測図 (1:80)	59
第35図	" 覆土内礫群実測図 (1:60)	60
第36図	" 出土遺物実測図 (1:3)	61
第37図	H 11号住居址実測図 (1:60)	63
第38図	" 出土遺物実測図 (1:3)	64
第39図	H 12号住居址実測図 (1:60)	66
第40図	" 出土遺物実測図 (1:3)	67
第41図	H 13号住居址実測図 (1:60)	69
第42図	" 出土遺物実測図 (1:3)	69
第43図	H 14号住居址実測図 (1:80)	70
第44図	" カマド実測図 (1:20)	71
第45図	" 出土遺物実測図 (1:3)	72
第46図	H 15号住居址実測図 (1:60)	73
第47図	" 出土遺物実測図〈その1〉(1:3), 〈その2〉(1:2)	74
第48図	H 16号住居址実測図〈カマド〉(1:30)	76
第49図	" 出土遺物実測図 (1:3)	76
第50図	H 17号住居址実測図 (1:60)	77

第51図 H 17号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)	78
第52図 T 1号特殊遺構実測図 (1 : 40)	80
第53図 " 出土遺物実測図 (1 : 3)	81
第54図 T 2号特殊遺構実測図 (1 : 20)	83
第55図 T 3号 " (1 : 60)	83
第56図 T 2号特殊遺構出土遺物実測図 (1 : 3)	84
第57図 T 3号 " (1 : 3)	84
第58図 T 7号 " (1 : 3、3は1 : 2)	85
第59図 T 4・5・6号特殊遺構実測図 (1 : 40)	86
第60図 その他出土遺物実測図 (1 : 3、ただし古銭は1 : 1)	87
第61図 H 4号住居址出土遺物分布図 (1 : 60、ただし遺物は1 : 6)	91・92
第62図 H 8号 " " (1 : 60、ただし遺物は1 : 6)	93・94
第63図 上桜井北遺跡遺構全体図 (1 : 4000)	99

図 版

図版 一 遺跡	1 上桜井北遺跡遠景 (南より)
	2 A地点東側全景 (北より)
図版 二 遺跡	3 A地点西側全景 (北より)
	4 B地点全景 (南より)
図版 三 遺構 (住居址)	1 H 1号住居址 (南より)
	2 H 2号 " (")
	3 H 3号 " (")
図版 四 遺構 (住居址)	4 H 4号 " (")
	5 H 5号 " (北より)
	6 H 6・7号住居址 (北より)
図版 五 遺構 (住居址)	7 H 6号住居址 (南より)
	8 H 8号 " (") "
図版 六 遺構 (住居址)	9 H 9・13号住居址 (南より)
	10 H 10号住居址 (南より)
	11 " (西より)
図版 七 遺構 (住居址)	12 H 11号住居址 (南より)

- | | | |
|---------|----------------|-------------------------|
| | | 13 H 12号住居址 (西より) |
| 図版八 遺構 | (住居址) | 14 H 14号 " (南より) |
| | | 15 H 15号 " (東より) |
| | | 16 H 17号 " (北より) |
| 図版九 遺構 | (カマド) | 1 H 4号住居址カマド (南より) |
| | | 2 " " " (西より) |
| | | 3 H 6号 " " (西より) |
| | | 4 " " " (南より) |
| | | 5 H 8号 " " (南より) |
| | | 6 " " " (切開後) |
| 図版十 遺構 | (カマド) | 7 H 10号 " " (南より) |
| | | 8 H 12号 " " (南より) |
| | | 9 H 16号 " " (西より) |
| | | 10 " " " (北より) |
| | | 11 " " " (東より) |
| | | 12 " " " (南より) |
| 図版十一 遺構 | (カマド) | 13 H 14号住居址カマド |
| 図版十二 遺構 | (特殊遺構) | 1 T 1号特殊遺構内礫群 (北より) |
| | | 2 " " " (西より) |
| | | 3 T 1号特殊遺構 (完掘後) |
| 図版十三 遺構 | (特殊遺構) | 4 T 3号 " (南より) |
| | | 5 T 8・9号特殊遺構 (北より) |
| | | 6 T 4・5・6号特殊遺構内礫群 (南より) |
| | | 7 " 号特殊遺構 (完掘後) |
| 図版十四 遺構 | (住居址覆
土内礫群) | 1 H 6号住居址覆土内礫群 (西より) |
| | | 2 " " " (北より) |
| 図版十五 遺構 | (住居址覆
土内礫群) | 3 H 8号 " " (南より) |
| | | 4 " " " (東より) |
| 図版十六 遺構 | (住居址覆
土内礫群) | 5 H 10号 " " (北より) |
| | | 6 " " " (西より) |
| 図版十七 遺物 | (出土状況) | 1 H 4号住居址遺物出土状況 |
| 図版十八 遺物 | (") | 2 H 8号住居址遺物出土状況 (その1) |

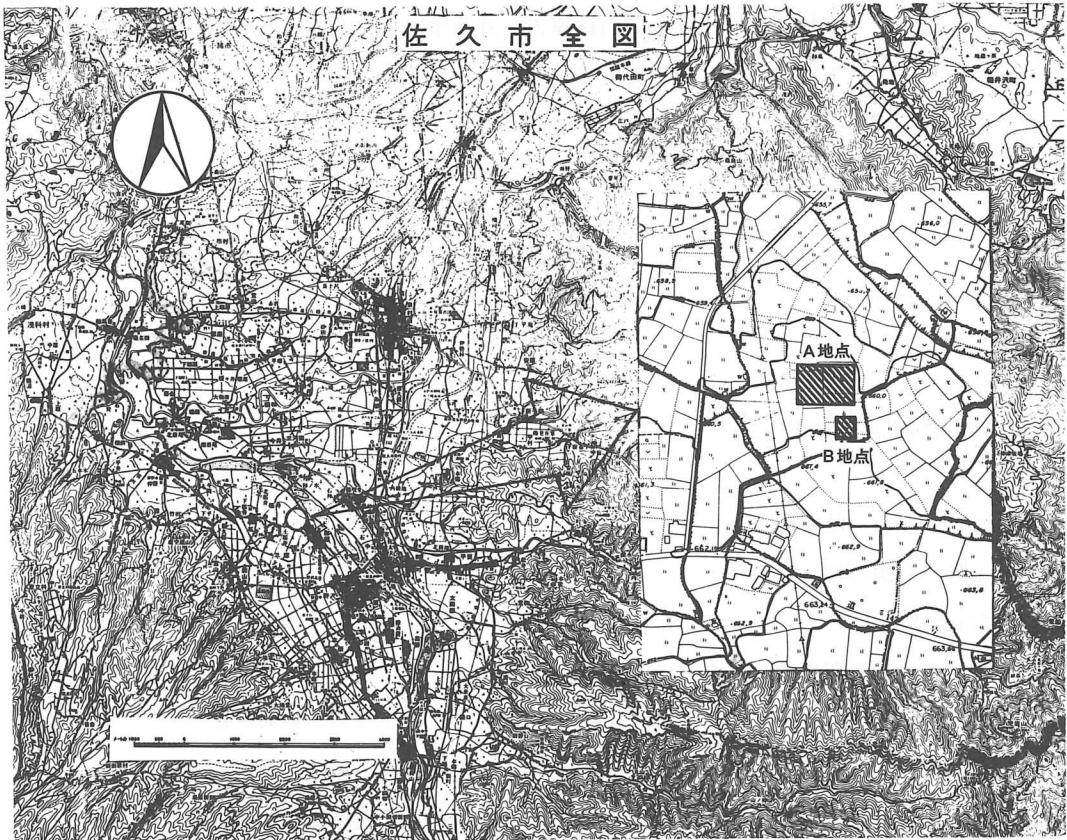
- 図版十九 遺物 (出土状況) 3 H 8号住居址遺物出土状況 (その2)
- 図版二十 遺物 1 H 4・8・12号住居址出土の甌
- 図版二一 遺物 2 H 4・8号住居址出土の甌
- 図版二二 遺物 3 H 4・8号住居址出土の甌・高坏
- 図版二三 遺物 4 H 4号住居址出土の坏・紡錘車
- 図版二四 遺物 5 H 8号住居址出土の坏・臼玉
- 図版二五 遺物 6 成形・調整の特徴 (凹線・多孔・糸切底のヘラケズリ)
墨書・灰釉・手捏
- 図版二六 遺物 1 上桜井北遺跡発掘調査スナップ

I 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機

佐久市大字桜井上桜井北遺跡は上桜井部落の北東約400m余の地点に位置し、微高地状に伸びる自然堤防上に存在する。本遺跡は、昭和3年発行の八幡一郎著「南佐久郡の考古学的調査」、昭和31年発行「信濃史料」第1巻上の文献に記載されており、古くからその存在を知られている。

さて今回、緊急発掘調査を行う契機は、昭和52年度佐久平(二)ほ場整備事業により破壊されることがやむなきに至ったからである。そこで市教委は、県文化課の指導を受けながら昭和52年8月2日～8月14日まで試掘調査を実施し、その結果、集落址の予想される地点に発掘区を設定することを決定する。第2図のように遺跡の北方部分をA地点、南方部分をB地点と2ヶ所発掘区



第2図 上桜井北遺跡位置及び発掘区設定図 (1 : 150,000 & 1 : 7,500)

を設定し、発掘担当者に藤沢平治氏を依頼して8月25日より調査実施する運びとなった。

2 調査の概要

- 遺跡名 上桜井北遺跡
- 所在地 長野県佐久市大字桜井
- 発掘期間 昭和52年8月23日～同年10月5日
- 調査委託者 東信土地改良事務所 所長 五十嵐以正
- 調査受託者 佐久市教育委員会 教育長 浅沼馨
- 調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

浅沼馨 佐久市教育委員会教育長
高畠五男 " 教育次長、社会教育課長
桜井長夫 " 社会教育係長

- 調査団の構成は下記の通りである。

団長 藤沢平治
調査員 高村博文（主任）、白倉盛男、武藤金、森泉定勝、井上行雄、三石延雄、
黒岩忠男、井出正義、林幸彦
調査補助員 島田恵子、鷹野一太郎、小坂井孝修
協力者 白田てい、白田靖子、木次まち子、金森治代、柳沢けい子、井出ふくえ
井沢茂代、花里百合子、岩下はるい、桜井けさえ、白田久子、細萱久（以上桜井地区）佐々木章文、林文典、荻原和夫、荻原理作

3 発掘調査日誌

- 8月22日（月） 晴れ 調査員立ち合いのもとに行う。
- 佐久市野沢会館に於いて午後3時半より、
浅沼教育長、藤沢団長を始め、事務局、調査
員の出席をもつて発掘調査の打ち合せ会を行
う。
- 8月23日（火） 晴れ ○8月24日（水） 小雨
ほ場整備事業請負業者木ノ下組の協力によ
り、重機を使って耕作土の削平を高村及武藤
昨日に引き続き、耕作土の削平を行い、併
行してトランシットを使用して基準杭の設定
を行う。午後雨のため中止。
- 8月25日（木） 小雨のち雨
本日より地元協力者の参加も交えて本格的
調査に入る。小雨の降る中を東西にA～S、

南北に1~13の計 234G (3×3m) を設定する。午後、雨のため中止。

○ 8月26日（金） うすぐもり

調査は、調査参加者を3つのグループに分け、各グループには2名以上の調査員を配置して指導に当り、遺構検出作業を行う。3-N、4・5-O、7・8-Pグリット内に落ち込みが存在しそうである。

○ 8月27日（土） うすぐもり

一班一 主に武藤、三石調査員を中心として、3-N、4・5-O内に存在する漆黒の落ち込みの性格追求のため、さらに4・5-N、3-O、3・4・5-Pグリットの掘り下げを行う。その結果、ほぼ方形のプランを呈した住居址であることが確実となったため、本日よりH1号住居址と命名する。

二班一 主に森泉、井上調査員を中心として、7・8-Pグリット内に落ち込みの性格追求のため、9-P、8・9-Qグリット掘り下げ作業を行う。その結果、すべてのグリット内に落ち込みが見られ、遺構の重複が予想される。

三班一 主に黒岩、井出調査員を中心として、6-O・P、7-Oグリット掘り下げ作業を行う。その結果、5・6-O・Pグリット内に約3×3mの隅丸方形プランを呈す、漆黒の落ち込みが存在し、プランの範囲内には、拳大～頭大の河床礫が一面びっしり存在する。そこで本日より、T1号特殊遺構と命名する。

● H1号（1班） 覆土堆積状況を調査のため、O列グリット杭に沿って東側約30

cmの巾でサブトレーナを入れる。

○ 8月28日（日） 晴れ

一班一 6・7-Qグリット内の遺構検出作業を行う。落ち込みは各グリット内に存在しているが、切り合い関係を把握するには土層からはとても解明できそうにない。しかし、6・7-O・P・Qグリット内に存在する落ち込みは、西南隅の一部が切り合い関係にあるのみで、ほぼ全容をつかめたため本日より、H2号住居址と命名する。

二班一 9-Qグリット精査作業を行う。

● H1号 覆土掘り下げ作業開始、サブトレーナ内清掃作業を行ない、覆土断面図実測開始

● H2号（2班） 本住居址は、西南隅において他の遺構と重複しているが、上面における土層の観察では、新旧関係は明確さを欠く。しかし、住居址の形態及び覆土内より出土した遺物の比較から本住居址が新しいものと思われ、覆土の東半分を掘り下げ始める。

● T1号（3班） 漆黒土層（覆土第1層）をすべて掘り下げ、頭大あるいは拳大の礫が一面に存在する。清掃を行ない写真撮影する。

○ 8月29日（月） 定休日

○ 8月30日（火） 晴れ

一班一 10-P・Qグリット内遺構検出作業を行ない、長方形に配列されたと思われる礫群が検出される。礫群内より中世の内耳片が出土。

午後、 4・5-Q、6・7・8-Rグリ

ット内遺構検出作業を行ない、プラン追求する、全面が黒色の落ち込みとなり、遺構の重複が考えられる。

—3班— 4・5—Q、6・7・8—Rグリット内遺構検出作業を行う。

- H 1号 覆土掘り下げ作業続行。
- H 2号 覆土掘り下げ、床面精査、付属施設追求、写真撮影、実測作業のすべてを行ない本日で完了する。

- T 1号 碓群平板実測作業を行う。

○ 8月31日（水） 晴れ

—2班— 8—Pグリット内における落ち込みの切り合い関係は上面で、漆黒色の土層がほぼ方形にまとまったため、H 3号住居址と命名し、黒色の落ち込みで西壁は明確さを欠くが、かなり大きなプランを呈する住居址をH 4号住居址と命名する。

—3班— 1・3—R、6—Nグリット内遺構検出作業を行う。

- H 1号 覆土掘り下げ作業を続行する。
- H 3号（2班）西半分の覆土掘り下げ開始する。
- T 1号 碓群の実測を午前中に終了する。落ち込みの長軸、短軸を基準として4分割を行ない、北東区、南西区の2区画内の礫を撤去し、底面まで掘り下げる。

○ 9月1日（木） 晴れ

- H 1号 ほぼ全面床面に達する。ピットも3ヶ所確認され、残る作業もわずかとなる。タタキ床らしきものの存在が認められ、河床礫の上に僅かに褐色土を盛り、ゴソゴソした礫上面を平滑化したものと思わ

れる。

● H 3号 東半分の覆土掘り下げ、実測、写真撮影を行ないすべて完了。

● H 4号（2班） 8列グリット杭に沿ってサブトレンチを入れ、覆土堆積状況を調査する。

● 遺構検出作業 1班により7・8—Lを3班により5・6—Mグリット内遺構検出作業を行なう。

● T 1号 昨日カットした部分の断面図をとり、残りの区画の礫を取りのぞき、底面まですべて掘り下げる。写真撮影をしてすべて完了、なお礫はすべて一ヶ所に保存しておき明日、白倉調査員により鑑定を行う予定。

○ 9月2日（金） 晴れ

● H 1号 床面精査、実測、写真撮影も行ないすべて完了。

● H 4号 覆土堆積状況を観察するサブトレンチの精査を行なっていた所、立石及び焼土が検出され、本住居覆土内にカマドが構築されていることが確認され、新しい住居址の存在が確かとなった。

そこで、本住居址より新しい住居址をH 5号住居址と命名し、プランの検出作業を開始する。

● 遺構検出作業 1班により、5・6—Lを、3班により7・8—Jグリット内の遺構検出作業を行なう。

● T 1号 白倉調査員により礫の石質分類を行なう。

○ 9月3日（土） 晴れ

- H 5 号 8 列グリット杭沿いのセクション図を実測し、平面プランの追求を行なつたが、ほとんど床面上に達しているもようで推測プランとならざるを得なかつた。実測、写真撮影して完了。
 - 遺構検出作業 1 班により、6・7-H・J を、3 班により 5・6-M・L グリット内 の遺構検出作業を行なう。
- 9月4日（日） うすぐもり
- H 4 号 覆土掘り下げを開始する。
 - H 6・7 号（3班） 5・6-L・M グリット内における落ち込みのプランが明確に把握できたため、本日より黒褐色を呈した新しい住居址を H 6 号住居址とした。漆黒色で西壁付近のみがわずかに残っている古い方の住居址を H 7 号住居址と命名する。
 - 遺構検出作業 1 班により、7・8-M、2 班により 7-K を、3 班により 4-L グリット内を行なう。
- 9月5日（月） 定休日
- 9月6日（火） うすぐもり
- H 4 号 覆土掘り下げ作業、床面精査を行ないカマドの切開を残してすべて完了。
 - H 6 号 覆土断面実測、併行して覆土掘り下げ開始する。覆土内に礫群の存在がありそうである。
 - T 4・5・6 号（1班） 9・10-P・Q 内に存在する礫群を、本日より T 4・5・6 号特殊遺構と命名する。礫群の平板実測を開始する。
- 9月7日（水） くもり時々雨
- H 4 号 カマド切開作業を行なう。遺物が多量に出土する。
 - T 4・5・6 号 磓群の実測完了。覆土掘り下げ及実測も終了し、写真撮影を残すだけとなる。
 - H 6 号 覆土内に存在する礫群の実測を終了し、床面の検出を行なう。
 - 遺構検出作業 1 班により、6・7-F、2・3 班合同により 6・7-I、5・6-K グリット内を行なう。
- 9月8日（木） くもり時々雨
- H 4 号 カマドの切開を終了し、すべて完了。
 - H 6 号 床面精査を行なう。カマド附近にかなり広範囲にわたりながらかな落ち込みがみられる。実測終了しカマドの切開を残すだけとなる。
- 9月9日（金） 雨のため中止、遺物洗いができるように旧桜井小学校を整備する。
- 9月10日（土） うすぐもり
- H 6 号 カマドの切開を開始する。
 - H 7 号 覆土掘り下げ作業を開始し、ほぼ床面まで検出する。
 - 遺構検出作業 1 班により、9-D・E、2 班により 1・2-B グリット内を行なう。
- 本日をもって、L列より西側はほ場整備事業の進行上、水路をつくるなければならないため、破壊されてしまう。H 1・2・3・4・5、T 1・4・5・6 号の遺構全体写真を撮影する。
- 9月11日（日） 晴れ

- 遺構検出作業 1班により7・8・9—D・E、9—C、6—E、6・7・8—F、2班により4・5—B・Cを行なう。
- H6号 カマドの切開
- 9月12日（日） 定休日
- 9月13日（火） うすぐもり
- H6号 カマドの切開
- 遺構検出作業 1班により10—E・F、8—G、2班により6—C、3班により3・4—Kグリット内を行なう。
- 全体層序III層の範囲確認作業 III層中の黒色の落ち込みの検出は大変困難なため、作業が著しく遅延してしまう。そこで黄色砂礫層の平面範囲の確認を急ぎ、プランの確認のスピード化をはかるため、トレチ法に切りかえて追求する。
1班により9列北側トレチ（G・H・L）、2班により3列北側トレチ（C・D）、3班によりH列西側トレチ（1・2）内を行なう。
- 9月14日（水） 晴れ
- H6号 カマドの切開続行する。
- III層探 1班により9列北側（I・J・K）トレチ、8—Iグリット、2班により3列北側（E・F）トレチ、7列北側（A・B）トレチ、8列北側（A）トレチ、9列北側（A）トレチ、D列西側（3・4・5）トレチ、3班によりH・F西側（1・2）トレチ、1・2—Dグリット内を行なう。本日の作業により巾約14mで南東方向から北西方向にむかって帶のように存在することが判明した。
- 9月15日（木） 諏訪郡原村阿久遺跡視察
- 9月16日（金） 晴れ
- 遺構検出作業 1班により10—I・J・K、7・8—K、7・8・9—L、2班によりO—Bグリット内を行なう。その結果8・9・10・11—J・K・Lグリット内に重複した落ち込みのプラン全容がわかり、又、上面よりはっきりと切り合い関係も把握できた。やや黒色の強い落ち込みのプランが新らしく、同じ黒色土層であるが、やや明るい感じの住居址が古い、やや黒色の強い落ち込みをH8号住居址とし、他方をH9号住居址と命名する。
- 9月17日（土） 晴れ
- 遺構検出作業 11・12—E・F・G・H、10—F、9・10—Gグリット内を行なう。その結果、10・11・12—F・G・Hグリット内にはほぼ方形を呈した落ち込みが検出され、本日よりH10号住居址と命名する。本日より、発掘区の南方に新たにC～H、18～25の計48G（3×3m）を設定し、B地点とする。
- <B地点>
- 遺構検出作業 21—H、23—F、24—Gグリット内を行う。
- 9月18日（日） 晴れ
- <B地点>
- 遺構検出作業 24—C・D・E・F・G、22—C、23—D、21—E、21・23—F、21—Hグリット内を行なう。
- 9月19日（月） 定休日
- 9月20日（火） 晴れ

<B地点>

●遺構検出作業 19・20・21・E・FG、
22・23—E・F、24—Dグリット内を行な
う。その結果、23・24・25—E・F・Gグ
リット内の落ち込みの全容がつかめたため、
H11号住居址と命名する。

○9月21日(水) 晴れ

●H8号 覆土上部に礫群が存在する。
礫群内より、灰釉片、土師壺片等遺物が多
量に出土、又、おそらくカマドのそで石に
利用されたものとおもわれる真赤に変色し
た凝灰岩が2ヶ混入している。礫群の写真
撮影後ほぼプランの真中に南北のサブトレ
ンチを設定し、掘り下げを開始する。

●H10号 プランのやや東寄りに、南北
のサブレンチを入れ、覆土の様子を見る。
その結果、礫群の存在がわかる。礫群検出
作業を開始する。

<B地点>

●遺構検出作業 21—D・E・F・Gグリ
ット内を行なう。

●H11号 サブレンチを東西に入れ、
覆土の掘り下げを開始する。

●H14号 F列杭に沿ってサブレンチ
をいれる。覆土断面図実測。

○9月22日(木) 晴れ

●H8号 覆土断面図実測と併行して、
東南区画、北西区画の覆土掘り下げを行な
う。床面直上に礫群が存在する。

●H15号 6・7—J・K・L内に存在
する落ち込みを本日よりH—15号住居址と
する。東西にサブレンチを設定して掘り

下げを開始する。

<B地点>

●H11・14号住掘り下げ続行。

○9月23日(金)

●H8号 東北、西南区画もほぼ床面ま
で達し、礫群の実測を行なう。

●H10号 磨群の実測を終了し、床面検
出作業を行なう。

●H15号 覆土断面図を実測し、東西 $\frac{1}{4}$ 、
北西 $\frac{1}{4}$ 区画分の覆土を掘り下げる。

●H17号 7—H・I、8—G・H・I・
9—H・Iグリット内に存在する落ち込み
をH17号住居址と命名する。サブレンチ
を設定して掘り下げを開始する。

<B地点>

●H11・14号住掘り下げ続行。

○9月24日(土) 晴れ

●H10号 覆土掘り下げ作業を終え、床
面の精査を行なう。

●H15号 床面まで掘り下げを終了する。

<B地点>

●H11・14号住掘り下げ続行。

○9月25日(日) くもり

●H8号 カマド付近の遺物を取り上げ
カマドの切開及写真撮影を残すだけとなる。

●H9号 試掘によるカクラン層を最初
に取り除き、覆土内にサブレンチを設定
する。

●H15号 床面精査作業を終了し、実測
作業を開始する。

●H16号 試掘調査より検出されていた
カマドを有する住居址をH16号住居址と命

名する。プラン追求のためサブトレンチをいれる。

- H17号 南西 $\frac{1}{4}$ 、東北 $\frac{1}{4}$ 区画の覆土掘り下げを行なう。

<B地点>

- H12号 22・23—E・Fグリット内に存在する落ち込みをH12号住居址と命名する。東西にサブトレンチをいれる。

○ 9月26日（月） 定休日

○ 9月27日（火） 晴れ

- H8号 実測及び写真を終え、カマドの切開を残すだけとなる。

- H9号 サブトレンチを掘り下げ断面を精査したところ、さらに北側に本住居址を切って他の遺構が存在することを確認する。そこで6・7・8—I・J・Kグリット内を精査しほぼプランの全容が把握できたため、H13号住居址と命名する。

- H15号 実測及び写真撮影を終えすべて完了する。

- H17号 覆土掘り下げを行ない、ほぼ全面床面に達する。

- H18号 4—Lグリット内に存在する石組と焼土をH18号住居址と命名する。
本日実測を行ない終了する。

<B地点>

- H11、12号 覆土断面の実測を行なう。南西 $\frac{1}{4}$ 、東北 $\frac{1}{4}$ 区画の覆土の掘り下げを行なう。

- H12号 覆土断面の実測を行なう。

○ 9月28日（水） 晴れ

- H13号 覆土掘り下げ終了し実測を行

なう。

- H17号 覆土掘り下げを行なう。

<B地点>

- H11号 覆土掘り下げを行なう。

- H12号 北西 $\frac{1}{4}$ 区画分の覆土掘り下げを行なう。

- H14号 北壁プラン検出のため、拡張作業を行なう。

○ 9月29日（木） 雨のため現場の作業を中心、旧桜井小学校にて遺物洗いを行なう。

○ 9月30日（金） くもり時々雨
本日は雨が降っているが期限が切迫しているため作業を行なう。

- H13号 実測及び写真を撮影してすべて完了する。

- H16号 プラン検出を連日行なつたが明確につかめない。ただカマド付近にわずか壁がみられるにすぎない。

- H17号 床面精査及実測を行ない、写真撮影してすべて完了。

<B地点>

- H11号 床面精査及び実測を行ない、写真撮影してすべて完了。

- H12号 覆土掘り下げを行なう。

- H14号 覆土掘り下げを行なう。

○ 10月1日（土） 晴れ

<B地点>

- H12号 覆土掘り下げを続行している時、覆土内に黒色土層の円形の落ち込みがあることがはっきりし別の遺構が存在した。本日よりこの遺構をT3号特殊遺構と命名する。

● H14号 覆土の掘り下げを床面まで達する。床面精査も行なう。

○10月 2 日 (日) 晴れのちくもり

● H 9 号 覆土掘り下げを行ない、床面まで達する。又床面の精査も行ない実測する。

<B地点>

● T 3 号 覆土掘り下げを行ない、実測をしすべて完了。

● H12号 実測を行ない、写真撮影をする。

● H14号 平面実測作業を行なう。更に、A、B地点の遺構全体図の実測を行なう。

○10月 3 日 (月) くもり

<B地点>

H11・12・14・T 3 号のレベリングを行ない、本地区 H14号のカマド切開を残すだけで

ある。

○10月 4 日 (火) 雨のため中止

○10月 5 日 (水) 晴れ

H 8・16・14号のカマド切開を終了し、H 9号住の実測及写真撮影も行う。杭ぬき、あとかたづけをして、全体写真を撮る。又、トラックによりテント及機材の撤去作業を終えて現場での作業はすべて完了する。

○10月11日～10月26日 遺物洗い及注記作業。

○10月27日～11月21日 遺物複元作業

○11月22日～12月29日 遺物実測及図面整理。

○ S53年 1月 9 日～1月11日 上桜井北B
遺跡報告書用原稿作製。

○ 1月17日～3月25日 遺物及遺構実測図のトレス、図版作成、原稿清書、報告書刊行。

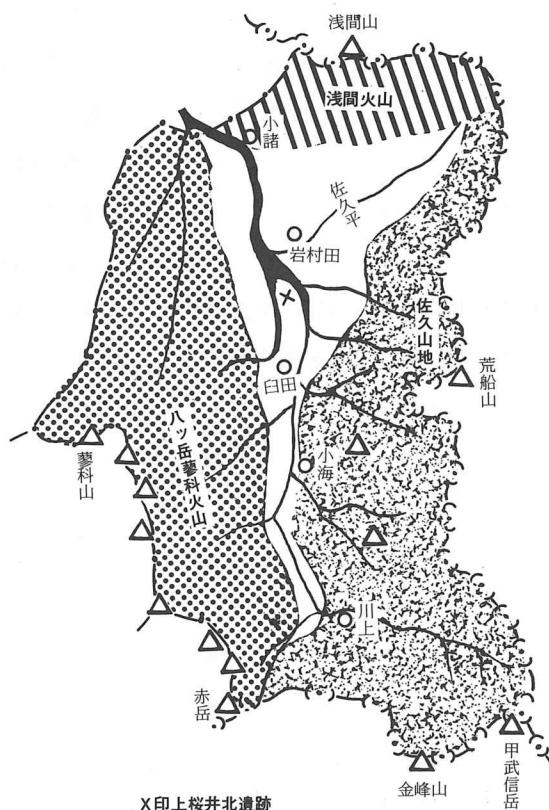
(高村博文)

II 遺跡の環境

1 上桜井北遺跡付近の自然環境

佐久平は、長野県下の四大高原の一つで信濃川の上流千曲川流域に展開する標高700m内外の高原性盆地である。千曲川は佐久山塊の南端、甲武信国境にそびえる甲武信ヶ岳に源を発し、南佐久郡川上村地籍においては西流し、同村樋沢附近で流路を北に変え北流しつつ南佐久郡下のほぼ中央を貫き佐久平に流出している。佐久市内に入っては流路を西北に変え、再び北流して小諸市に出、小県郡方面に流下している。

その間に左岸には黒沢川、矢出川、高見沢川、湯川、大月川、本間川、大石川、片貝川、鹿曲川、右岸には相木川、抜井川、雨川、内山川、志賀川、湯川等、まことに多くの支流と合流し、広葉樹の葉脈状を呈して佐久地方を貫流している。この流域に発達した佐久平は東から南は関東山地の最西端を構成する佐久山塊に、東は八ヶ岳、蓼科火山群の噴出物に、北は浅間火山の堆積物に囲まれて、ほぼ三角形をなしている。これ等周囲山地の地形、地質について概説すると次のようである。



第3図 佐久平地形区分図 (1 : 600,000)

① 佐久山塊地域（東南側）

佐久山塊北部は、志賀、内山、田口地区で第三紀層内山層一中新統一を基盤として、その上部に荒船火山の噴出物である溶結凝灰岩（佐久石）が厚く広く堆積している。この溶結凝灰岩は俗称「佐久石」とも呼ばれ、古くから広く石材として利用されているために、この岩石の分布縁辺部には石材採掘場が安原、新子田、内山、三反田、羽黒下附近に多数見られる。

荒船火山は古い第三紀の火山で、いわゆる荒船山（京塚、ともえ岩）を主峰とする解折火山で浸蝕、分解が進み火山形態は復元できないが、妙義附近まで続く一連の大規模火山と考えられている。この火山の最後期の噴出物は荒船玄武岩でこの地域の各尾根山嶺部に分布している。

これ等の分布地域は志賀川、内山川、雨川の浸蝕作用が進み険峻な地形を作り、その代表的なものが信州耶馬溪と称される内山峡や闘伽流山の景勝地を作っている。

佐久山地南部は、佐久町大日向、南北相木、川上地方で一般に秩父古生層・中生層の分布地域で構成する岩石は、チャートを主として硬砂岩、粘板岩、輝緑凝灰岩、瓦岩、砂岩、礫岩、石灰岩でその一部には流紋岩、蛇紋岩、石英閃綠岩、花崗岩等の火成岩の進入も見られる。従ってこれらの接触部には接触変質地帯が構成され、小規模の鉱山ができ各種鉱物鉱石を産出している。大日向鉱山、相木鉱山、川端下鉱山がその代表的なものである。

この部分の山地は、抜井川、相木川、千曲川最上流部の流域地域で浸蝕と断層などによる地形の削剥が進み、満壯年期の地形を呈しており、山は高く、谷は深く、急流飛瀑も多い。高く残されたものをあげれば、茂来山（1717）、御座山（2112）、金峯山（2695）、国師岳（2592）、甲武信ヶ岳（2483）である。

② 八ヶ岳、蓼科火山地域（西側）

ホッサマグナ中央部に第三紀末以来噴出した富士火山帯に属する火山地域で八ヶ岳、蓼科火山群と呼ばれ、南部から赤岳（2899）、横岳（2830）、硫王岳（2742）、天狗岳（2645）、中山（2493）、茶臼山（2383）、横岳（2472）、大岳（2384）、蓼科山（2530）等である。

南北一列にならび諏訪と佐久の分水嶺を形作っている。これらの火山は初期噴出物を主として泥流、集塊岩、凝灰質礫岩となって佐久平周辺部まで流出堆積しており、火山末端地形の段丘となっている。それより上部は各種安山岩の溶岩流が分布し、最上層部は火山灰源のローム層がおおっている。火山が大規模であることと、浸蝕がさほど進んでいないために山嶺部の一部を除けば地形は一部幼年期状の部分も残り、なだらかな傾斜をつくっており、山麓部は草地牧場に利用されている所もある。この末端段丘上が佐久における縄文遺跡の残された地域である。

③ 浅間火山地域（北側）

佐久平北部にそびえる浅間山（2542）は、洪積世の若い火山で三重式コニーデ式火山である。第一次の黒斑火山は噴火口の直径4000m、標高3000m級の成層火山であったものと考えられ、噴

出物も群馬県吾妻川、佐久地方では千曲川の流路附近までも達している。噴出当初はこの附近は浅い湖沼地域と考えられ、火山弾、火山砂の灰はその中に沈下して水平層となって浅間火山の基盤となっている。中込原台地を形成している湯川層は凝灰岩、凝灰砂岩、礫岩でできており、その中に自然木炭、流木をもっていることがこれを物語っている。

黒斑火山形成後火口カルデラを中心にして断層、爆裂火口等の破壊作用が続き、大規模の泥流の流出があり、これも千曲川筋まで及んでいる。塚原泥流がこれにあたるものであり、佐久平北部、中佐都附近の流れ山を形成している。この流れ山の一部は古墳に利用されているものもあり、塚原・平塚など部落名となって残されている。

第二次前掛火山以後は相当大きな噴火でも火碎流の流出、火山灰砂の降下程度で佐久平の地形に影響を及ぼすような活動は見られない。

以上三方向にとりまかれた佐久平は、臼田町稻荷山を頂点として、小諸一軽井沢の線を底辺とした逆三角形をなしており、雨川、内山川、志賀川、湯川、片貝川合流点附近には谷口扇状地が発達し、三角形の縁辺部には洪積段丘が形成されている。この段丘末端には地下湧泉がでている所が多い。

佐久平中心部の野沢平は標高 660 m内外の沖積平地千曲川の氾濫原で、大部分は千曲川の影響下で一部西側片貝川筋を除くと旧河床礫の分布もそれを示している。ただし、現野沢北高校以西は片貝川氾濫原低湿地である。

当上桜井北遺跡附近は佐久平の中心的位置にあたり、千曲川氾濫原の真只中にあたる。

詳細に見れば、千曲川と片貝川の氾濫による競合地点の境に出来た僅かの微高地の東側に位置していると言い得る。現地形で見れば、この競合部分の僅かに高い部分は現在部落及畠地となっており、低い部分は水田が分布している。

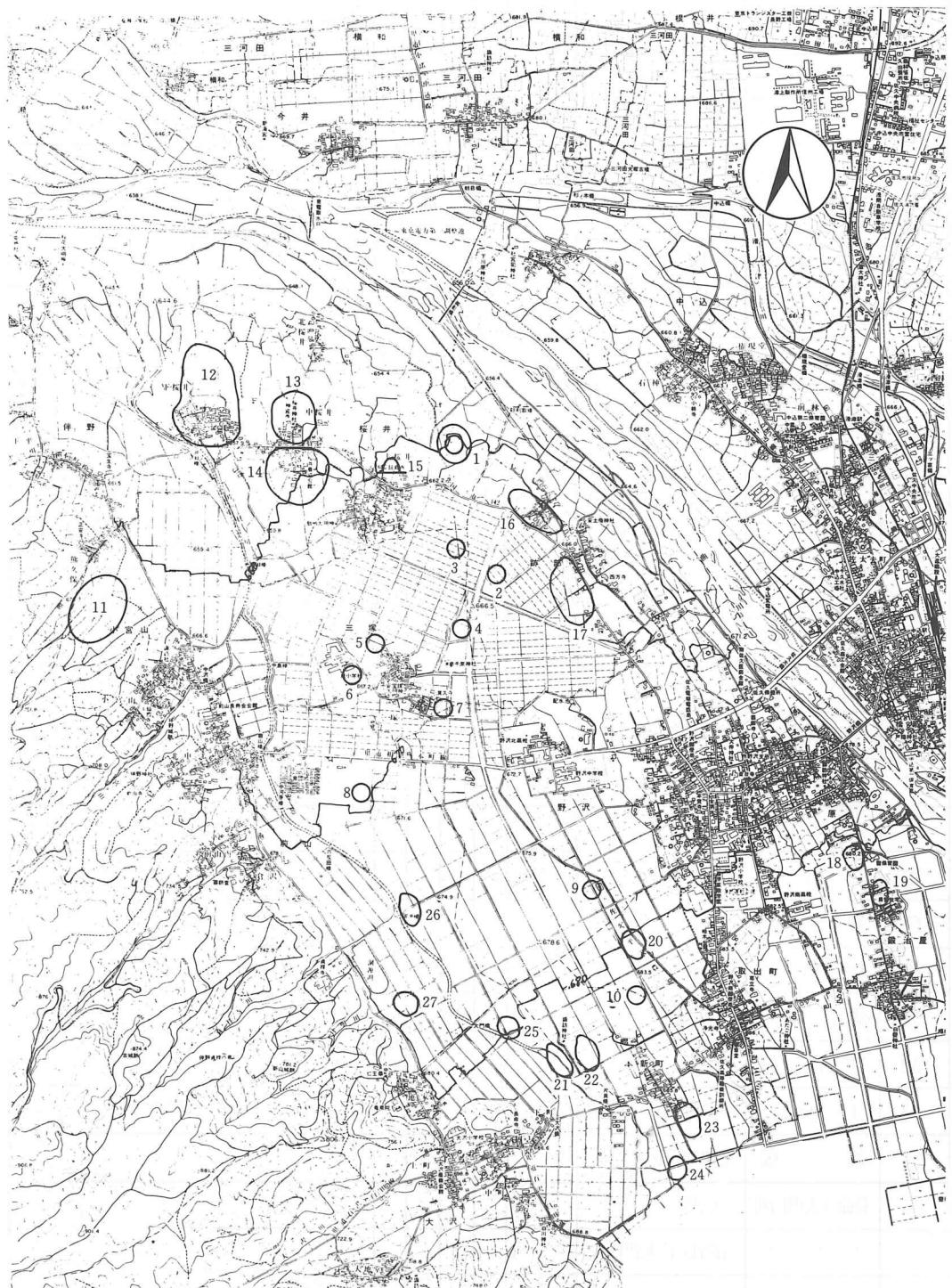
今回の発掘に際して、表土耕作土を除去した下部から露出する河床礫の岩質その他を見ても、現千曲川床礫の形質とほぼ等しい。このことからも、この附近は千曲川の氾濫原であったことが証拠づけられる。

(白倉 盛男)

2 歴史環境

1) 周辺遺跡

長野県佐久市大字桜井字橋詰に上桜井北遺跡は所在する。佐久市は、東西28.3km・南北22.7km・総面積 193.1km²を測る広域な市で佐久平の大部分を占める。佐久市の平坦部を地形的に大別すると、3地域に分けられる。第Ⅰ地域として、浅間山系の火山灰流層に覆れた、旧浅間町地域が



第4図 周辺遺跡分布図 (1 : 40,000)

(1)
第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺 跡 名	所 在 地	立 地	縄	弥	古	歴	備 考
1	上 桜 井 北	桜井字上桜井	微高地	鬼高後葉~国分期		S 52年	8 ~ 10月発掘調査	(121)
2	跡 部 町 田	跡部字町田	"	鬼高中葉		S 50年	12月 "	(123)
3	三 塚 町 田	三塚字町田	"	鬼高期		S 49年	11~12月 "	(123)
4	市 道	三塚字市道	"	和泉期~国分期		S 49年	8 ~ 9月 "	(112)
5	三 塚 鶴 田	三塚字鶴田	"	国分期		S 50年	5月 "	(113)
6	泉 小 学 校	三塚	"	和泉期~鬼高期		S 40年	12月 "	(7466)
7	三 塚 三 塚	三塚字参千束	"	鬼高期		S 49年	1月 "	(114)
8	中 道	前山字中道	"	鬼高期~国分期		S 46年	11月 "	(8887)
9	儘 田	取出町	"	国分期		S 45年	9月 "	(8881)
10	高 畑	本新町字高畠	"	?		S 44年	11~12月 "	(8878)
11	後 汚	小宮山字後汚	台 地	縄文前期~国分期		S 51年	10~S 52年 6月 "	(168)
12	下 桜 井 北	桜井	微高地		○			下桜井北一帯が遺跡である (118)
13	宮 浦	桜井字宮浦	"	○	○			(119)
14	中 桜 井 南	桜井	"	○	○			(120)
15	平馬塚古墳	桜井字上桜井921	"		○		古墳	(122)
16	跡 部 優 田	跡部字優田	"			○		(107)
17	金 山	跡部字金山	"		○	○		(110)
18	社 宮 寺	原字社宮司	"		○			(117)
19	鍛 治 屋	原	"		○			(8873)
20	伊 勢 道	本新町伊勢道	"		○			(8879)
21	諏 訪 社 西	大沢	"		○			(8884)
22	諏 訪 免	本新町諏訪免	"		○			(8880)
23	上 木 戸	本新町上木戸	"		○			(8876)
24	境 塚	本新町滝塚付近	"		○			(8875)
25	長命寺大門口西	大沢	"		○			(8885)
26	大 門 下	前山字大門下	"		○	○		(175)
27	御 岳	前山字御岳	"	○				(191)

ある。この地域には随所に「田切地形」が見られる。第II地域として千曲川東岸の複合扇状地がある。千曲川氾濫源に香坂川・内山川等が注ぎ込み浸蝕堆積されたものであり、一部は近年まで湿地帯であった。第III地域として、千曲川西岸の臼田町を頂点とする三角形の沖積地がある。千曲川に沿った帶状の微高地と片貝川流域の低湿地とが観察できる。

上桜井北遺跡は、第III地域の帶状微高地上に位置している。この地域はおおむね北方向の幾状もの帶状微高地が観察できる。

取出から桜井にかけたこの地帯には、先史・原史時代の人々の生活の痕跡が多数残されている。まず縄文時代の野沢宿裏遺跡、桜井の宮浦遺跡で中期後半の加増利E期の遺物が見られるが、この時代の遺跡が多く存在するのはやはり西方の蓼科山・八ヶ岳山塊より平地に伸びる舌状の台地上である。小宮山の後沢遺跡では、前期・中期の住居址が9軒検出されている。

帶状微高地上に本格的に人々が居住するようになったのは、弥生時代であり灌漑用水が豊富に得られる土地に臨んだところに集落が営まれた。この地帯では、弥生時代の中期・後期特に、後期の遺跡がかなり存在する。町田遺跡では昭和の初年に八幡一郎氏によって、弥生時代中期の「町田式土器」として注目された資料が出土している。桜井の下桜井北遺跡からは、栗林式土器と百瀬式土器が出土している。後期の箱清水式期の遺物は泉小学校周辺から特に豊富にみられるが、確認された遺構は未だない。⁽²⁾ 西方の台地上の後沢遺跡では、弥生時代中期～後期の住居跡30軒が検出されている。

つづく古墳、歴史時代に入ると一層集落として、利用されたのであろう。この時代の遺跡は近年の佐久平圃場整備事業の影響で数多くが発掘調査されている。順に列記してみると、儘田・中道・三塚町田・鶴田・跡部町田・市道遺跡がある。検出された遺構は、儘田遺跡で平安時代国分期の住居址4軒、中道遺跡で古墳時代鬼高二期2軒と国分期5軒である。三塚遺跡では、鬼高二期の住居址が2軒・国分期が1軒、三塚町田遺跡においては鬼高二期の住居址が1軒確認されている。鶴田遺跡で国分期4軒、跡部町田遺跡では鬼高二期の住居址が5軒、さらに市道遺跡においては、和泉期1軒、鬼高二期7軒、国分期の2軒の住居址が検出されている。⁽³⁾ これらの集落は、古墳時代や歴史時代の各時期における複数の集落なのか、または単一の集落なのかは、現状の点と点の発掘調査では推定の域を脱し得ない。残された資料を密に調査し集落構造の詳細な解明にあてなければならない。

(林 幸彦)

2) 桜井の歴史 一原始時代から中世まで一

八月下旬から10月初旬にかけて佐久市桜井地区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査が上桜井北遺跡に於て行なわれ、その出土遺物は古墳時代から中世に及んでいる。そこでこの時代に於ける桜井地区の自然、歴史的環境を文献、伝承の面から考察して、考古学的調査の成果と合

わせて究明する一資料としたい。

桜井地区はその東と北を千曲川が大きくめぐり、その西は片貝川が北流して、北西の岸野付近で千曲川に合流している。その土地は大部分が千曲川によって運ばれた沖積地で、北に向って緩傾斜し、いわゆる穀倉野沢平の扇端をなしている。そのため湧水が豊富で水利に恵まれ、佐久鯉の産地として名高い。特に上桜井は湧水が多く、古来極寒のときも川に氷の張ることがないといわれている。上桜井北遺跡はこの平地の末端に近く、全面を礫層に覆われている。大小の礫はすべて丸味を帯びた川原石で、その岩石の組成の割合は千曲川の礫群と同様であり（白倉盛男氏）千曲川の氾濫によるものであることは明らかである。西方下桜井方面は片貝川の流域で、前山・岸野地区と共に佐久地方における古代水田のもっともはやく開けた土地である。

この様な自然環境のもとに、桜井地区はほとんどその全面にわたって弥生時代・古墳時代の遺跡が分布している。これに対して縄文時代の遺跡は中桜井の宮浦にわずかにみられるに過ぎない、古墳は平馬塚がある。

桜井・前山・岸野・大沢など片貝川下流域は、佐久平における古代水田の最もはやく開けた地域であり、弥生時代後期には下桜井北・中桜井宮浦・上桜井北・町田・十二塚等に集落が形成されていた。古墳時代にはこれらの集落はさらに拡大されていった。

大和朝廷によって、国・郡・郷・里制が布かれると、この片貝川下流域一帯の水田地帯には刑部郷が設置された（和名類聚抄）。大和朝廷における有力氏族の大伴氏の一派は、はやくより中信松本平に入って筑摩の県の主宰者としてその勢力を張っていたが、その一部はさらに東信地方に入った。小県郡海野には平安時代のはじめ大伴連忍勝というものが氏寺を建てていたことが知られている。（日本靈異記）。彼らの一族は佐久郡にも入ってその勢力にものをいわせて、刑部郷を中心として付近の沖積平野の開墾を行ない、律令制度の崩壊につれてこれを莊園化してついに伴野庄が成立したのである。延喜式の佐久郡大伴神社も彼等大伴氏の一族によって祀られたものであろう。

伴野庄はやがてその在地領主権を確保するために、中央の有力貴族である藤原氏に寄進され、それはまた平安時代末期にはさらに院領に寄進されている（大徳寺文書）。

平安時代末期には、次第に実力を養ってきた地方の農民地主が武士化して、源氏・平氏を棟梁として、ついに公家にかわって政権を握ることになる。保元・平治の乱には根々井・根津・平賀など佐久武士が活躍している（保元物語・平治物語）。さらに以仁王の令旨を奉じて平家追討の旗あげをした木曾義仲軍では、佐久の武士団がその主力を構成している。根々井・楯の父子を中心に、八島・根津・海野・落合・小室（諸）・望月・志賀・平原などがある。その中に桜井太郎、同次郎の名があるのに注目しなければならない（源平盛衰記）。望月牧を中心とする佐久の牧馬と、佐久平の米の生産力が佐久武士団の戦力をここまで高めたのである。桜井太郎、次郎も北陸

道を怒濤のように進撃する木曾軍の武将として、桜井郷の一族郎党を率いて平安の都に旗を立てたことであろうが、木曾軍の敗戦によって雄図むなしく、その後どうなったか知ることができない。源頼朝は平家討滅の戦功によって、佐久郡伴野庄の地頭職を甲斐源氏の小笠原長清に与えた（吾妻鏡文治二年十月十七日の条）。

長清は頼朝の信任厚い鎌倉幕府の重臣で、甲斐・信濃・河波等の諸国に多くの所領を有したが、そのうち佐久郡伴野庄を六男時長に大井庄を七男朝光に与えた。伴野庄地頭小笠原時長、時直の父子二代は小笠原惣領職をもって威勢頗る盛んであり、騎射に長じて典型的な鎌倉武士であった。弘安二年（一二七九）十二月、一遍上人が伴野庄を訪れ踊り念佛を行ったのは時直のときで、（一遍上人絵伝）野沢の金台寺はそのとき時直によって念佛道場として開基され、跡部の踊り念佛はその伝統を今に伝えているものとされている。また跡部の鐘鋸場地籍はこのとき伴野時直が金鑄を鋸させて一遍上人に寄進した鋸鉄場の跡であるといわれる。

伴野小笠原氏は時直の子長泰のとき、弘安八年（一二八五）十一月、安達泰盛の乱（霜月騒動）に連座して、父子五人北条氏のために誅せられ壊滅的な打撃を受けてしまった。

元徳元年（一三二九）三月の諏訪神社上社の五月会頭役結番の中に、佐久郡伴野庄桜井・野沢・臼田郷丹波前司跡とある。（守矢文書）丹波前司は丹波守であった北条氏をさすものと考えられるから、霜月騒動以後は桜井郷等は北条氏が地頭になっていたものと思われる。

元徳二年花園上皇は佐久郡伴野庄を京都の大徳寺に寄進した。元弘三年（一三三三）五月後醍醐天皇は鎌倉幕府を倒すと、その六月に伴野庄地頭職も大徳寺に寄進した。

建武二年（一三三五）に伴野庄の現地の役人が大徳寺に伴野庄の年貢の数量を報告しているのを見ると、野沢郷千三百貫文、伴野上中下三ヶ村（現在の小宮山を除く旧前山村全体）千貫文について、桜井郷八百余貫文とあり、桜井郷が伴野庄内の大村であったことがわかる。しかも郷内に領主の直営地である佃も二町歩あり、桜井郷が地味の肥えた良田であったことを示している（大徳寺文書）。

そのころ伴野出羽弥三郎長房が、伴野庄内で勢力をもりかえし、伴野庄の年貢を横領して大徳寺へ送らなかったので、大徳寺から朝廷や幕府に訴えたが、長房の代官がなかなかいうことをきかなかった（大徳寺文書）。

伴野長房は足利尊氏に属し、尊氏の重臣高師直と親しかったらしい。彼は都京の工御門油小路に邸をもち、伴野庄には代官を置いて管理させた。興国六年（一三四五）八月には足利尊氏、直義が天竜寺供養の儀にのぞむにあたってその先陣隨兵を勤めるなど、かなりの勢力をもっていたが、正平八年（一三五三）六月九日長房は足利義詮の軍に属して京都の神楽岡で、南朝方の楠正儀らと戦い、敗れて戦死し、彼の工御門油小路の邸も焼失した（園太曆）。

戦国時代には伴野光利が前山城を築いて、光信・貞祥・信守と伴野氏は代々前山城によった。

伴野庄の各郷村には一族や家臣を代官として分置してその管理にあたらせた。諏訪御符礼之古書をみると桜井郷の代官として次のような名が見える。康正二年（一四五六）と寛正六年（一四六五）鷹野中務満吉。応仁元年（一四六七）入道沙弥道清、文明四年（一四七二）鷹野中務入道沙弥道中子息鷹野又五郎橋棟吉。文明十二年（一四八〇）鷹野美濃守満守、長亨二年（一四八八）土佐守棟信、丹後守棟清等で、戦国時代のはじめの頃は桜井郷は鷹野氏が前山城主の代官として管理にあたっていたものである。

天正十年（一五八二）前山城の落城の際に伴野氏の家臣、桜井郷の桜井其の子、諏訪十という九才ばかりの童児が遊びから帰って、家の門戸が閉ざされているのをみて、父の教えに従って畦道づたいに前山城にいき、途中敵兵に追われながらも危うく伯父に助けられて城中に入り、激しい合戦の模様を目撃したことが四隣譚叢に書かれているが、当時の地方武士＝農民の姿をありありととらえることができる。ふだんは土地を耕作し、いざといえば城にかけつける兵農未分化の時代であったのである。

以上が中世に至るまでの桜井郷の概略であるが、さいごに桜井村の寺院関係についてみると次のようである。

平馬山延命寺は、寺伝によれば平安時代に創建され、当時堂宇すこぶる広大であったが、天正年間に焼失した。これを天正十一年（一五八三）に平馬城主源実相が、じぶんの居城の丘の一部に中興開基したものであるという。

桜井神社諏訪神社の西に神宮寺がある。寛永六年（一六二九）検地のときは神久寺といって諏訪神社の別当地であった。その他下桜井に金剛寺、桜井新田に極楽寺があったが、この二つはいずれも江戸時代になっての開基で、いまは廃寺となっている。

伴野庄桜井郷が上桜井・中桜井・下桜井の三ヶ村に分かれたのは江戸時代の寛永六年になってで、明暦三年（一六五七）には桜井新田も一村をなし四ヶ村となった。明治八年三月これらが合併して一村となり桜井村と称した。

(井出正義)

註1 県文化課作成「佐久市遺跡分布図」、上桜井北遺跡試掘調査報告書

註2 竹内恒「儘田遺跡発掘調査報告書」 昭和45年 佐久市教育委員会

註3 藤沢平治「市道遺跡調査報告書」 昭和50年 佐久市教育委員会

III 層序

上桜井北遺跡は、IIの1 自然環境にあるように千曲川の氾濫原の微高地上に位置し、発掘区よりわづか 100m余り北東には、現千曲川が流れている。発掘区の微地形は 670mの等高線が舌状台地状に伸びた上にあり、南方より漸次低くなっている。又微視的視野から観察すると、現千曲川河床から数えて第2段丘上に位置し、わずか30m余り南西には第3段丘が形成されている。これらの段丘は現千曲川の流路と概むね平行に北西方向に伸びている。

全体層序（第5図）

I層（表土）は、畑の耕作土で褐色を呈し、小礫を少量含有した砂質である。I'層は同じく耕作土であるが、茶褐色を呈し、小礫を多量に含有して粘質があり硬い土層である。II'層は、H 4号住居址上部に見られた土層で、赤褐色を呈し砂質である。鉄分を含有しており西側の谷地付近が田であったことからその床土と思われる。

II層は、遺構覆土を便宜的に総称して用いた層で、個々の覆土については第2表にまとめてある。

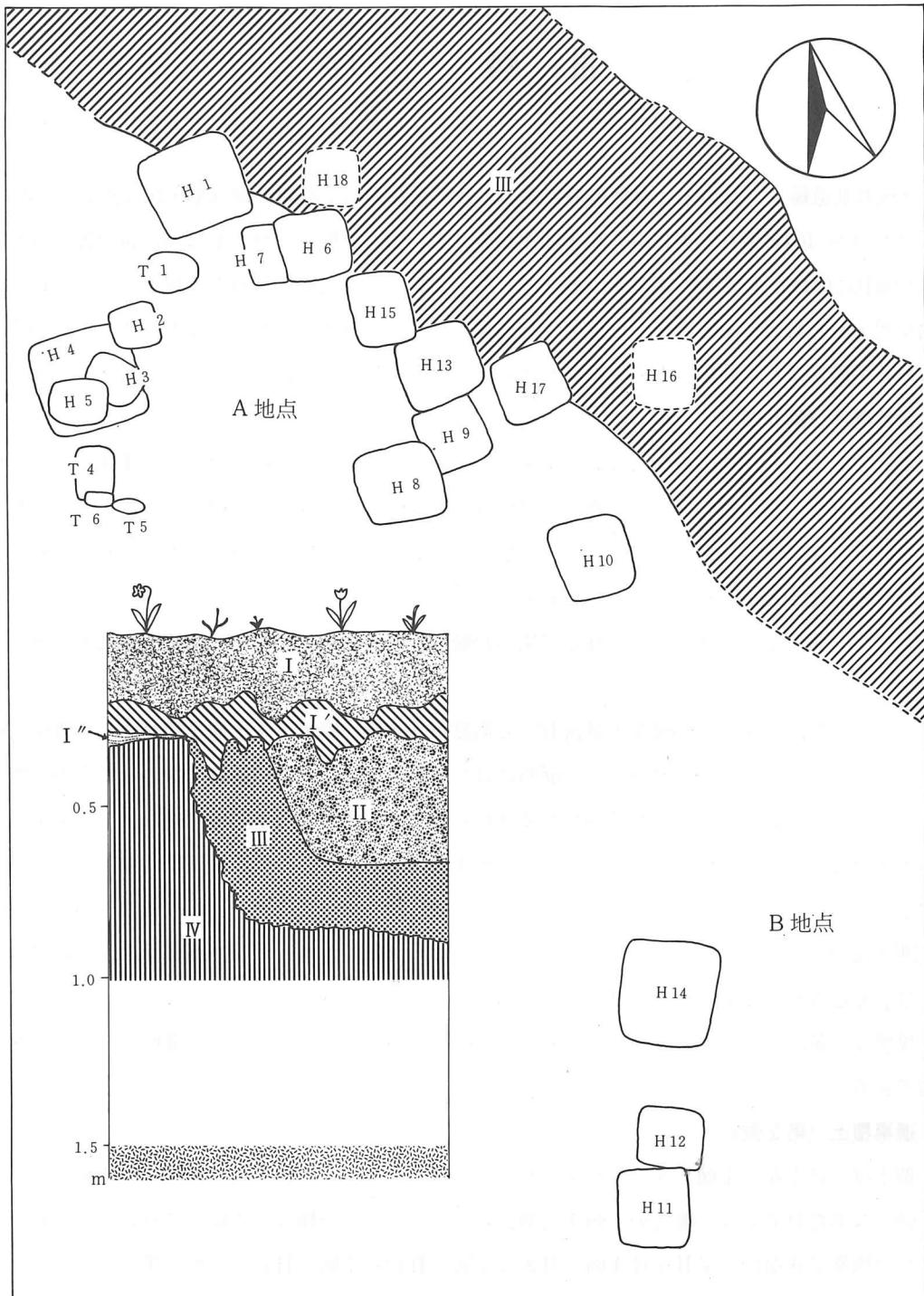
III層は、黒褐色を呈し小礫を少量含有して粘質があり硬い層で、本土層を切り込んで遺構が構築されていることがわかっている。平面的には、発掘区A地点内を巾約16mをもって北西に伸びている。（第5図斜線部分）。本遺跡が形成される前、千曲川の支流が凹地を残し、その後黒色系の土層が流れ込んだと解される。あるいは、現千曲川第1、2、3段丘（微視的視野）が北西に伸びていることを考えあわせると、第3段丘を形成しつつあった時期に、本流の底面の一部が深く凹地を形成したと、考えることも可能である。このIII層を地山とする遺構の検出は土質の差異がほとんどなく困難を極めた（H 1、6、13、15、16、17、18号住）。

IV層は、黄色を呈した砂礫層で旧千曲川の河床と思われ、ほとんどの検出遺構の地山となる土層である。

遺構覆土（第2表）

覆土は、ほとんど1層しか分かれず、わずかにH 1、3、4、10、11、15号及びT 1号が2～3層になるだけである。覆土の土層を色調、質、含有物等に分類して比較してみたが、時間的同一性は推察できない。又H 6号1層、H 8号1層、H 10号1層、H 15号1層、T 3号及びT 7号の覆土には黄色砂粒子がかなり混入しており、人為的堆積の可能性が強い。（高村博文）

註1 第2図参照



第5図 上桜井北遺跡土層図（平面図1：400）

第2表 遺構覆土層位一覧表

遺構名	覆土層位	色調	質	含有物		備考
				礫	その他	
H 1	1	漆黒色	やや粘質	多量	—	粒子細い
	2	"	粘質	含まず	—	Soft
	3	褐色	砂質	—	—	Soft
H 2	1	黒褐色	やや粘質	小礫多量	—	—
H 3	1	漆黒色	粘質	小礫	—	—
H 4・5	1	黒色	やや粘質	"	—	粒子粗い H 5号覆土
	2	"	"	小礫多量	—	—
	3	"	粘質	—	—	—
H 6	1	黒褐色	粘性なし	小礫	白色及び黄色 粒子少量	Soft礫群を有す
H 7	1	漆黒色	"	"	—	Soft
H 8	1	黒色	やや粘質	礫含有少ない	黄色粒子	礫群を有す
H 9	1	"	"	礫多量	—	—
H 10	1	"	粘質なし	—	黄色粒子多量	礫群を有す
	2	褐色	砂質	—	—	—
H 11	1	黒褐色	—	—	黄色砂層 ブロック状	T 7号覆土
	2	"	—	—	黄色砂粒子	—
H 12	1	漆黒色	やや粘質	小礫多量	黄色粒子	T 3号覆土
	2	黒褐色	粘質	"	—	Hard
H 13	1	"	やや粘質	"	—	—
H 14	1	黒色	砂質	礫少量	—	Soft
H 15	1	黒褐色	—	小礫多量	黄色砂粒子	—
	2	漆黒色	粘質	—	焼土粒子 炭化粒子	—
H 17	1	黒色	砂質	小礫多量	—	—
T 1	1	漆黒色	"	—	—	—
	2	黒褐色	"	—	—	礫群を有す

IV 遺構と遺物

1 住居址

1) H 1号住居址

遺構（第6図）

本住居址は、3・4・5—N・O・Pグリット内において検出、A地点北西端に位置する。

プラン検出の際、北壁中央付近にT8号特殊遺構及びプラン中央覆土上部にT9号特殊遺構が存在する。又南壁、西壁及び東壁の南部はVI層を切り込んでの落ち込みであるため、明確に検出でき、東壁の北部から北壁にかけてはIII層を切り込んでの落ち込みであったため検出しにくく手間だったが、ほぼ上面にて確認される。

平面プランは、北壁 550、南壁 480、東壁 465、西壁 475cmで、北壁長がやや長い隅丸方形を呈し、主軸方位はN—5°—Wを示す。

壁高は、確認面から12.5～24.5cmを測り、ほぼ垂直に近い立ち上がりを見せており。床面は河床礫の特質から、露出した礫の凹凸が激しく、部分的に黄色を混入して踏み固められたと思われる敲き床も見られる。

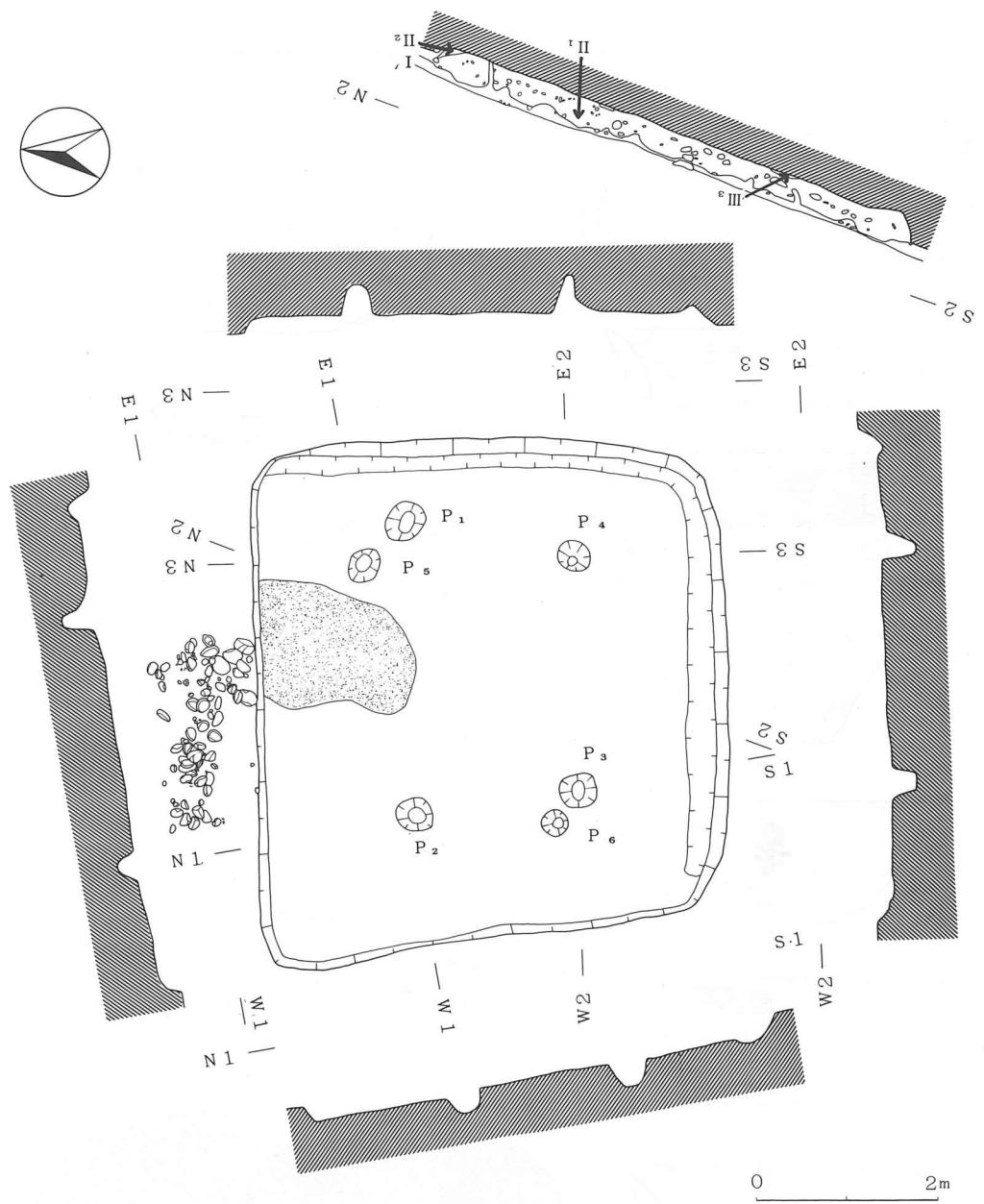
カマドについては判然としないが、北壁中央部付近の床面から、極めて僅少ではあるが焼土粒子の散布が第6図に示してある範囲にわたって観察され、T9号特殊遺構の存在も考え合わせると、北壁中央部付近にカマドが構築されていた可能性が強いと思われる。

ピットは、6個確認されており、このうちP₁、P₂、P₃、P₄は断面を観察するといづれも壁面外に外傾しており、位置、深さ等から考えて主柱穴と思われる。他の2ヶについてはどのような性格をもつか推察できない。なおP₁～P₄の規模は、P₁ 長径50cm、短径40cm、深さ35cm・P₂ 長径40cm、短径38cm、深さ25cm・P₃ 径40cm、深さ30cm・P₄ 径35cm、深さ40cmを呈す。

その他、南壁から東壁に沿ってのみ、幅15～30cm、深さ約10cmを計る壁溝が巡っている。

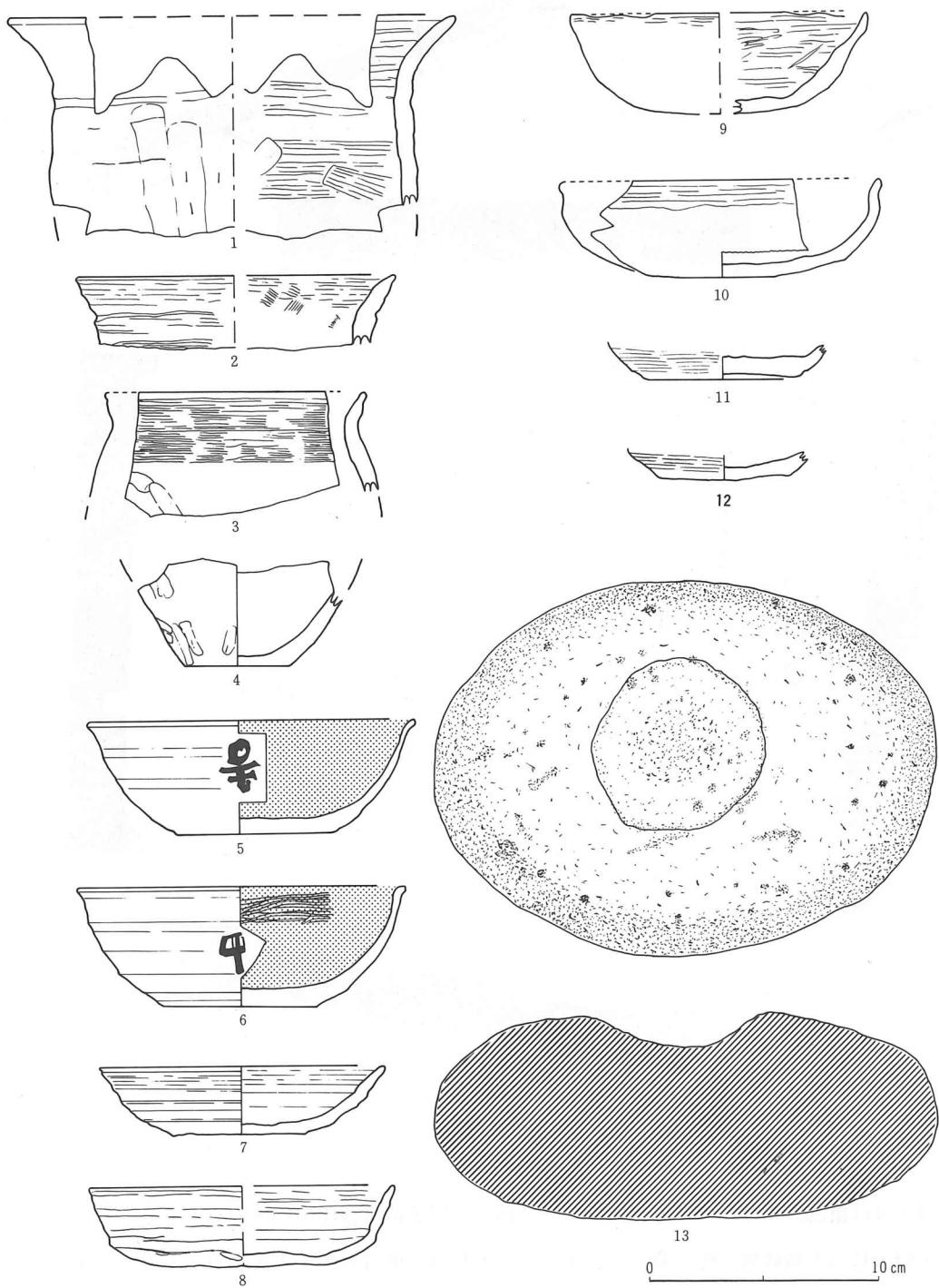
遺物（第7図 1～13）

本住居址の出土遺物は、土師器、須恵器、凹石である。図示したものは、甕形土器3点、小形甕形土器1点、壺形土器7点、須恵器壺形土器1点、凹石で、他に長胴を呈す甕形土器と胴が丸味をおびる甕形土器が出土したが実測不可能なものである。



第6図 H 1号住居址実測図 (1:80)

1・3・4はIII₁層の下位から、9は床面、8・10は住居址のほぼ中央の床面直上より出土した。
 2・7・11・12は土層観察の際、覆土上位より、5・6は北壁付近覆土下部から出土した。1は口辺～胴上部であるが調整、残存部の器形から長胴の甕形土器とおもわれる。坏形土器は、8・9・10の3点が出土している。5・6は糸切りの平底を呈し、内面黒色化されている。ともに墨



第7図 H1号住居址出土遺物実測図 (1:3)

第3表 H1号住居址出土土器一覧表

捕獲番号	器形	破片分類	実測分類	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
7-1	甕	A 2 口 胴上	R	(20.0) — —	口辺部は外反し、頸部は屈曲をしない。	口辺部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴部ナデ	茶褐色 覆土
7-2	甕	A 2 口	R	(14.0) — —	口辺部に二条の沈線がみられる	口辺部ヨコナデ	口辺部ヨコナデ	茶褐色 覆土
7-3	小形甕	A 2 口 胴上	F	(12.0) — —	口辺部は短く外反する	口辺部ヨコナデ	口辺部ヨコナデ	4と同一個体とおもわれる。 覆土
7-4	甕	A 2 底	P	— — 5.0	平底を呈す	胴下部ヘラケズリ	胴下部～底面ナデ	3と同一個体とおもわれる。 床面より10cm上方II区
7-5	坏	A 12 口 底	P	14.5 5.0 7.0	口辺部は僅かに外反する。器肉は全体に薄く、底部は平底を呈する	ロクロ調整痕 糸切り底	ロクロ調整痕 内面黒色	墨書(吉)土器 I区覆土下部
7-6	坏	A 13 口 底	P	12.5 5.0 7.0	"	ロクロ調整痕 糸切り底	ロクロ調整痕 内面黒色	墨書(?)土器 I区覆土下部
7-7	坏	A 13 口 底	P	12.5 3.0 6.0	平底を呈し外反する。口辺部に統く。器肉は全体に薄い	ロクロ調整痕 糸切り底	ロクロ調整痕 内面黒色	覆土
7-8	坏	A 13 口 底	R	(13.0) 3.0 —	口辺部は緩く外反し、外稜を僅かに有する	口辺部はヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 底部ナデ	床面直上
7-9	坏	A 13 口 底	R	(13.0) 4.5 —	素縁口辺を有する	口辺部若干のヨコナデ 胴部～底部ヘラケズリ	口辺部～胴部ヨコナデ の後ヘラミガキ。口辺部～底部にヘラミガキ	口辺部～胴部 内面黒色 床面
7-10	坏	A 13 口 底	F	(14.0) 4.0 —	僅かに外反する口辺を有し底部は丸底	口辺部ヨコナデ	口辺部ヨコナデ	全体の磨滅が著しい 器面に化粧粘土 床面直上
7-11	坏	A 2 底	P	— — 7.0	—	—	—	覆土
7-12	坏	A 2 底	P	— — 6.0	—	糸切り底	—	覆土

書土器で5には「吉」という文字が倒置されて記されている。6は磨滅により判読不能である。

まとめ

本住居址は、検出遺構中では一辺約470cm前後の大型の住居址で主柱穴もはっきりしているがT9・10特殊遺構との切り合いによりカマドは検出されなかった。出土遺物中、床面及び床直の出土は坏(8・9・10)のみでいずれも鬼高期の特徴を有す土器である。また覆土下部より、ロクロ使用による墨書土器坏(5・6)が出土しているが、底部糸切りでありその上方にはT8号特殊遺構が有り、本住居址には伴なわないと思われる。

(武藤金、島田恵子)

2) H 2号住居址

遺構（第8図）

本住居址は、6・7-Pグリッドに位置し、全体層序の第IV層上面で確認された。西南隅でH 4号住居址と重複し、南側にはH 3号住居址が近接して存在する。また、約1m程北東にT 1号特殊遺構がある。西南コーナーのH 4号住居址との重複部分は、相互の覆土が黒色系統で類似していたため上面での新旧関係は明確に把握できなかった。

掘り下げの段階で、

はっきりと、つまりH 2号住居址は石組のカマドをH 4号住居址は粘土櫛のカマドを有しており、また、遺物の比較から本住居址が新しい遺構と判明した。しかし、重複部には砂地という条件も起因して貼床は認められなかった。

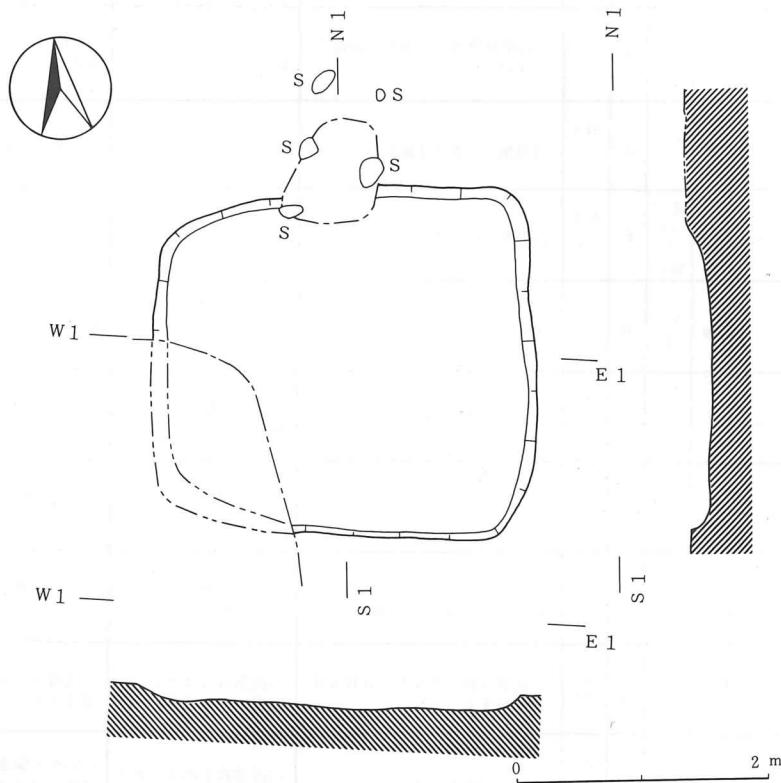
平面プランは、北壁 270cm、東壁 270cmの不整方形を呈す。主軸方位はN-4°-Eを示す。

覆土は単一の土層で、黒褐色を呈し少礫を多量に含んで、やや粘質を有す。

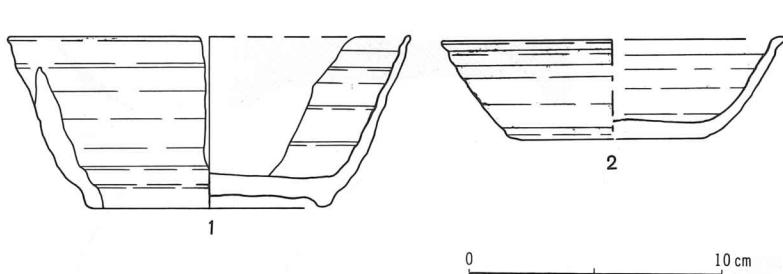
焼土・灰等は確認されなかつたが、北壁中央の5個の河原石はカマドの煙道部としての性格が想定される。確認面からの壁高は約17.5cmを測り壁は緩く立ち上がる。床面は河原石がみられ、全体的に砂地であるため起伏が著しく軟弱である。柱穴、壁溝等の付属施設は検出されなかつた。

遺物（第9図 1~2）

本住居址における出土遺物は、須恵器、土師器があるが器形が判明し図示可能なものは、須恵器高台付椀形土器1点、須恵器环形土器1点のみである。



第8図 H 2号住居址実測図 (1:60)



第9図 H 2号住居址出土遺物実測図（1：3）

1は、カマドの東脇床面直上から、2は、1の南側30cm程離れた床面直上より検出された。その他須恵器の小破片が若干出土しているが、器形は不明である。

第4表 H 2号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器形	破片分類	実割分類	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
9-1	高台付壺	A13 口 底	P	(16.0) 7.0 10.0	口辺部より直線的に胴下部に統 き、僅かにくびれ、底部は高台 を有す	口クロ痕	口クロ痕	青灰色 高台は貼付 床面カマド東脇
9-2	壺	A13 口 底	R	(14.0) 4.0 (8.0)	口辺部は外傾し口縁部は短く外 反する	口クロ痕 底部糸切りの後 一部ヘラケズリ	口クロ痕	青灰色 床面

まとめ

本住居址は、出土遺物が少なく壁等も貧弱であったが、耕作の深耕によって住居址全体が相当の破壊を受けていることに起因しているとおもわれる。遺構の遺存状態、出土遺物の少量さ等から遺構の所産時期は明確には断定できないが、石組状のカマドと想定される焼石の存在、床面直上の須恵器等から推して、国分期に比定されるとおもわれる。

(林 幸彦)

3) H 3号住居址

遺構（第10図）

本住居址は、7・8-Pグリッド、全体層序第VI層の上面において検出された。H 4号住居址の東壁を破壊して構築されており、床面はH 4号住居址の覆土下部にまで達している。また、南西側にはH 5号住居址が近接して存在する。

試掘トレーニチによって北壁の大部分を失っているが、東壁 260cm、南壁 300cmの概偶丸台形を呈す。主軸方位は、N—53°—Wを指している。覆土はI層で漆黒色を呈し、小礫を含むも粘質のある土層が堆積していた。壁高は確認面より南壁中央で17.5cm、西壁中央で15cmを測る。北壁から東壁にかけては緩やかに立ち上がり、南壁は比較的急に立ち上がっている。床面は河原石などが随所に存在して、全体に起伏が著しく、西コーナーに向けてやや傾斜している。東壁中央部には、3個の河原石が壁に密接して存在し、熱を受けた形跡がある。柱穴、壁溝等の付属施設は検出されず、前述の焼け石の存在がカマドを想定させるだけである。

遺物 (第11図)

1 ~ 2)

本住居址で図示し

得た土師器は、第11

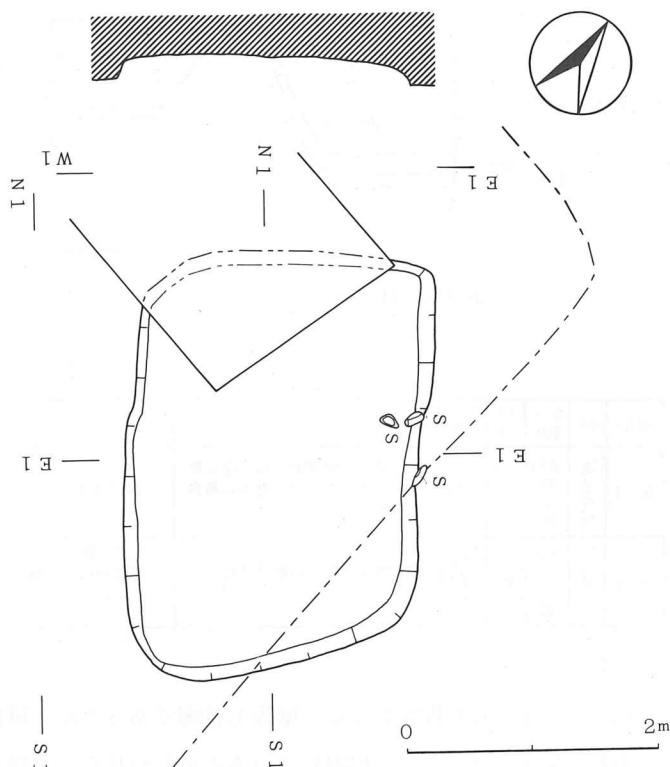
図1の台付甕形土器、

同図2の高坏形土器

がある。

1は、南隅床面直上、2はカマドと想定される位置より出土した。1の周辺から、6片の土師器片が出土したが、いずれも接合しない。その他床面直上より少量の土師器の破片が検出されたが、器形

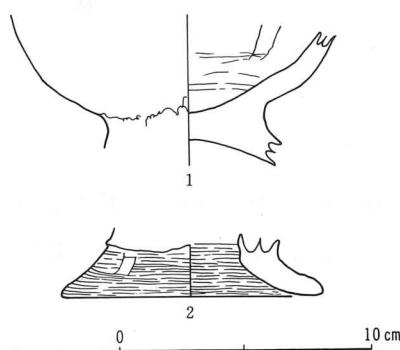
は不明である。



第10図 H 3号住居址実測図 (1 : 60)

まとめ

以上のように、本住居址からの出土遺物は微量ではあるが、床面直上から検出された土師器は、本住居址に直属するものと思われる。小片も含めた土器の特徴、また、H 4号住居址を切断している状態を考慮に入れると、本住居址が営まれたのは鬼高期後葉より遡らないとおもわれる。住居址の規模は、H 2号址とともに本遺跡の住居中もっとも小規模なものである。



第11図 H 3号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)

(林 幸彦)

第5表 H 3号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器形	破片分類 部位	実測 分類	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
11-1	台付甕	A 2 胴 1 台上部	P	— — —	—	ナデ 台部と底部との接合部 は指おさえ	ナデ	黒褐色 雲母を多量に含む 床面
11-2	高坏	A 2 脚	P	— 11.0	高坏の脚部と思われる。脚部は 短かい	木製工具によるヨコナ デ	木製工具によるヨコナ デ	黄褐色 カマド内

4) H 4号住居址

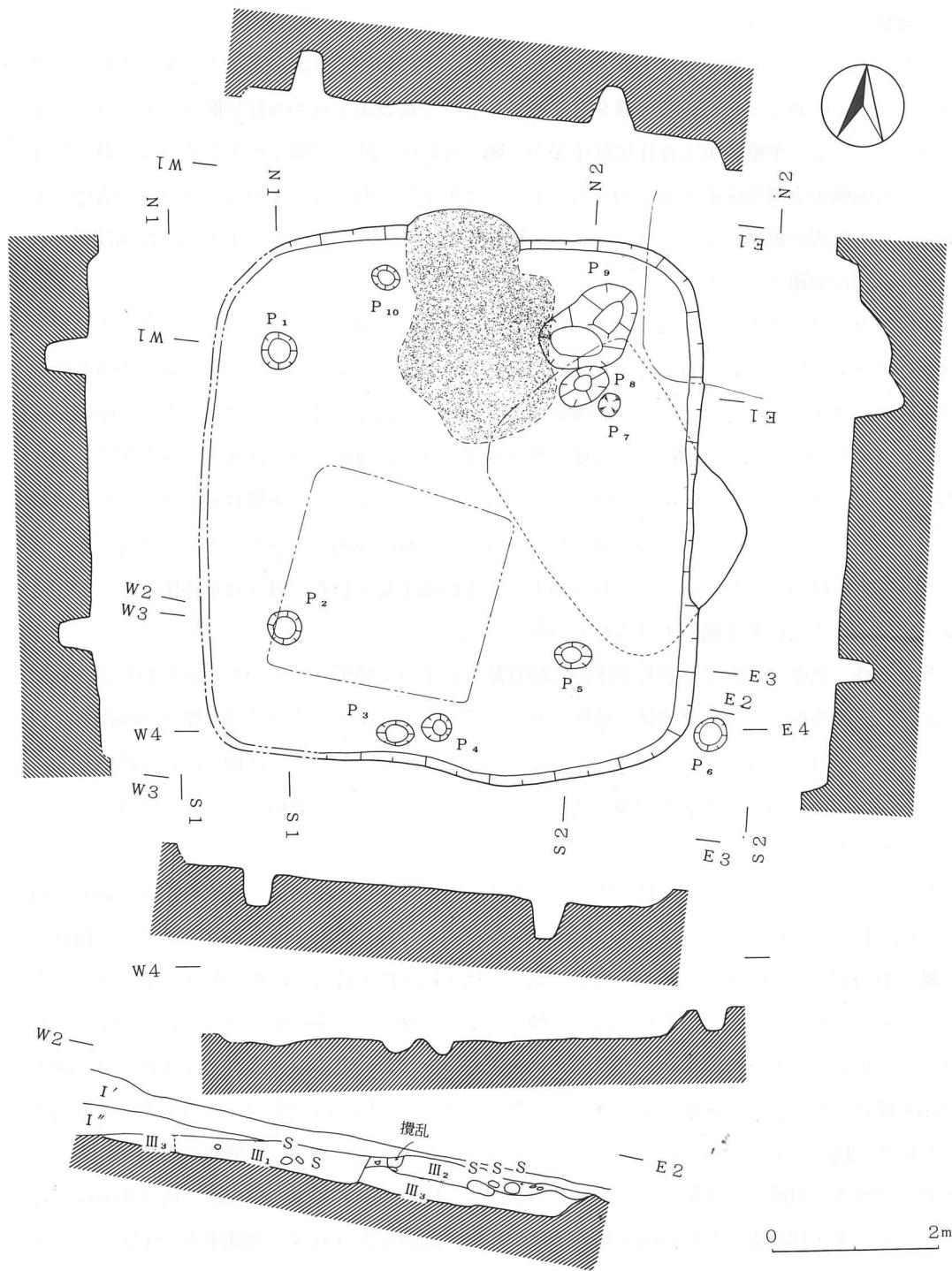
遺構（第12・13図）

本住居址は、7・8・9—P・Q・Rグリッドで、全体層序第VI層の上面より検出された。本遺跡の西端に位置している。北東隅をH 2号址によって確認面より10cm程切断されている。H 3号址によっても、東壁中央より住居址中央まで覆土を10cm程残して壊されている。又、H 5号住居址にも南側の大部を床面下まで切られており、重複関係を有しない部分は、カマドの周辺と南東コーナー近辺の範囲である。プランは、西壁が過去の水田耕作により表土下60~70cm深耕されており確認が困難であった。

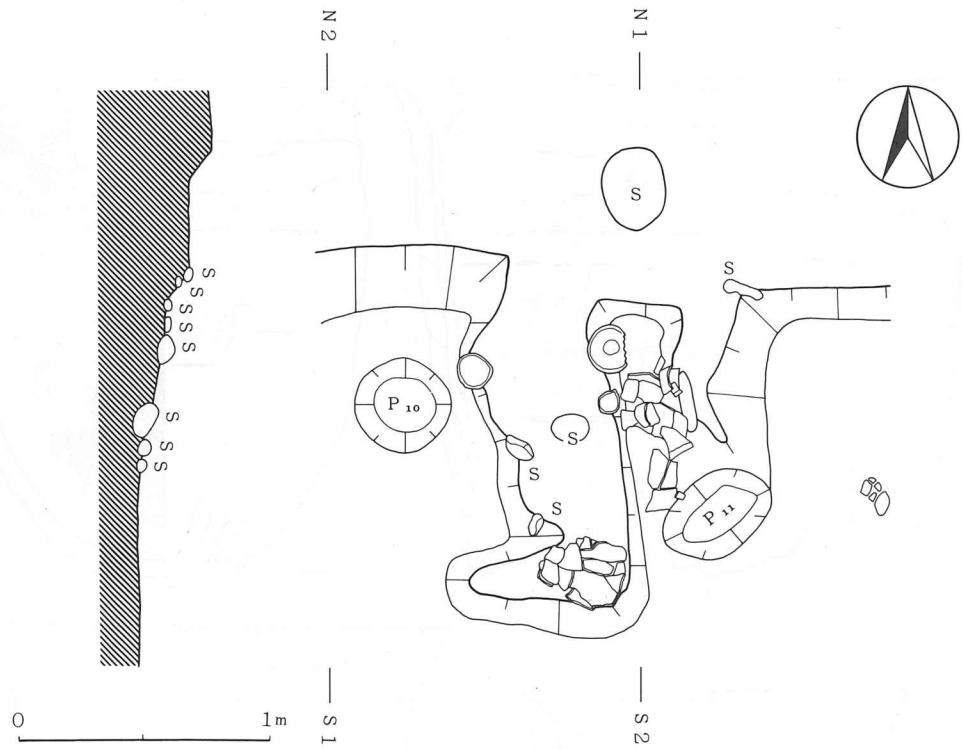
平面プランは、北壁約540cm、東壁580cmで南壁が歪んだ隅丸の不整長方形を呈す。主軸方位はN-8°-Eを指向する。覆土は2層により形成されており、II₃層がH 5号住居址との重複部を除く床面全体を覆っている。層厚は20cm前後を測る。壁は西壁がほとんど認められず、壁高は確認面から平均30cmを測り、H 2号住居址、H 3号住居址との重複部は、20cm、5cmを測る。壁はかなりしっかりしており、北壁、南壁は急傾斜をもって立ち上がり、東壁は緩やかに立ち上がっている。床面は全体層序第IV層の小礫が散在するも、比較的平坦であった。カマド付近にあっては、カマドを構築していたとおもわれる粘土、灰等が流出していた。H 5号址の床面は、本住居址の床面よりさらに若干掘り下げられている。

カマドは、北壁の中央に位置し全体的に砂質粘土によって構築されていたとおもわれる。両袖部には、床面を掘りくぼめて補強に使用された河原石がみられる。煙道部は、壁を50cm程舟先状に切り込んで設けられている。天井部、袖部の一部とも崩壊しており、南側に向けて流出している。東側の袖部の前面に40cm×30cmのピットがあり、灰・焼土等が堆積していた。灰落としのピットともおもえる。

ピットは、11個検出された。P₁・P₂は、径40cmの円形を呈し、深さはそれぞれ50cm、40cmを測る。P₅・P₈は橢円形を呈し、深さは、40cm、50cmを測る。P₅は長軸40cmで東壁と平行に、P₈は住居址の対角線と長さ60cmの長軸が一致しておる。P₁・P₂・P₅・P₈は、位置、形状、深さ等から主柱穴とおもわれる。カマドの東脇には、長軸100cm、短軸60cmの橢円形のピットに径60cmの円形ピットが接した状態のP₉が存在する。円形に北東にはみだした形の部分は、テラス状となり深さ45cmを測り平坦である。底面の深さは50cmを測る。カマドとP₉の間の床面には多量の土器が出土している。P₉は、カマド脇という位置、深さ、形態等から貯蔵穴としての機能が考えられよう。また、カマドに対峙して2個のピットP₃・P₄がある。P₃は45cm×30cmの橢円形、P₄は30cm程の円形を呈し、深さは両者とも約15cmを測る。P₃・P₄の位置的なあり方は、南壁中央に住居の入口部を想定させる。P₁～P₅、P₈～P₁₁は本住居址の床面より確認されている。なお、P₆は住居址の外側において検出された。



第12図 H14号住居址実測図 (1 : 80)



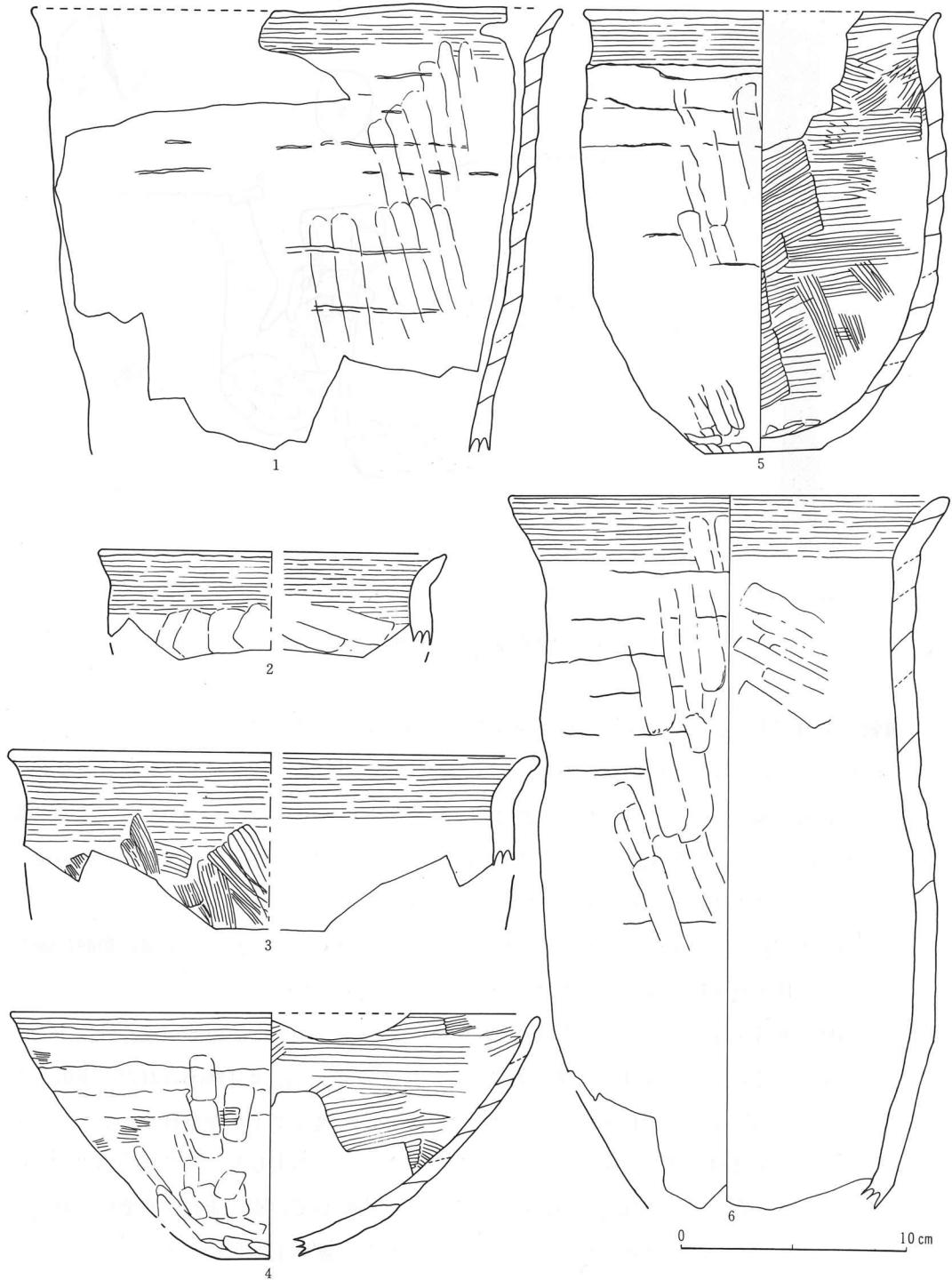
第13図 H 4 号住居址カマド実測図 (1 : 30)

遺物 (第14図 1 ~ 6、第15図 7 ~ 11、第16図12~24、第17図25~28)

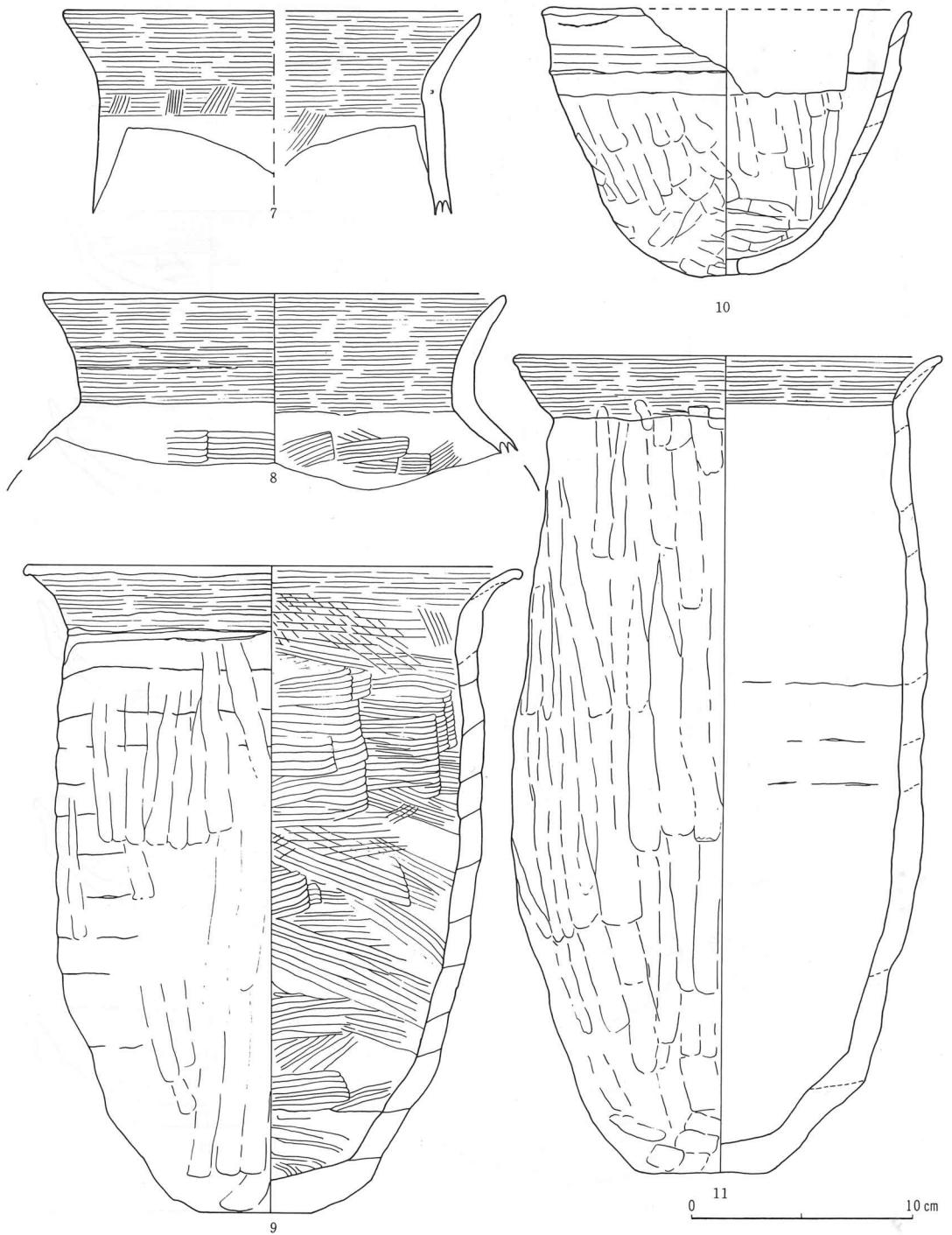
本住居址の出土遺物は、土師器、須恵器、石製品である。須恵器片は量が少く実測可能なものはない。土師器で図示したものは、甑形土器4点、甕形土器11点（3点は底部のみ）、壺形土器9点、椀形土器1点、高壺形土器2点である。器形を図示できたもの、小土器片とともにその量はH 8号住居址と並び本遺跡で最も多量に遺物の出土をみた。

これらの出土位置は第61図に示したが、北壁のカマドを中心とした範囲、南東隅の範囲に偏在性が認められ、P₁・P₂・P₅・P₈に囲まれた四方付近からの出土例は少ない⁽¹⁾。

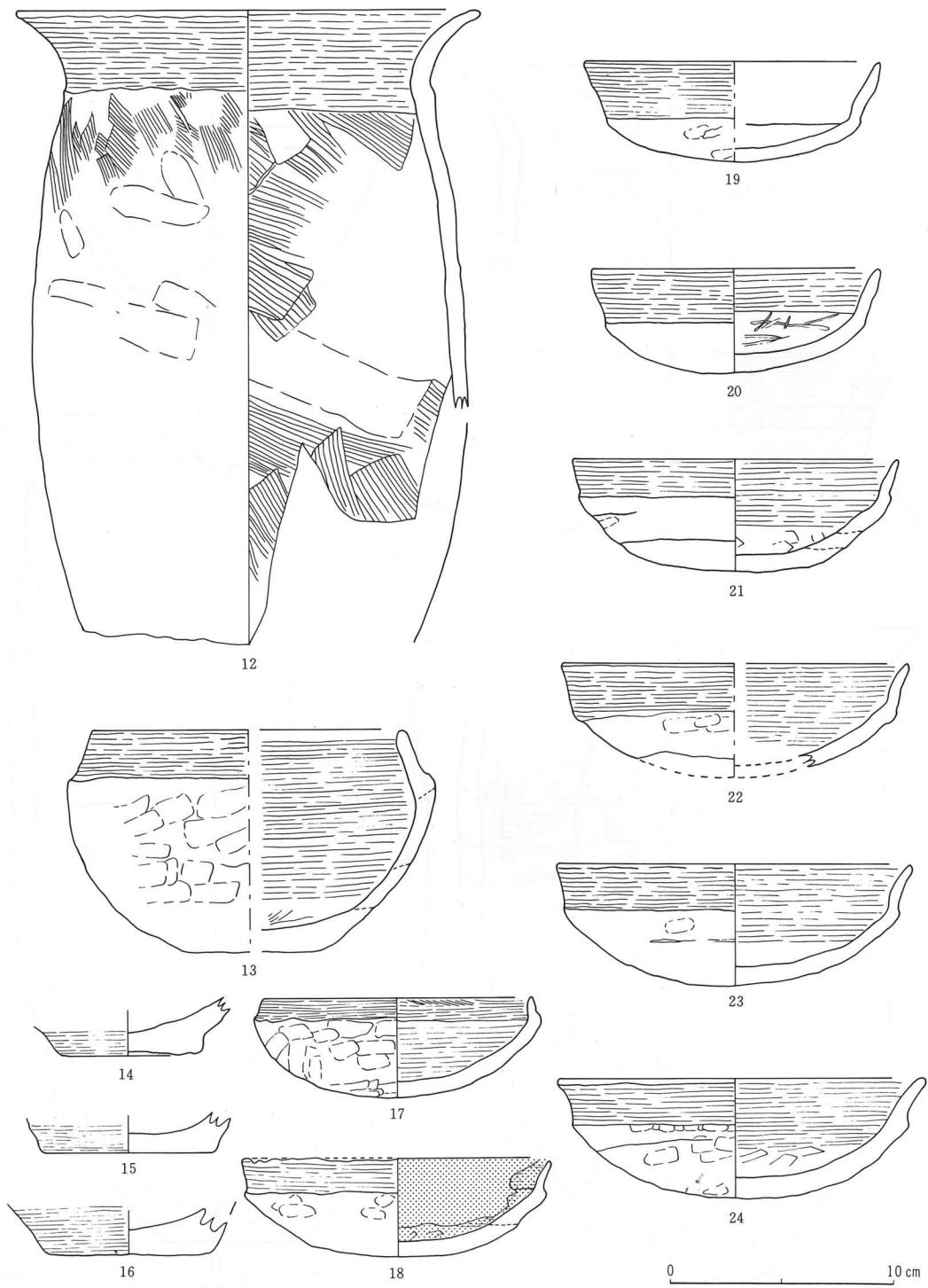
甑形土器は、多孔・4と一孔・10を有するタイプがある。1・3は、口辺部が短く外反する。1・4が南東部床面直上、3はIV区の覆土下部、10はIV区の覆土上部より検出された。甕形土器は長胴を呈す2・5~7・9・11・12と、胴部が丸味をおび、籠ミガキがみられる8がある。2を除いたすべての個体は、カマドを中心とした北壁近辺において出土した。特に11の出土状態は、カマドの天井部が崩落している部分に口辺部を南に向けて横転している。また、北壁に傾斜して5・9が、8は貯蔵穴と想定されるP₉に近接して検出された。甕形土器に續く出土量の壺形土器は、すべて外稜を有し、口辺部内傾気味の17、口辺部が外反する18・21~24、口縁部外傾しつつ内湾する19・20がある。18は内面がよく磨かれて黒色を呈す。17・19~21・23の5点は、甕形土



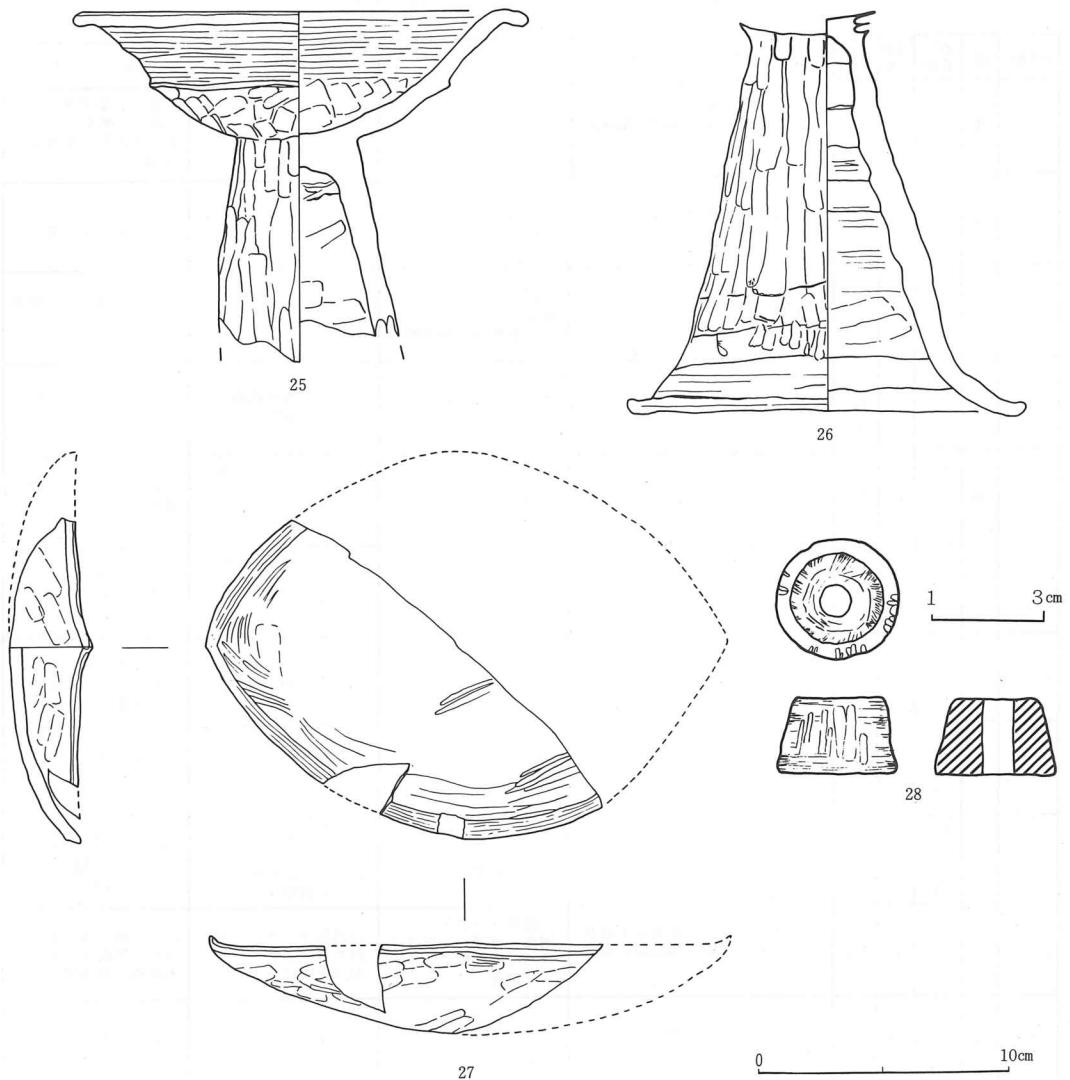
第14図 H 4号住居址出土遺物実測図〈その1〉(1:3)



第15図 H 4号住居址出土遺物実測図（その2）（1：3）



第16図 H 4号住居址出土遺物実測図〈その3〉(1:3)



第17図 H 4号住居址出土遺物実測図〈その4〉(1:3、28は1:2)

器の一群と同様に住居址の北部に偏在する。25・26の高環形土器、13の椀形土器、27の木葉形を呈す環形土器も同様に、カマド付近より検出された。28の紡錘車はカマド西脇覆土上部より、IV区の覆土下部からは、2・15の甕形土器、22・24の環形土器が出土した。

註1 H2・3・5号住居址と重複しているがH5号住居址との重複部分を除いた範囲は、層厚10~20cmでII₃層が遺存していた。また、試掘調査の際にAトレーナーが本住居址に及び、その際床面直上より24が出土している。

第6表 H 4号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器形	破片分類	実測分類	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
14—1	甌	A 2 口 ↓ 胴	F	(24.0) — —	口辺部は短く緩く外反する。 頸部は屈曲せず直線的に胴体部へ続く。	口辺部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ後ミガキ 胴部ミガキ	黄褐色一部黒斑径2~3mmの小礫を多く含む。 粘土帶約1.5cm、南東床直隅
14—2	甌	A 2 口 ↓ 胴上	R	(16.0) — —	口辺部短く外傾する。 小形の器形とおもわれる。	口辺部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴部ナデ	黒褐色を呈す。覆土
14—3	甌	"	R	(24.0) — —	口辺部は緩く外反する。 頸部屈曲しない。	口辺部ヨコナデ 胴上部クシ歯状工具による調整後木端調整	口辺部ヨコナデ 胴上部ナデ	胎土は粘質に富み焼成とも良好 南東覆土
14—4	"	A 13 口 ↓ 底	P	23.5 13.0 (3.5)	やや曲線を描く逆八字状の多孔の甌である。	口辺部ヨコナデ 胴~底部クシ歯状工具による調整後ヘラケズリ	口辺部~底部櫛歯状工具による調整	茶褐色。胴上部、底部 黒斑粘土帶約1.5cm 床面直上
14—5	甌	A 12 口 ↓ 底	P	16.0 20.0 5.5	口辺部は短く外反し、なめらかな曲線で胴下部へ続く。最大径は胴中央部にあるが口径と大差ない。	口辺部ヨコナデ 胴部~底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ後櫛歯状工具による調整(8本単位)底部に木工具による削り。	茶褐色。約1.5cmの輪積痕が明瞭に観察できる。カマド
14—6	"	A 2 口 ↓ 胴下	P	20.0 — —	口辺部は外反し、頸部は屈曲せず胴下部にややふくらみを持つ口径が最大径で長胴を呈する。	口辺部ヨコナデ後ヘラケズリ 胴部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴部ナデ	茶褐色。径2~4mmの小礫を含む。接合帯が観察できる。カマド
15—7	"	A 2 口 ↓ 胴上	R	(19.0) — —	口辺部は外反する。 頸部屈曲しない。	口辺部ヨコナデ 胴ヘラケズリ	口辺部、胴ともナデ	粒子表面に多く見受けられる。全体茶褐色。 一部黒斑。カマド
15—8	"	"	P	— (22.0)	口辺部外傾気味に立ち上がり、 口縁部外反する。	口辺部ヨコナデ 胴木端調整	口辺部ヨコナデ 胴木端 茶色の粒子多量に見られる。	黄白色一部茶褐色 カマドP ₉ の脇
15—9	"	A 12 口 ↓ 底	P	22.5 29.5 5.0	口辺部は外反し長胴を呈する。 最大径は口径にある。	口辺部ヨコナデ 胴部~底部ヘラケズリ	口辺部櫛歯状工具の調整後ヨコナデ 胴部~底部櫛歯状工具による調整	黄褐色。砂粒を多く含む。粘土帶の幅約2.0cm。 カマド、東脇床
15—10	甌	"	P	17.0 12.0 1.5	口辺部は外傾し、底部は丸底状である。口辺部と胴部境に稜を有す。	口辺部ヨコナデ 胴部~底部ヘラケズリ 底部付近は特にヘラケズリ顯著	口辺部ヨコナデ一部に斜め方向のナデ 他は全体にナデ	内面に接合帯が観察できる。黄褐色。胴部一部黒斑。東南脇土上部
15—11	甌	"	P	19.5 37.0 6.0	口辺部外反し、長胴を呈する。 胴下部に至ってややふくらむ。	ヨコナデ後一部ヘラケズリ 胴部~底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴部~底部ナデ	茶褐色。接合帯が僅か認められる。カマド
16—12	"	A 2 口 ↓ 胴下	P	21.0 — —	口辺部は外反し長胴を呈する。 最大径は口径にある。	口辺部ヨコナデ 胴上部クシ歯状工具による調整後ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴部櫛歯状工具による調整	黄褐色 外面は磨滅がみられる カマド
16—13	椀	A 13 口 ↓ 底	R	(14.0) 10.0 6.0	口辺部は内傾し、平底を呈する。	口辺部ヨコナデ 胴部~底部ヘラケズリ	口辺部~胴下部ヨコナデ	外面黒褐色、内面黄褐色。 接合帯一部に認められる。約2cm幅。 カマド
16—14	甌	A 2 底	P	— — 6.5	底部の中央に直径3cm程の凹みがあり、3ヶ所に纖維の痕跡あり。	ナデの出発点がある。	中央に工具の跡と思われる凹み3ヶ所あるナデ	茶褐色 カマド
16—15	"	"	P	— — 8.0	—	—	底部はナデが非常にきれいでなめらかである	茶褐色 覆土
16—16	"	"	P	— — 8.0	—	ザラザラしたナデ 粒子見受けられる	底部木製工具のナデにより凸凹がある	黄白色 P ₅ の直上

捕団番号	器形	破片分類部位	実測分類	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
16-17	坏	A 12 口 ↓ 底	P	12.0 4.5 ・	口辺部は短く内傾し丸底を呈す。稜は体の中央より上位にある。	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部～底部ヨコナデ 口辺部一部斜め方向ナデ	黄褐色を呈し、胎土良好。内面一部黒斑。 P ₉ 覆土内上部
16-18	"	A 13 口 ↓ 底	P	14.0 4.5 ・	口辺部外傾し、体の中央より上位に外稜を有す。 丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部～底部ヨコナデ 底部ナデ 内面黒色	黄褐色。外面 ^左 は黒褐色。剥落が著しい。 覆土II層下部。
16-19	"	A 12 口 ↓ 底	R	13.5 4.5 ・	口辺部外反して立ち上り、口縁部は外傾して内弯する。 外稜を僅かに有す。	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 底部ナデ	黄褐色。外面口辺部に一部黒斑。内面一部剥落。カマド内
16-20	"	A 13 口 ↓ 底	P	13.0 5.0 ・	口辺部外傾し、外稜を僅かに有す。底部は丸底を呈す。稜は体の中央	—	口辺部ヨコナデ 底部ヨコナデ後ミガキ	黄褐色。内面口辺部黒褐色。外面剥落著しい。 カマド
16-21	"	A 12 口 ↓ 底	P	15.0 5.0 ・	口辺部外傾し、外稜を体の中央より上位に有す。 底部丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部～底部ヨコナデ 底部ナデ	黒褐色。幅約2cmの接合帯が観察できる。 カマド
16-22	"	A 2 口 ↓ 底	R	16.0 6.0 ・	口辺部ゆるやかに外反する。 稜は体の中央より上位にある。	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	なめらかなヨコナデ	茶褐色。一部黒斑を呈す。 覆土下
16-23	"	A 12 口 ↓ 底	P	16.0 5.5 ・	口辺部外反し、外稜を体の中央より上位に有す。 底部は丸底	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部～底部中央部ヨコナデ 底部ナデ	黄褐色。口辺部一部黒斑。磨滅している。 覆土P ₉ 上
16-24	"	"	P	16.5 5.5 ・	口辺部外反する。外稜を僅かに有し、体の中央より上位にある。	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部～底部ヨコナデ	黄褐色。外面に接合帯がみられる。 床面直中央
17-25	高 坏	A 2 口 ↓ 脚下	P	18.0 — —	坏上部は外反し、上端部はほぼ水平に開く。 坏下部に稜を有す。	坏上部ヨコナデ 坏下部ヘラケズリ 脚上部ヘラケズリ	坏上部ヨコナデ 坏下部ナデ 脚上部ヘラケズリ	黄褐色 カマド西脇
17-26	"	A 2 脚	P	— 16.0	裾部は円錐状に開き、端部は上方に向く。	柱状部ヘラケズリ 裾部ヨコナデ	—	黄褐色 カマド内
17-27	坏	A 2 口 ↓ 底	P	— 3.5 ・	約 ¹ 残存部より、木葉形を呈する器形とおもわれ、底部は丸底で浅い。	底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 底部ナデ	黄褐色 カマド内と覆土II層接合

まとめ

複雑な重複関係を持った本住居址ではあるが、本遺跡中では規模の大きなものである。付属施設としてカマド、貯蔵穴と想定されるP₉を有す。南壁に近接して、カマドに対峙した位置に検出された対のピットは、住居入口部を推察させる。主柱穴もP₁・P₂・P₅・P₈が考えられ、P₈はP₉が北東隅に掘り込まれているために、他の3個のピットとは形状を異にしている。

遺物は調理用器、什器等豊富に出土した。甕形土器はほとんど長胴を呈し、胴部に丸みをおびるものは8の1個体だけである。8は胴中央部～底部を欠き、H 8号住居址、H 17号址出土の同様な胴部に丸みをもつ甕形土器も同部位を欠いており、意図的なものが推究される。総じて鬼高峰期後葉の特徴を有する。坏形土器は口辺部に種々の特徴が看取されるが、すべての個体に鬼高峰期の特徴である外稜を持つ。27は佐久地方では類例をみない木葉形の変形坏形土器である。また、

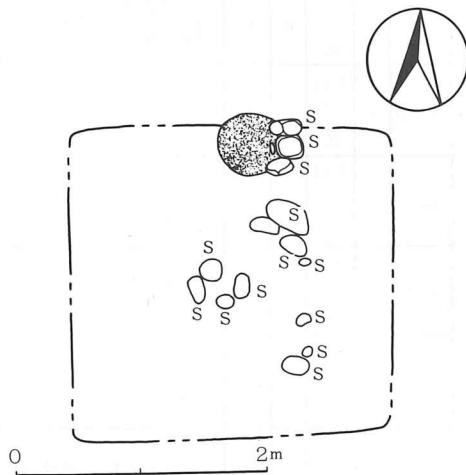
覆土上部であるが、カマド西脇の北壁際から28の滑石製紡錘車が出土している。床面直上、P₉内から、およびカマドの崩落部に包含されて出土した土師器は、本住居址に直属するとおもわれ、同一器形、器形間の時間的差異は土器製作技術の伝統的継続などの表徴かと推考される。

(林 幸彦)

4) H 5号住居址

遺構 (第18図)

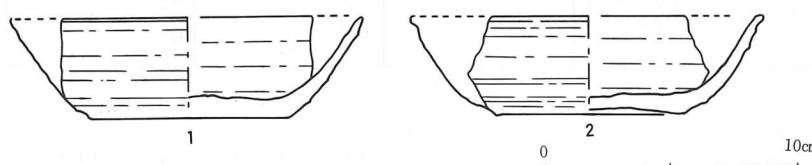
H 4号住居址の南側を占地して、構築されていたとおもわれる。本住居址は、H 4号住居址の覆土掘り下げ中に確認された。相方の覆土は酷似しており、かつ西側が水田の床土に覆われていたため、プラン確認が上面でなされなかった。北壁と想定される中央には3個の焼けた河原石が列状に存在し、それらを含む50cm径の円形状に焼土が堆積していた。南側の数個の河原石も焼けていた。南壁は数ヶ所に立ち上がりが確認された。他の付属施設は検出されない。



第18図 H 5号住居址実測図 (1 : 60)

遺物 (第19図 1～2)

本住居址の出土遺物は、須恵器が少量であった。図示したものは、須恵器坏形土器2点である。



第19図 H 5号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)

1は、住居址のほぼ中央の床面直上、
2は覆土の下位において出土した。2点とも口クロ痕がみられ底部糸切り痕を有す。(林 幸彦)

第7表 H 5号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器形	破片分類部位	実測分類	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
19-1	坏	A13 口 底	R	(14.0) 4.0 8.0	やや内弯しているものの直線に近く外斜している。 底部は平底	口クロ痕 底部糸切り	口クロ痕	青灰色。しっかりしたつくり。 床面直上
19-2	坏	A13 口 底	R	(14.0) 4.0 7.0	全体に内弯しており、口縁端部に至ってやや外に開く。 底部は上げ底	底部糸切り 口クロ痕	口クロ痕 口縁部付近はナデにより平滑化	黄灰色 覆土

6) H 6号住居址

遺構（第20・21・22図）

本住居址は、5・6-L・Mグリット内に位置し、H 7号住居址と切り合い関係を有し、北側に隣接あるいは重なってH18号住居址と、南東側に隣接してH15号住居址が存在する。

H 7号住居址との新旧関係は、覆土のちがいにより（H 6号住黒褐色、H 7号住漆黒色）上面より本住居址が切っていることを確認する。東壁及び北壁の東部はIII層を切り込んで落ち込んでおり、プラン検出にはかなり苦労をしいられ、カマドを手掛かりにして上面より確認する。

平面プランは、東西約380cm、南北約370cm、床面積約12.3m²を測る隅丸方形を呈し、主軸方位はEを示す。壁高は、確認面から14.5～36cmでほぼ直立に近い立ち上がりを有す。

覆土は、小礫を含む黒褐色の1層で、住居址の中央部付近に拳大から径10×28cm大の河床礫が存在する。床面は僅かに堅い感じはするものの軟弱で、東側の1/3床面はカマドに向かいW形に約10cm低くなる凹地が存在する。

ピットは、5個が検出されP₁は東南隅凹地内に存在し50×50cmのほぼ方形を呈す。P₂は西南隅に位置し長軸100cm、短軸50cmの不整形を呈す。P₃は西側台上のほぼ中心に位置し、径50cmの円形を呈す。P₄はP₃の北東に隣接して存在し東側に段を有す長軸70cm短軸60cmの楕円形を呈す。P₅は西北隅に位置し径35cmの円形を呈す。P₄を除けば、いずれも深さが5cm内外であり位置、形態等を考えて主柱穴と思われるものは見当らない。

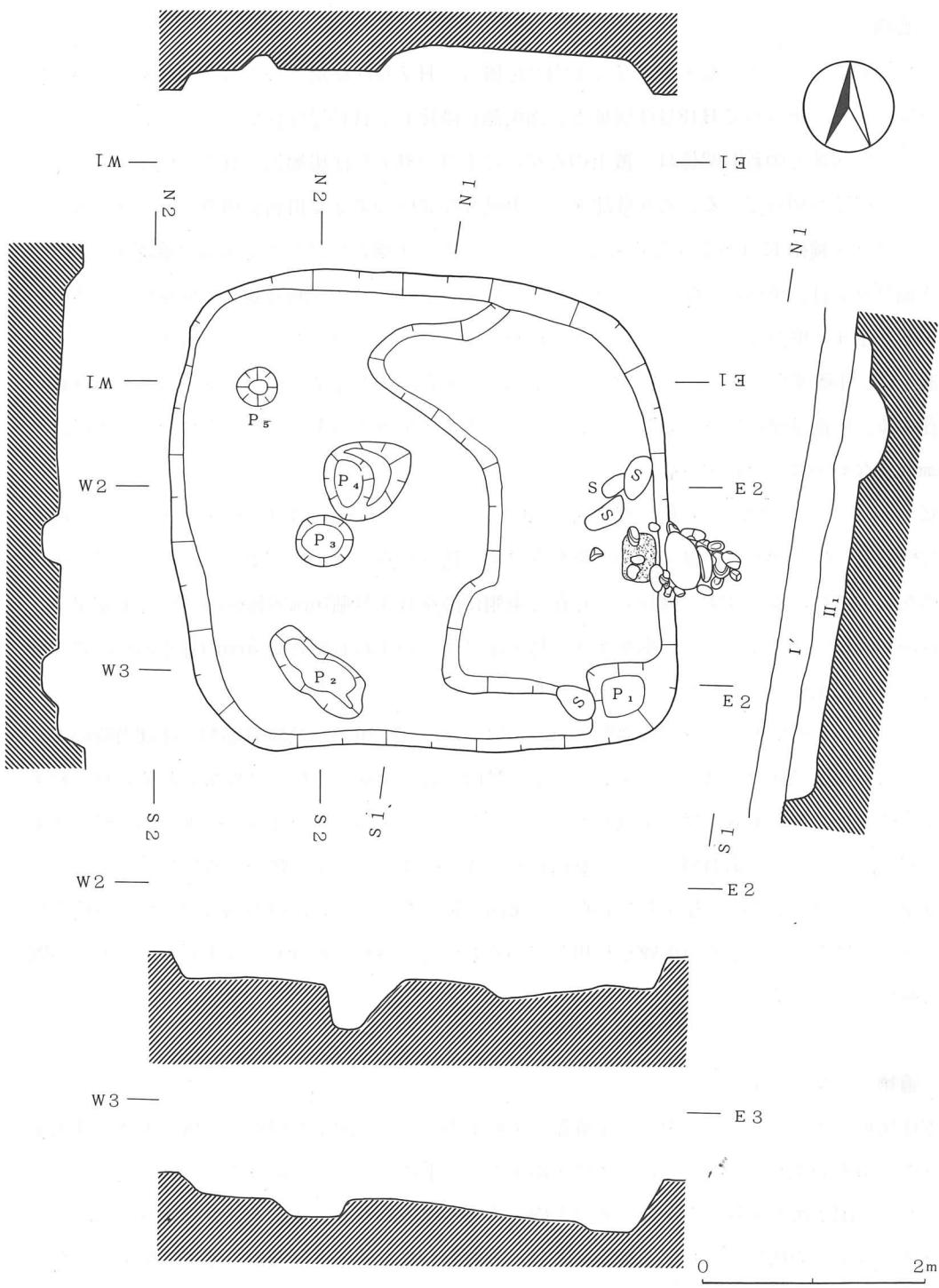
カマドは、東壁中央部よりやや南側に、安山岩を使用して組まれた煙道部が、ほぼ当時のままと思われる状態で検出された。しかしカマドの焚口部及び両袖の主柱石は破壊されており、わずかに火床と思われる部分に焼土が残存していたことを確認する。煙道部は舟の舳先形に壁より東側に張り出しており、第21図のように安山岩をうまく利用して頑丈に構築されている。

礫群は、プラン中央部に集中して存在し、東西に長い方形を呈した範囲内に大部分が包括される。礫群のほとんどは千曲河床礫を利用しているものと思われ、層位的には床面直上に近い位置から検出されている。

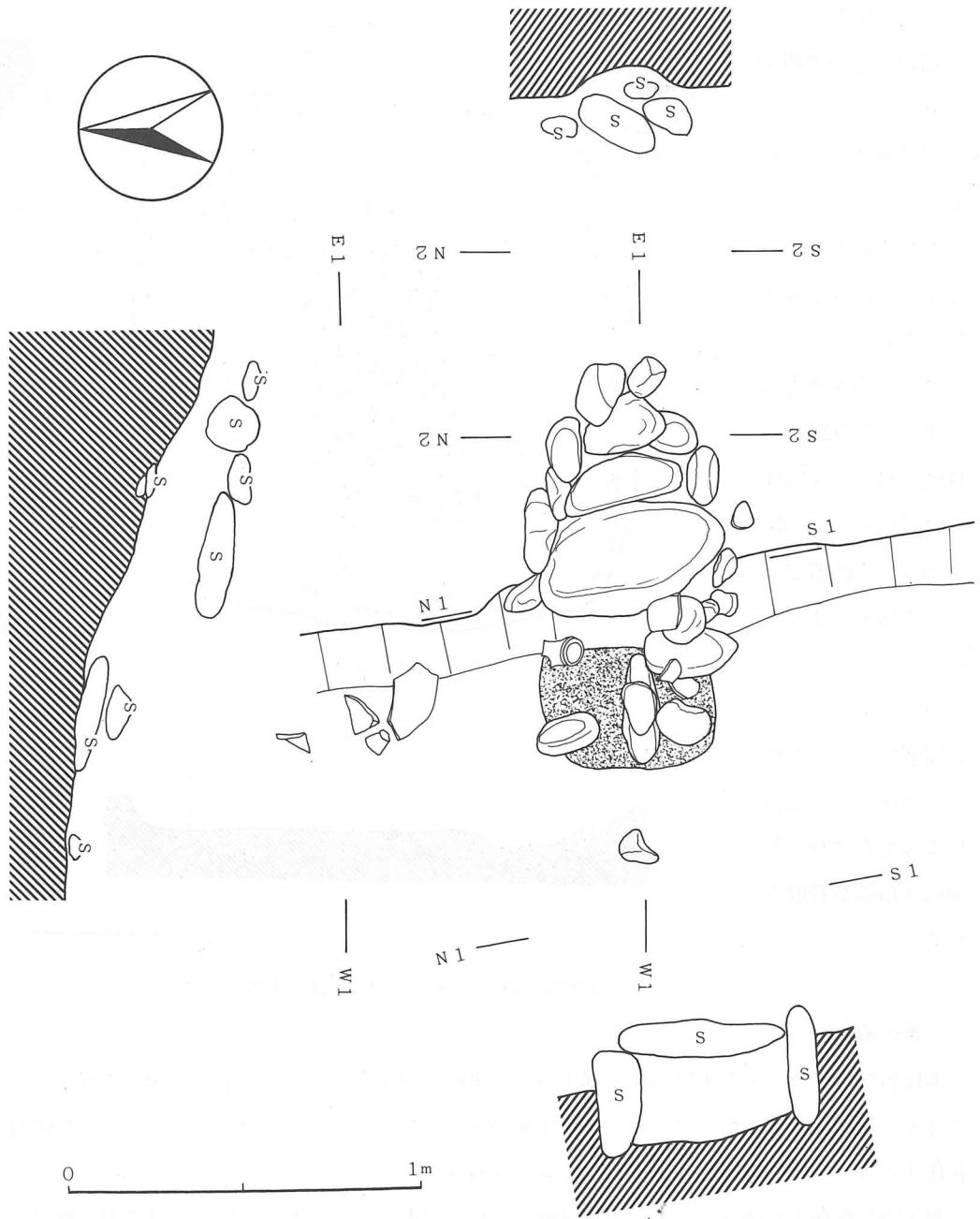
遺物（第20図 1～11）

本住居址の出土遺物は、須恵器、土師器、手捏土器である。図示し得たものは、土師器坏形土器1点、須恵器坏形土器9点（台付坏形土器1点）、手捏土器1点であった。

これらの出土状態をみてみると、カマド内、カマド周辺から3、4、6、9の4点が出土した。3・6はカマドの袖部、天井部を構築していたとおもわれる礫の下部及び上部より検出された。4はI区のカマド北脇覆土下部、9はII区カマド南脇床面より出土した。1、2はI区の床面直上より5・7・10は覆土下部、11は覆土上部の礫群中より検出された。以上11を除く1～10は本



第20図 H 6号住居址実測図 (1:60)



第21図 H 6号住居址カマド実測図 (1:20)

住居址に帰属するものとおもわれる。

1・2・4・5・7~10は、須恵器壊形土器で総てロクロを使用しており、5を除く底部には

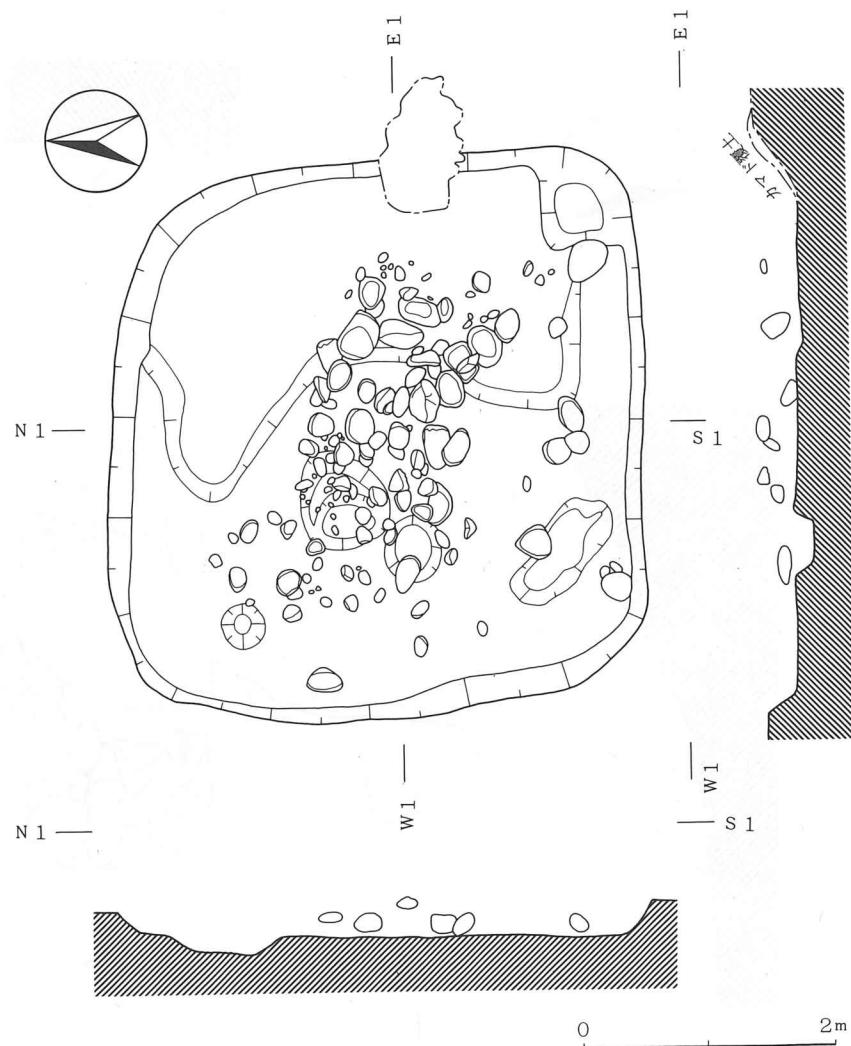
糸切りがみられる。

3は台付杯形土器で、本遺跡出土須恵器中でH 2号住居址1と共に2個体だけである。

2は色調が黄灰色を呈し、口縁部外面に「凸」の文字が記されている墨書き土器である。本遺跡からは他にH 1号住居址で2点出土している。

6は、土師器で、杯形土器の底部である。

11は、盃状の小形の器形であり、調整は内外面ともに指頭によってなされ、外面には指紋が看取される。



第22図 H 6 号住居址覆土内礫群実測図 (1 : 60)

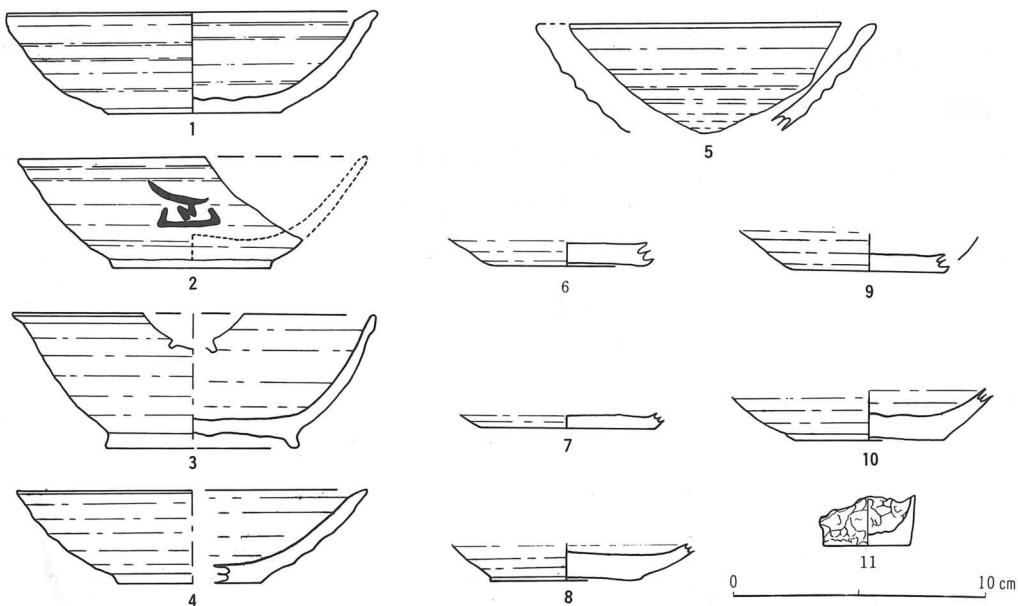
まとめ

本住居址は、カマドを東壁の中央部よりやや南側に構築された、一辺約370cmの規模をもつ住居址で、規則性のうかがえないピット、又東側床面 $\frac{1}{3}$ にわたるW形凹地、床面直上付近に礫群が存在する等、一般的な住居址とは異質な雰囲気を有す。

覆土内に存在する礫群は、床面直上付近より検出されており、本住居址との時間的差異は少ないものと推察される。

出土遺物中、遺物の項で触れてあるように本住居址に帰属すると思われる土器は10個体あり、そのすべては、ロクロ使用による杯形(台付含)土器で9個体は須恵器である。

(黒岩 忠男)



第23図 H 6号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)

第8表 H 6号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器形	破片分類部位	実測分類	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
23- 1	坏	A12 口 底	P	15.0 4.0 7.0	口辺部は外傾しつつ内弯しており、底部は平底を呈す。	口クロ痕 底部は糸切底	口縁部付近は他の部分より平滑化しており底面は同心円状に凹凸がある。	色調は青灰色をなす。 I区、床面
23- 2	坏	A13 口 底	P	(14.0) 4.5 6.5	口辺部は外傾しつつ内弯し、底部は平底でかなり厚手。	"	口クロ痕	色調は黄灰色を呈す。 墨書き土器であり、「山」の文字が描かれている。 I区、床面直上
23- 3	台付坏	A13 口 底	R	(14.5) 5.5 7.0	口辺部は外傾しつつ内弯し口縁部付近でやや外に開く。台部は糸切の後、貼付。	"	"	色調はやや黄灰色をなす。 カマド
23- 4	坏	A 2 口 底	R	(14.0) 3.7 (6.0)	口辺部はやや内弯気味を呈し、直下よりかなり急角度で外傾する。底部は平底。	"	"	色調は灰色をなす。 I区、カマド脇覆土下部
23- 5	坏	A 2 口	F	(13.5) — —	口辺部は外傾しつつ内弯しているものと思われる。	口クロ痕であるがかなり凹凸がはつきりしている。	"	色調は黄灰色 覆土下部
23- 6	坏	A 2 底	P	— 6.5	底部のみにて不明 底部上げ底。	口クロ痕? 底部は糸切	口クロ痕?	黄褐色 カマド内
23- 7	坏	A 2 底	P	— 7.0	底部のみにて不明 底部は平底。	口クロ痕 底部は糸切底	口クロ痕	灰色 覆土下部
23- 8	坏	A 2 底	P	— 6.0	底部のみにて不明 底部は上げ底。	"	"	黄褐色 III、IV境中央床直上
23- 9	坏	A 2 底	P	— 6.0	底部のみにて不明 底部は平底。	"	"	黒灰色 II区、カマド南脇床面直上
23-10	坏	A 2 底	P	— 6.0	底部のみにて不明 底部は上げ底。	"	"	灰色 覆土下部
23-11	手 捨	A 13 口 底	P	— 2.0 3.5	底部はやや方形に近い橢円形を描くものと思われれば垂直に近く立ち上っている。	指頭による調整	指頭による調整	外面黄褐色、一部黒褐色 内面は黒褐色覆土上部

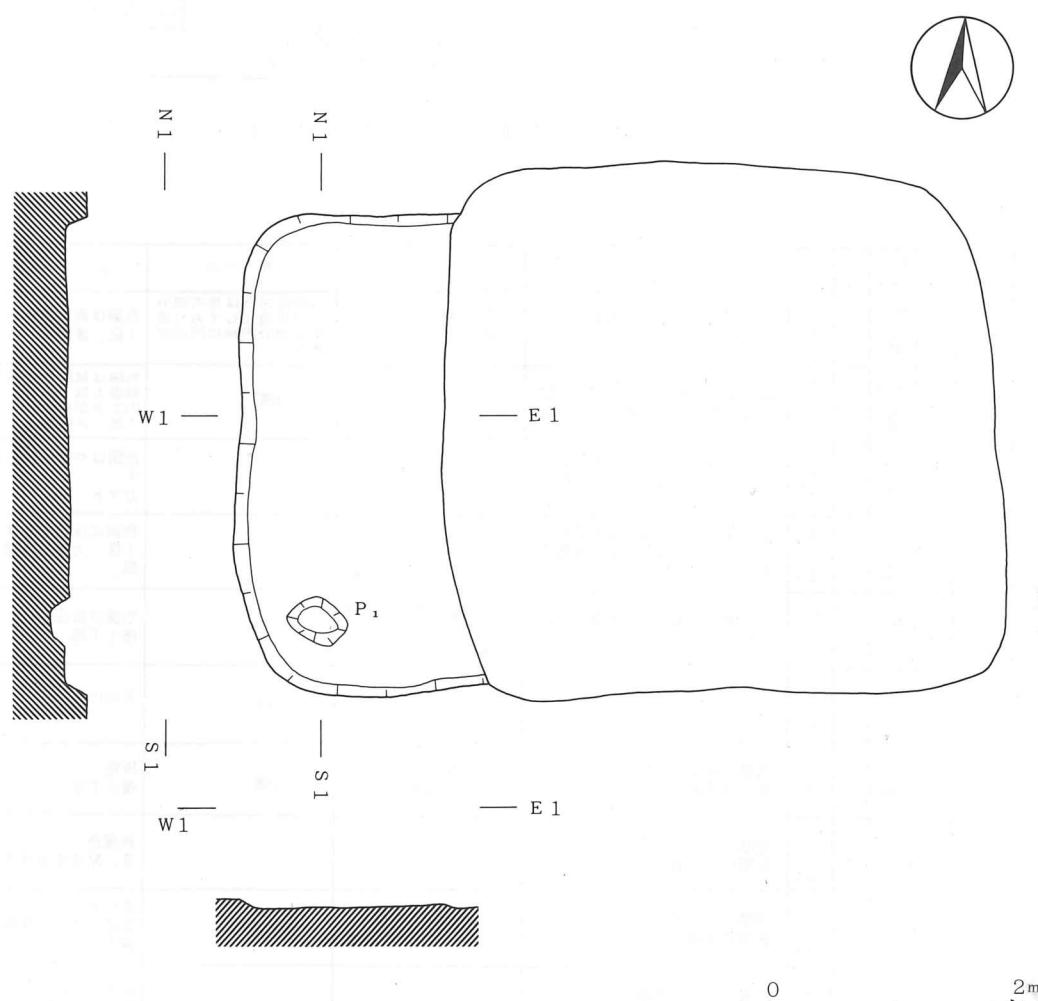
7) H 7号住居址

遺構 (第24図)

本住居址は、5・6—M・Nグリット内に位置し、東側半分以上をH 6号住居址により切られている。なおH 6号住居址の床面との高低差は+7cmを測る。

平面プランは、残存部のみのプランを示すと西壁 365cm、東西 150cmの範囲で、その全貌を明らかにすることはできなかった。壁高は確認面より最高部は18cmを測りIV層を掘り込んで構築されている。床面はIV層の直上に僅かに堅い面を有し、南西隅に径32×20cm、深さ20cmのピットが存在する。遺物は、覆土中より数点の土師器小片が出土したにすぎず、言求できない。

(黒岩 忠男)



第24図 H 7号住居址実測図 (1:60)

8) H 8号住居址

遺構 (第25・26・27図)

本住居址は、9・10・11—J・K・Lグリット内に位置し、かつて千曲川の氾濫原の跡である砂礫層の上に作られた住居址であり、H 9号住居址と切り合い関係を有し、南壁の中央付近にT 10号特殊遺構が存在する。

H 9号住居址との新旧関係は、両遺構覆土とも黒色でつかみにくかったが、礫の含有量及びわずかであるが、本住居址の覆土が黒色が強く、プランが連続することを確認する。

平面プランは、北壁 420cm、南壁 430cm、東壁 380cm、西壁 385cmのやや南方に長い隅丸方形を呈し、主軸方位はN—2°—Wを示す。

覆土は1層で、黄色砂粒子の混入が見られ、自然堆積とは様相を異にしているように観察される。また床面直上に、拳大もしくは頭大の礫が存在する。

壁高は、確認面より15.5～26cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、H 9号住居址との切り合い部分（北東隅）に黄色砂質土層を渴入した硬い貼り床が見られ、他の部分は概むね平坦である。

カマドは、北壁のほぼ中央に位置し、安山岩を両軸の主柱石とし、粘質の強い土を使って補強して構築したものと思われ、焚口、灰落し用の落ち込みは第26図のように検出された。

ピットは4個が検出されP₁は東北隅則ち、カマドの東側に位置し、長径86cm、短径70cm、深さ30cmを測る不整形を呈す。P₂は北西隅に位置し、径34cm、深さ24cmの円形を呈す。P₃は西南隅に位置し、径34cm、深さ20cmの円形を呈す。P₄は南東隅に位置し、径36cm、深さ20cmの円形を呈す。

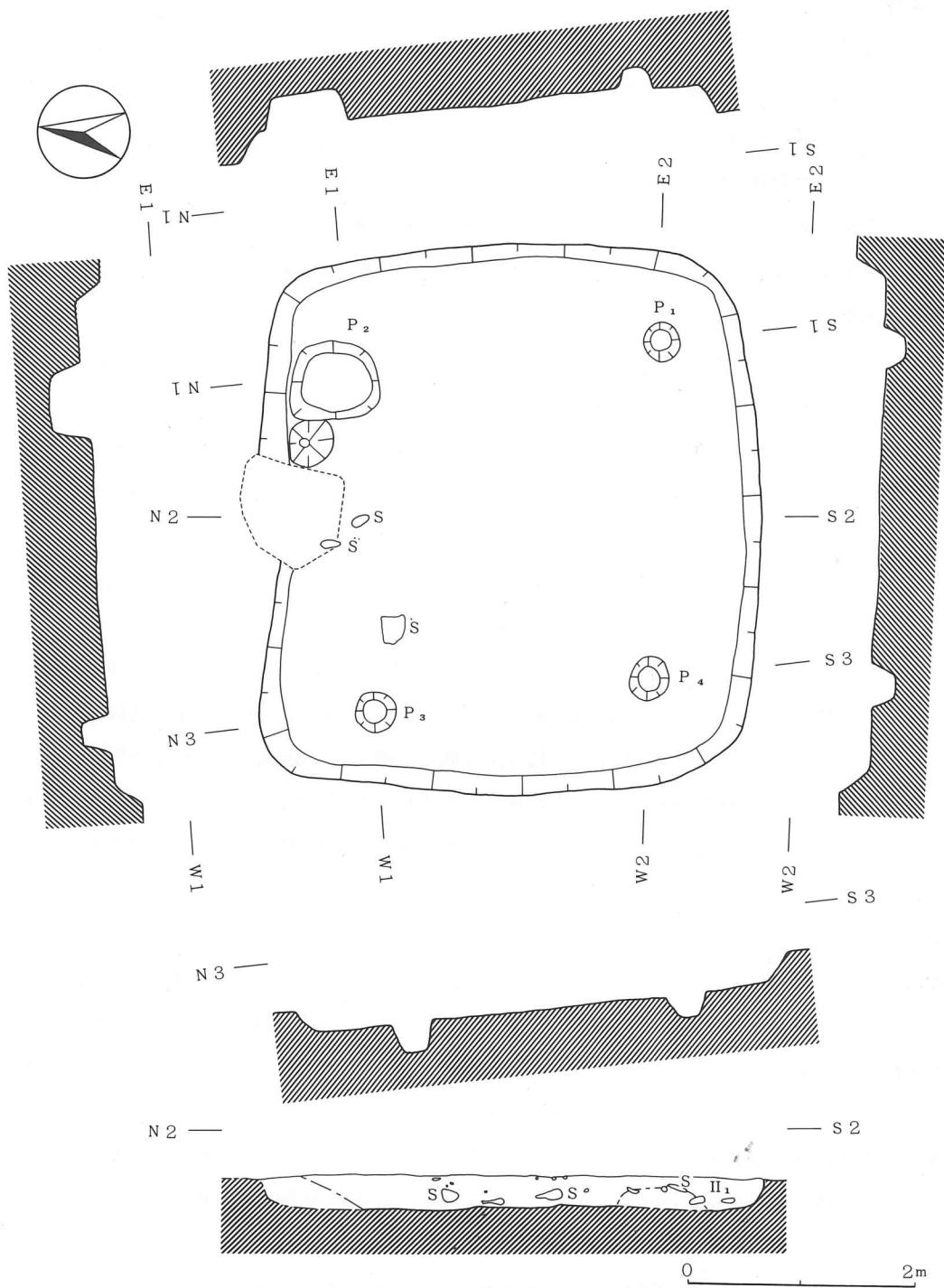
P₁を除き、P₂～P₄は同様な規模であり、位置からも主柱穴と思われる。ただP₁の存在する北東隅には、これらと同様な規模のピットは、何回の精査によっても検出できず、貯蔵穴と思われるP₁が検出できたにすぎない。なおP₁の西に隣接して存在する、小規模な凹地は胴のふくらむ甕が出土した位置である。

礫群は、住居址の中央部よりやや南方部分に全体的に検出され、ほとんどの礫が、住居址の外側より中心部に向かって傾斜していることが観察される。南壁に近い礫群下には、2群に分かれれる焼土粒子及び炭化物が存在し、又南壁に密着した状態で、カマドに使用されたと思われる長方形に加工された焼石（凝灰石）が1個検出された。

礫の大きさは拳大が大部分で、小礫はほとんど存在せず、頭大もしくはそれ以上の礫も見られる。石質は上述の凝灰石を除けば、河床礫がほとんどで、安山岩が主体を占めている。

遺物 (第28図1～5、第29図6～14、第30図15～31、第31図32～29)

本住居址出土遺物は、土師器、須恵器、凹石、臼玉がある。これらで図示し得た土師器は、甕



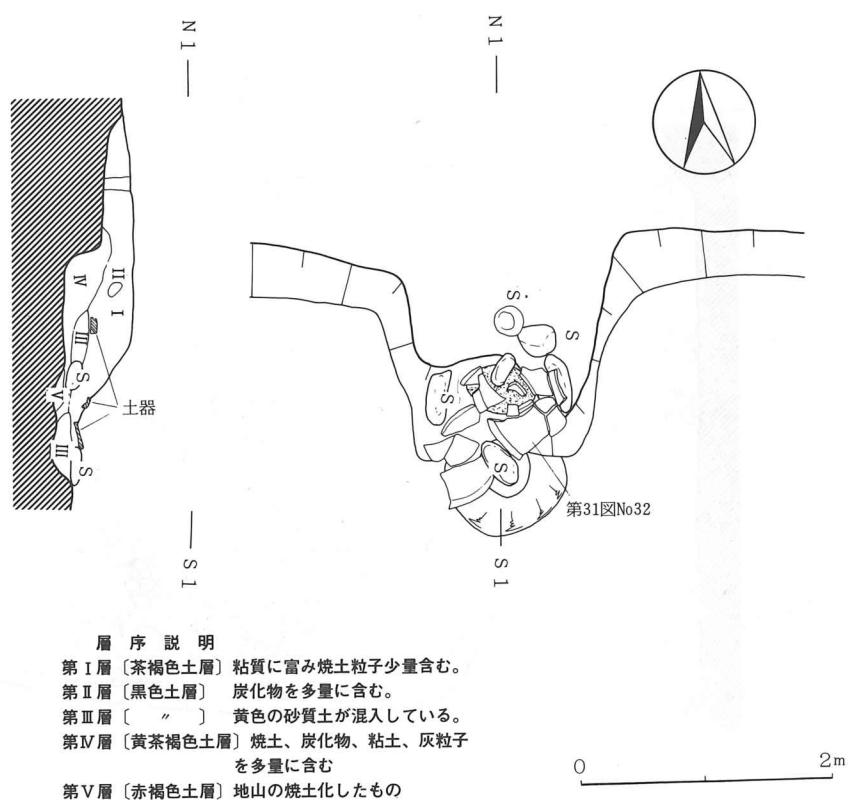
第25図 H 8号住居址実測図 (1 : 60)

形土器8点、甕形土器4点、小形甕形土器5点（底部のみ1点）、坏形土器14点、椀形土器2点、高坏形土器1点、残存部が僅かなため器形が明確でないもの3点が、他に滑石製の白玉1点、石質は安山岩の凹石がある。本遺跡の住居址中でもっとも多量の遺物が出土した。詳細は第9表に記してある。

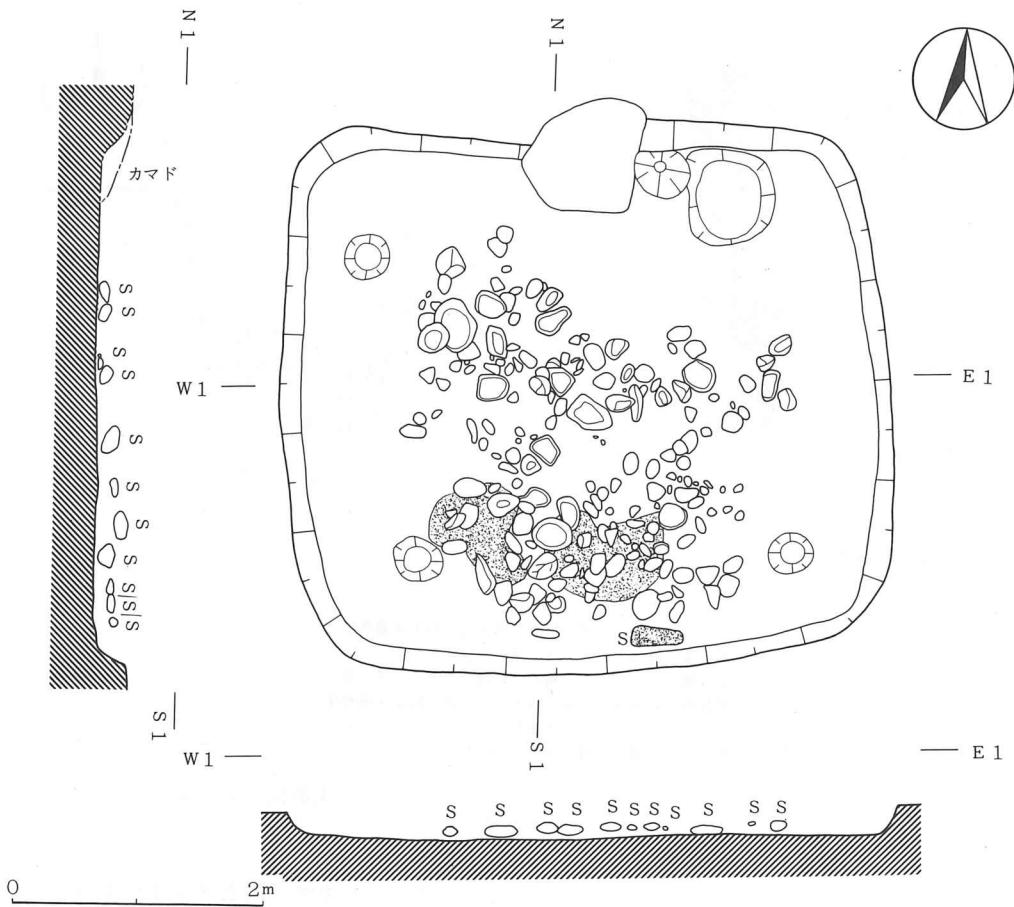
5・7・9・10・
23・26・27・36以外

はすべて床面直上およびカマド内の出土

であり、礫群の下部であった。また、平面的な出土状態では、カマド内とカマドの東脇から、出土遺物の五割以上が出土している。南側のカマド対面にも数点が集中している。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4$ を結ぶ空間は出土量が少い。甕形土器は、一孔、多孔の2つのタイプがある。1・4・6は、一孔を有す大形のもので、6は、北東隅から内部に33の小形甕形土器を伴って出土した。1はIII区床面直上で3つに分割されたかのように、口辺部を南西に向けすべて外面を上にして、それぞれ重なり合う状態であった。1・6とも器形の特徴は酷似している。1の口唇部内側には、一条の沈線が浅くめぐっている。2・5は多孔を有する小形のもので、2はカマドの天井部が崩落した土層より、32の甕形土器に重なるように出土した。IV区床面からの小片も同一個体で接合した。III区の覆土内より出土した7・9も器形、調整等が2・5によく似かよっている。2・7・8の口唇部内側には、1と同様な一条の沈線がめぐる。甕形土器には、胴の張る15~17、長胴を呈する32の2つのタイプがある。15はカマド東脇で P_4 に近接して、17は P_4 と東壁の間で15と対峙した位置より出土した。15は胴中央部より下部を欠損しており（16・17も同様）、床面に接している部分は若干掘りくぼめられており、すっぽりはいっていた。また、H 4号、H 12号、H 17号住居

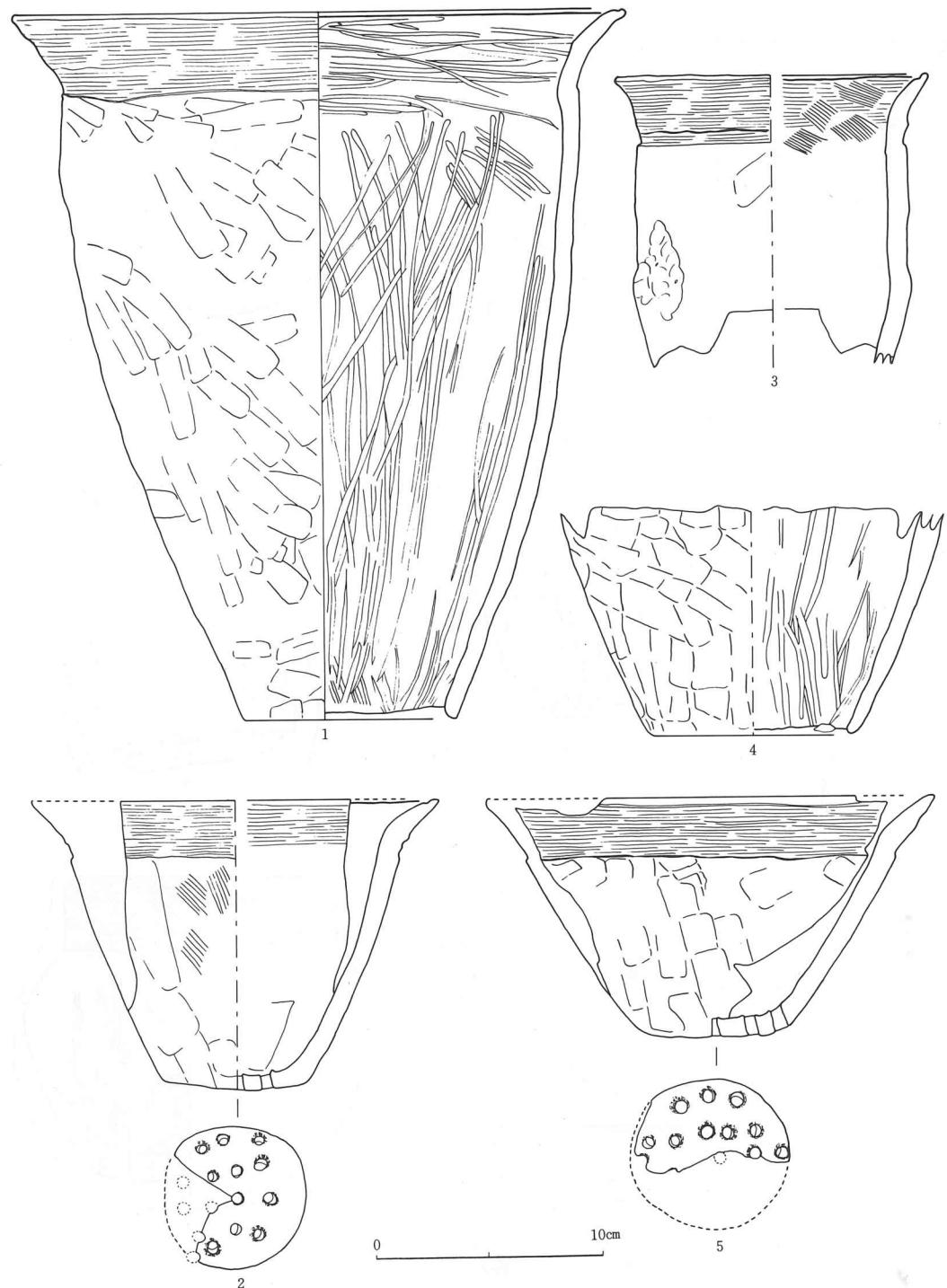


第26図 H 8号住居址カマド実測図（1:30）

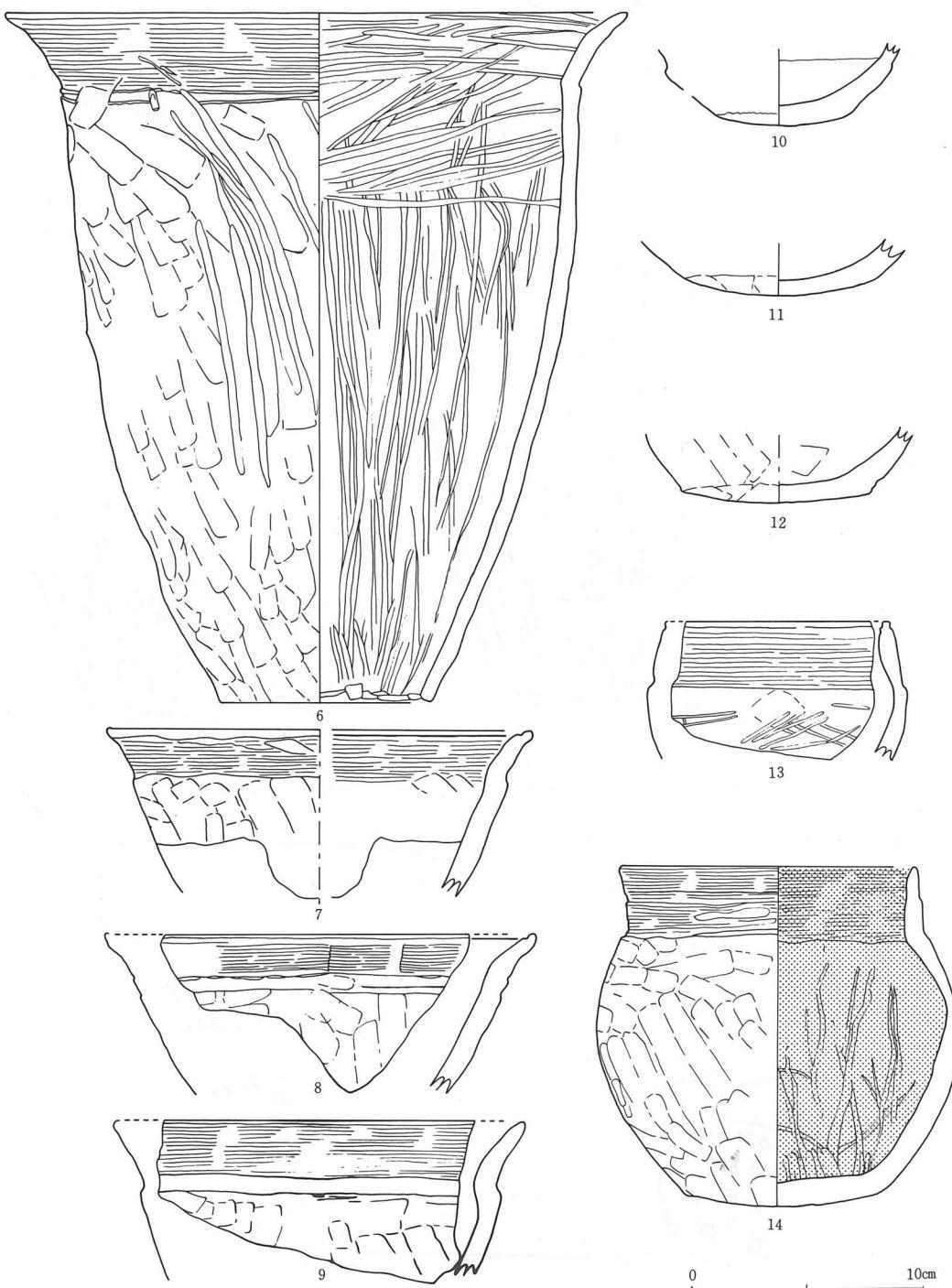


第27図 H 8 号住居址覆土内甕群実測図

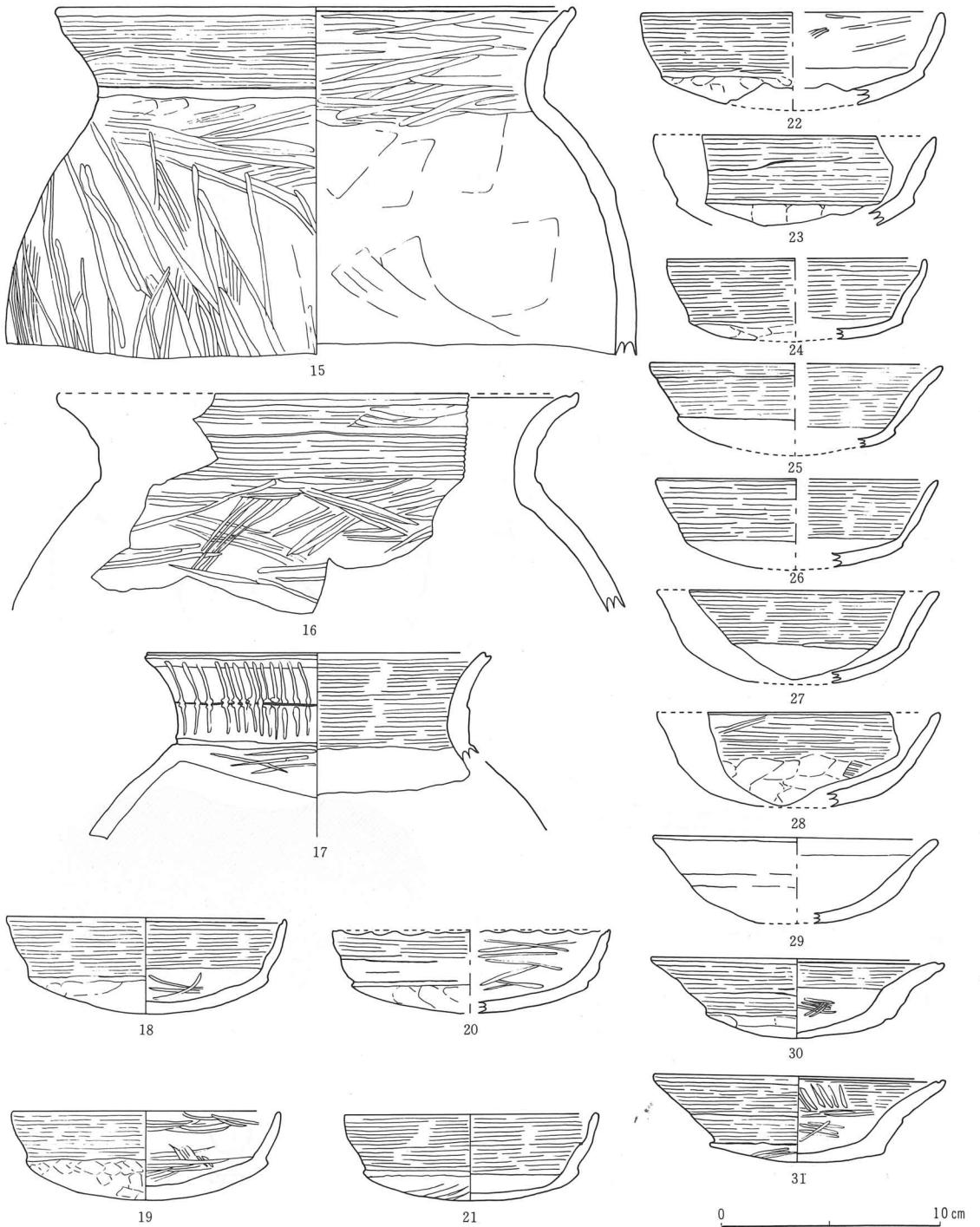
址からも同様な甕形土器がカマド東側から出土している。やはりいづれも胴部中央～底部を欠いている。15・16の口唇部内側には一条の沈線がめぐっており、17は口唇部の外側にみられる。32は口辺部外傾し中央に一条の沈線が、口唇部内側にも一条の沈線がある。胴部はややふくらんで口径が最大径となる。長胴を呈する甕形土器である。崩落しているカマドの火床の上位より、口辺部を南西にむけて出土した。2の甕形土器が重なるように横転していた。他に図示できなかつたが、32と同様な長胴を呈すもの1個体が床面直上より出土している。小形甕形土器は、3・12・14・33・36の5個体がある。口径に比して胴部が長くなるとおもわれる3・36、口径が器高より僅か長く、肩部に稜を有し丸底気味の平底を呈する33、口辺部僅かに外傾（一部直立）し、胴中央部に最大径を有する形態がある。14は内面ヘラミガキされてかつ内黒となっている。12は底部だけであるが、丸底状の平底、調整等14に酷似している。3の口唇部内側には、一条の沈線がめ



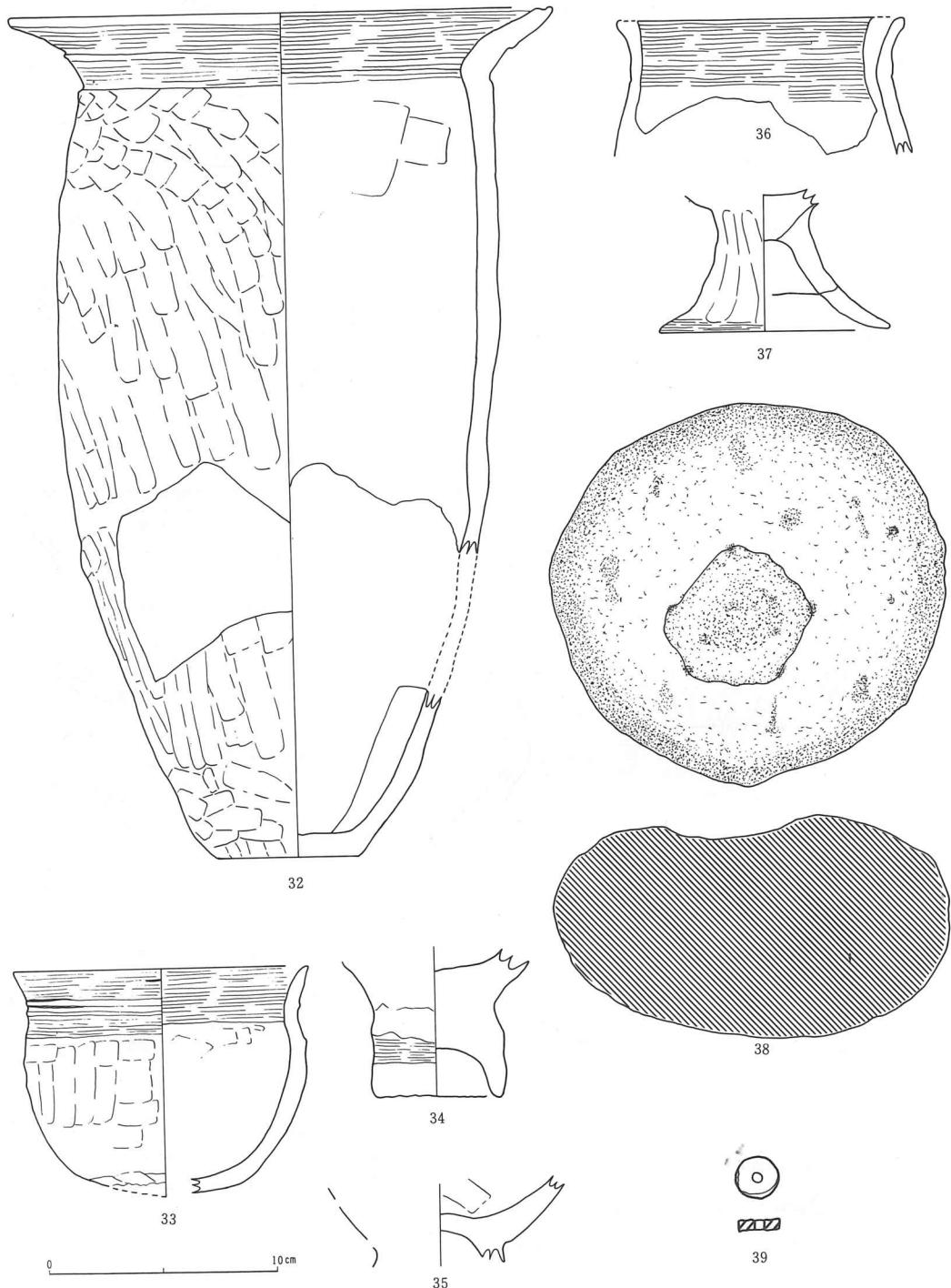
第28図 H 8号住居址出土遺物実測図〈その1〉(1:3)



第29図 H 8号住居址出土遺物実測図（その2）（1：3）



第30図 H 8号住居址出土遺物実測図〈その3〉(1:3)



第31図 H 8号住居址出土遺物実測図〈その4〉(1:3、ただし39は1:2)

第9表 H8号住居址出土土器一覧表

掲図番号	器形	破片分類部位	実測分類	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
28-1	甌	A 12 口 ↓ 底	P	27.0 31.5 9.5	口辺部外反し、胴部より底部にかけては外傾しつつ内弯する口唇部内側に一条の凹線をとどめる。	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ヘラケズリ	口辺部～底部ヘラミガキ	内外面茶褐色を呈し一部黒点。一孔。 III区、床面
28-2	甌	A 13 口 ↓ 底	R	(18.0) 13.0 6.0	底部からほぼ直線的に外傾し口辺部は外傾する。口唇部内側に一条の凹線をめぐらす。穿孔は底部よりなされる。	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ナデ	茶褐色。内外面に黒斑多孔。カマドIV区床面出土片接合
28-3	小形甌	A 2 口 ↓ 胴下	R	14.0 — —	口辺部外反し、胴は長い。口唇部内側に一条の凹線をめぐらす。胴部に粘土塊が残存している。	口辺部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ (?)	口辺部ヨコナデの後斜方向のナデ 胴部ナデ	茶褐色。口辺部に黒斑。外表面は磨滅著しい。 カマド出土
28-4	甌	A 2 胴下 ↓ 底	R	— — 9.0	底部より胴下部にかけての立ち上りは1・8に近似する。	胴下部～底部ヘラケズリ	胴下部～底部ヘラミガキ。孔の周辺ヘラケズリ	茶褐色。一孔。 IV区カマド東脇。I区出土片接合
28-5	甌	A 13 口 ↓ 底	F	(10.0) 10.5 6.5	口辺部外傾し、直線的に底部へ続く。 穿孔は底部よりなされる。	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ナデ	灰褐色 多孔 III区覆土下位
29-6	甌	A 12 口 ↓ 底	P	27.0 30.0 9.5	口辺部外反し、胴部より底部にかけて、外傾し内湾する。	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ヘラケズリ	口辺部～底部ヘラミガキ。孔の周囲はヘラケズリ	内外面とも茶褐色を呈し、胴部に黒斑。 I区床面33の下位
29-7	甌	A 2 口 ↓ 胴下	R	(19.0) — —	2・6と同様の器形になろう。 口唇部内側に一条の凹線をめぐらす。	口辺部ヨコナデ 胴上部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴上部ヘラミガキ	茶褐色 III区覆土下位
29-8	甌	A 2 口 ↓ 胴下	F	(18.0) — —	口径が最大径とおもわれ2・6と同様な器形になろう。口唇部内側に一条の凹線をめぐらす。	口辺部ヨコナデ 胴上部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴上部ナデ	外面茶褐色 内面黒褐色 IV区床面
29-9	甌	A 2 口 ↓ 胴下	F	(18.0) — —	2・6と同様の器形とおもわれ肩部に稜を有す。	口辺部ヨコナデ 胴上部ヘラミガキ	口辺部ヨコナデ 胴上部ナデ	外面茶褐色 内面黒褐色 多孔 (?) III区覆土下位
29-10	椀	A 2 底	P	— — —	ほぼ直線的に外傾して口辺部付近はやや内弯して立ち上がる。	底面剥落で、口辺部付近はヨコナデ、その下は指頭による調整	底面付近までヨコナデがみられる	内面黒色 II区覆土
29-11	?	A 2 底	P	— — (18.0)	底部は丸底気味の平底	底部付近はヘラケズリ	底面付近はナデにより平滑化されている。	底部のみ黄褐色 IV区床面
29-12	小形甌	A 2 底	R	— — (8.0)	底部は丸底気味の平底	底部はヘラケズリ	底面付近はナデにより平滑化されている	底部のみ黄褐色 II区床面
29-13	椀 ?	A 2 口 ↓ 底	F	(10.0) — —	口辺部は内傾している	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリの後 ヘラミガキ	口辺部付近はヨコナデ その下部はヘラミガキ	黄褐色 P 5 内
29-14	小形甌	A 12 口 ↓ 底	P	(18.0) 15.0 9.0	口辺部緩く外傾(一部直立)し 胴部に最大径があり、底部は丸底気味の平底である。	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ナデ後ヘラミガキ	茶褐色 I区床面
30-15	甌	A 2 口 ↓ 胴上	P	24.0 — —	口辺部は直立気味に立ち上り、 中央より外反する。口唇部内側に一条の凹線がめぐる。肩部は張る。	口辺部ヨコナデ 胴部ヘラミガキ	口辺部ヨコナデ後ヘラミガキ 胴部ナデ	黄白色を呈し黒斑有り カマド東脇
30-16	甌	A 2 口 ↓ 胴上	R	(24.0) — —	口辺部は直立気味に立ち上り中央より外反する。 口唇部内側に一条の凹線がめぐる。	口辺部ヨコナデ 胴部ヘラミガキ	口辺部ヘラミガキ 胴部ナデ	茶褐色 II区床面

捕獲番号	器形	破片分類部位	実測分類	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
30-17	甕	A 2 口 ↓ 胴上	P	16.0	口辺部は直立気味に立ち上り中央より外反する。口唇部外側に一条の凹線をめぐらす。	口辺部ヨコナデ後ヘラミガキ 胴上部ヘラミガキ	口辺部ヘラミガキ 胴上部ナデ	茶褐色 I区床面
30-18	坏	A 12 口 ↓ 底	P	13.0 4.5 -	口辺部は外傾しつつ内弯する。口唇部内側に一条の凹線がめぐる。稜は器形の中央より下位にある。	口辺部はヨコナデ 底部はヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 底部はヘラミガキ	黄褐色 III区床面
30-19	坏	A 12 口 ↓ 底	P	12.5 4.0 4.0	口辺部は外傾しながら内弯する。中央部より下位に稜を有す。	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部～底部ヘラミガキ	茶褐色を呈し、内面に黒斑 カマド東脇
30-20	坏	A 13 口 ↓ 底	R	(13.0) (4.0) -	稜は底面近くにある。	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部～底部ヘラミガキ	茶褐色を呈し、内面に黒斑 III区床面
30-21	坏	A 12 口 ↓ 底	P	12.0 4.0 -	口辺部は外傾しながら内弯する。稜は底面近くにある。	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	底部までヨコナデがはいっている。	黄褐色、焼成が大変良く、かなり薄手でスマート。カマド東脇
30-22	坏	A 2 口 ↓ 底	R	14.0 - -	口辺部は外傾しつつ内弯する。稜は底面近くにある。	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部～底部ヘラミガキ 内面黒色	黄褐色 内面黒色 カマド東脇
30-23	坏	B 2 口 ↓ 底	F	(13.0) - -	口辺部は外傾しながら内弯する。稜は体の下位にある。	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	底部付近までヨコナデ	黒色 II区覆土下位
30-24	坏	A 2 口 ↓ 底	R	(12.0) - (-)	口辺部は外傾しながら内弯する。稜は底面近くにある	稜より上部ヨコナデ 稜より下部ヘラケズリ	底部までヨコナデがはいっている。	黄褐色、焼成が大変良く、かなり薄手でスマート、カマド西脇
30-25	坏	A 2 口 ↓ 底	R	(13.0) - (-)	口辺部外反し、稜は体の下位にある。	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 底部ヘラミガキ	黄褐色で剝落がはげしい。カマド
30-26	坏	A 2 口 ↓ 底	R	(13.0) - (-)	口辺部外傾し、体の下位に稜がある。	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 底部ナデ	薄い黄白色 III区覆土下位
30-27	坏	A 2 口 ↓ 底	F	(13.0) - (-)	口辺部外傾し、体の下位に稜がある。	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 底部ヘラミガキ	黄白色 III区覆土下位
30-28	坏	A 12 口 ↓ 底	F	(13.0) - (-)	口辺部は外傾し、底部は丸底を呈すと思われる。	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 底部ナデ	黄褐色。稜の部分をヘラケズリで消去したようにも見える。 カマド東脇
30-29	坏	A 12 口 ↓ 底	R	13.0 (5.0) (-)	口辺部はやや外反する。底部は丸底を呈するものと思われる。	-	-	黄褐色 内外面とも磨耗している。
30-30	坏	A 12 口 ↓ 底	P	14.5 4.0 -	口辺部は大きく外反し丸底を呈す。稜は体の下位にあり肥厚する。口唇部内側に一条の凹線。	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 底部ヘラミガキ	黄褐色 カマド
30-31	坏	A 12 口 ↓ 底	P	14.5 4.0	No30と同じ	口辺部ヨコナデ 底部ヘラケズリの後 ヘミガキ	口辺部ヨコナデ後ヘラミガキ 底部ヘラミガキ	黄褐色 カマド東脇
31-32	甕	A 12 口 ↓ 底	P	24.0 37.0 6.0	口辺部外傾し、中央に一条の凹線をめぐらす。肩部より底部にかけて緩やかに外傾し内弯する。最大径は口径にある。	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴部～底部ナデ	色調は赤褐色を呈し、外側の1/2は黒褐色を呈す。カマド

掲図番号	器形	破片分類部位	実測分類	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
31-33	小形甕	A 12 口 ↓ 底	P	13.0 (10.0) 7.0	底部は丸底気味の平底を呈す。 肩部と口辺部の中位に稜を有す。	口辺部～肩部ヨコナデ 胴部～底部ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ	茶褐色 I区、No 6(甕)内より出土
31-34	?	A 2 台 部	P	— — —	台部はほぼ直立に近い円筒形で かなり厚手である。	—	—	茶褐色 IV区床面
31-35	台付甕? ?	A 2 胴 下	P	— — —	台部は不明、甕部は立上りは 外傾しながらやや内弯している。	ヘラケズリ	台部内面の調整は見ら れない。甕の内面はナ デにより平滑化されて いる。	赤褐色 II区床面
31-36	小形甕	A 2 口 ↓ 胴上	F	(13.0) — —	口辺部直立気味に立ち上り口縁 部は外反する	口辺部～頸部ヨコナデ 胴上部ナデ	口辺部～肩部ヨコナデ	黄褐色 II区床面
31-37	高坏	A 2 脚		— — —	脚部は円錐状に開く。	裾端部はヨコナデ、そ の上部はヘラケズリと なっている	ヨコナデとナデにより きれいに平滑化されて いる。 内面黒色	黄褐色 坏部は内面黒色化 III区床面

ぐる。3はカマド、12はII区床面直上、14はI区床面直上、33は6の内部、36はII区覆土よりそれぞれ出土している。坏形土器は14点出土しており、出土土師器の約4割を占める。9点がカマドおよびカマドの東脇に集中して出土した。口辺部外傾しつつ内弯するもの18~24があり、主体を占めている。18には甕、甕形土器にみられた一条の沈線を口唇部内側に有す。口辺部外反する25、口辺部外傾する26・27、外面に稜を持たないもの28・29がある。28は特にヘラケズリにより稜を消去している。30・31は、口辺部外反し大きく聞く、しかも相方とも口唇部内側に一条の沈線を有する。総じて、外稜を持つものは12点あり、すべて体部の下位に位置する。内面のヘラミガキは全体的に簡単になされており、18~21と内面黒色の22の5点が比較的丁寧になされているだけでである。38は石質安山岩の凹石で、18cm×17cmのほぼ円形を呈す。礫群内より出土した。39は、カマドより出土した臼玉で滑石製である。

まとめ

本住居址覆土内に床面直上の位置から、礫群が検出されたが、出土遺物は少く時期、性格等を言及することは困難である。しかし、覆土の状態は人為的な堆積を想定させ、H 6、H 10号住居址内の礫群ともども注視される。本住居址からは、4個のピットが検出されたが、P₂・P₃・P₄は主柱穴におもわれるが、東北隅には主柱穴に該当するピットが存在せず、壁外ピットが考えられるも、H 9号住居址との重複があり確認されなかった。P₄は、規模、位置などから貯蔵穴かと想定される。多量に出土した土師器は、カマドおよびカマド東脇にその偏在性がみられた。H 4・12・17号住居址とともに胴の張る甕形土器の遺存状態、出土位置はこの甕形土器の持つ機能的意味を示唆するものではないだろうか。出土遺物は、甕形土器の口唇部などの特徴、坏形土器の口辺部の特徴などは、鬼高期後葉もしくはやや新しい様相をおびているとおもわれる。

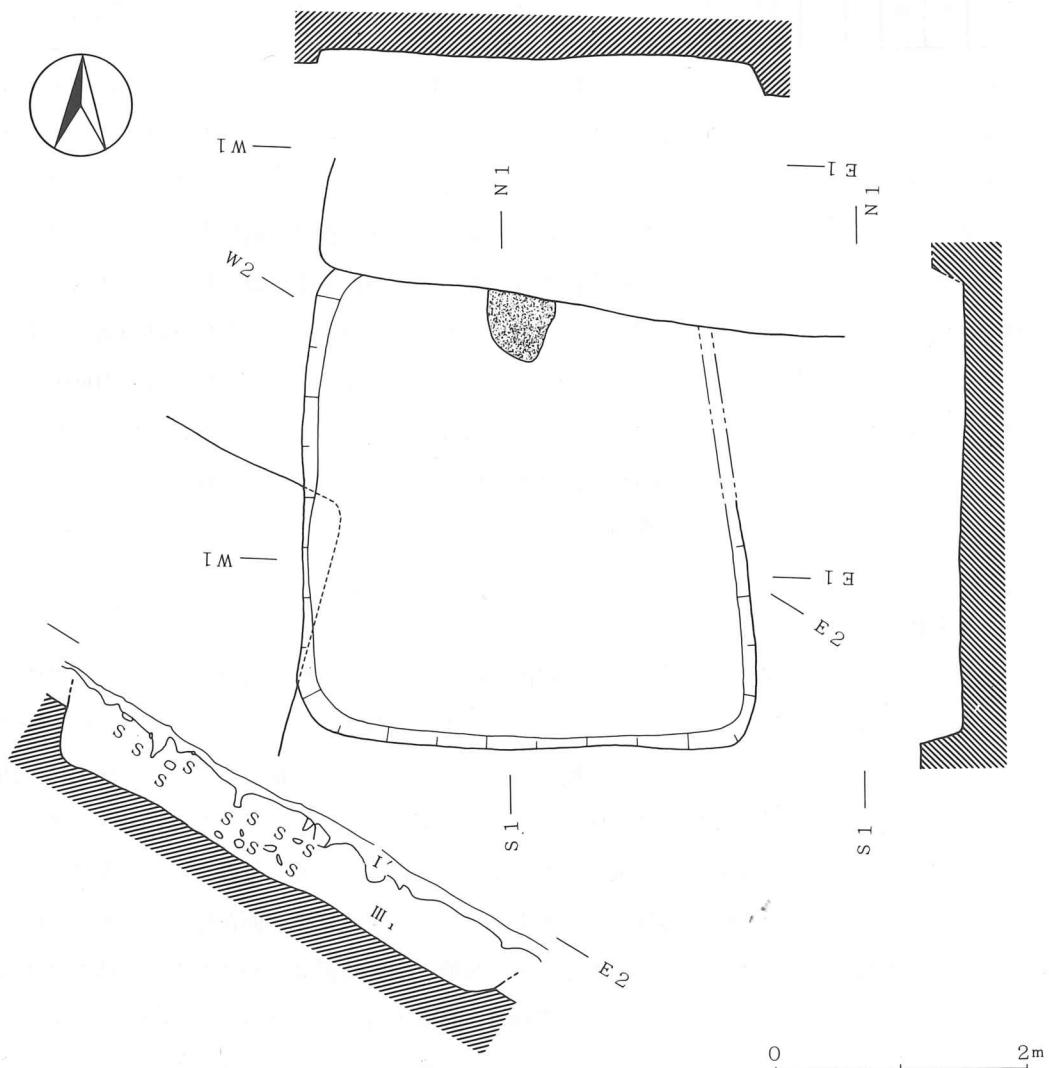
(三石 延雄 林 幸彦)

9) H 9号住居址

遺構 (第35図)

本住居址は、8・9—I・J・K、10—J グリット内に位置し、H13号住に北壁を、H 8号住に西壁南部上辺を切られており、試掘トレレンチにより東壁の北部を取られている。しかし北西隅の曲がりがわずかに見られるのでプランを推測することは可能である。平面プランは（推測であるが）南北 350cm、東西 330cm のやや南北に長い隅丸方形を呈すものと思われる。

床面北側のほぼ中央に、焼土の散布が観察され、H13号住居址の存在を考慮すると、カマドは北壁のほぼ中央に構築されていたものと思われる。ピットは検出されない。



第32図 H 9号住居址実測図 (1 : 60)

遺物（第33図 1～6）

本住居址出土遺物中図示したものは、小形甕形土器2点、壺形土器4点で、2と6は床面直上より、1・3・4・5は覆土下部より出土した。

(三石 延雄)

10) H 10号住居址

遺構（第34・35図）

本住居址は、A地点最南端、10・11・12—F・G・Hグリット内より検出され、H 8号住居址南東に位置し単独で存在する。

平面プランは、北壁 390cm、南壁 400cm、東壁 400cm、西壁 395cmのやや角の角張った方形を呈し、床面積は約15.6m²である。また主軸方位はN—9°—Wを示す。

確認面からの壁高は26.5cm～39cmを測り、比較的急な傾斜をもって立ち上がっている。床面は中央部付近に部分的に敲床らしき硬い部分も観察されたが、他の大部分は比較的軟弱である。

覆土は1層で、上部に礫群の存在が認められる。

カマドは、北壁中央に掘り込みと袖石の一部、又僅かであるが焼土粒子の散布が見られ、当時この部分に構築されていたことは確実であるが、破壊された状態よりきれいに取りのぞかれていると表現したほうが妥当な状態である。

ピットは4個所検出され、P₁は径30cm、深さ25cmの円形を呈す。P₂は径40cm、深さ25cmの円形を呈す。P₃は長軸50cm、短軸35cm、深さ25cmの長軸が東西方向となる楕円形を呈す。P₁は北東隅に偏よっているが、P₂～P₃は隣接の壁下場から90～110cmの距離に規則的に検出された。この4つのピットは、位置、規模から確実に主柱穴と思われる。

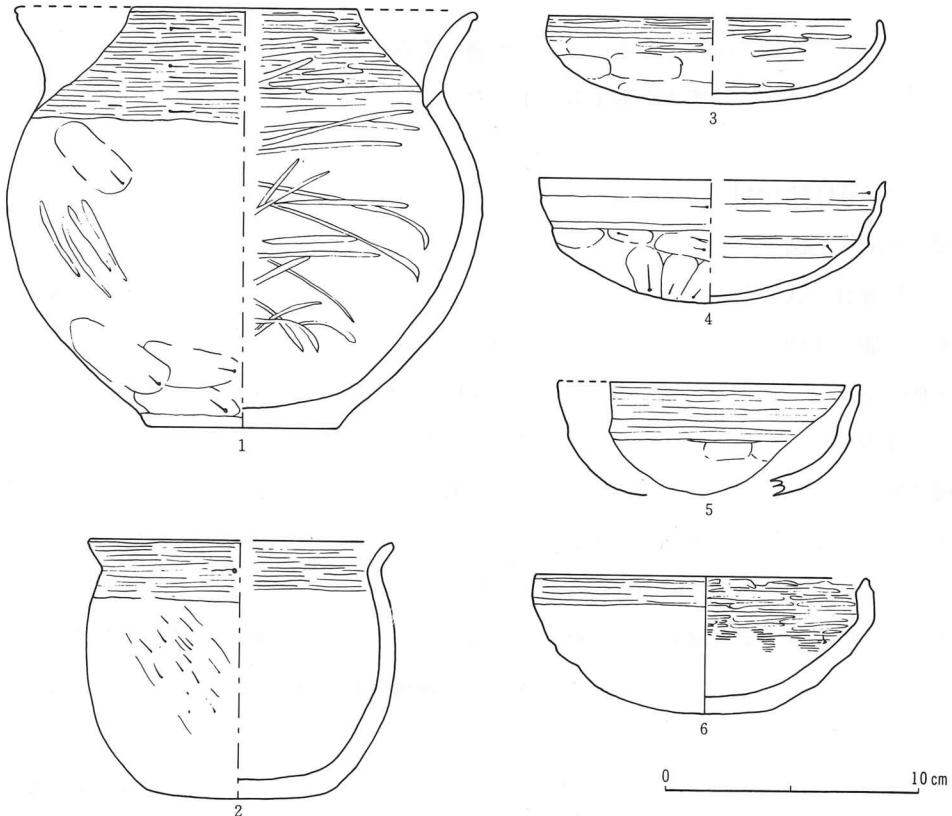
礫群は、覆土上部一面に浮いた状態で検出され、礫の大きさは拳大がほとんどを占め、小礫もかなり混入している。又カマドに使用されたと思われる焼石（凝灰岩）が5ヶ、凹石も1ヶ検出されている。

遺物（第36図 1～11）

本住居址の出土遺物は、土師器、須恵器少量、石器がある。甕形土器1点、壺形土器4点、椀形土器1点、高壺形土器2点、底部2点、凹石1点が実測可能なものであった。

4は礫群上部より、2・10は礫群中より、3・5・9は礫群下より、6は床面より、7はカマド内より、1・7はサブトレンチ内より出土している。

1は胴部に最大径を有す甕形土器で、胴部は丸みをおびると思われる。3・6・7・8は壺形土器で、口縁部がやや内湾し丸底を呈すもの（3・8）、素縁口辺で、本遺構では出土例の少ない内面黒色のもの（6・7）、又特に7は外面も入念なヘラミガキによって仕上げられている。



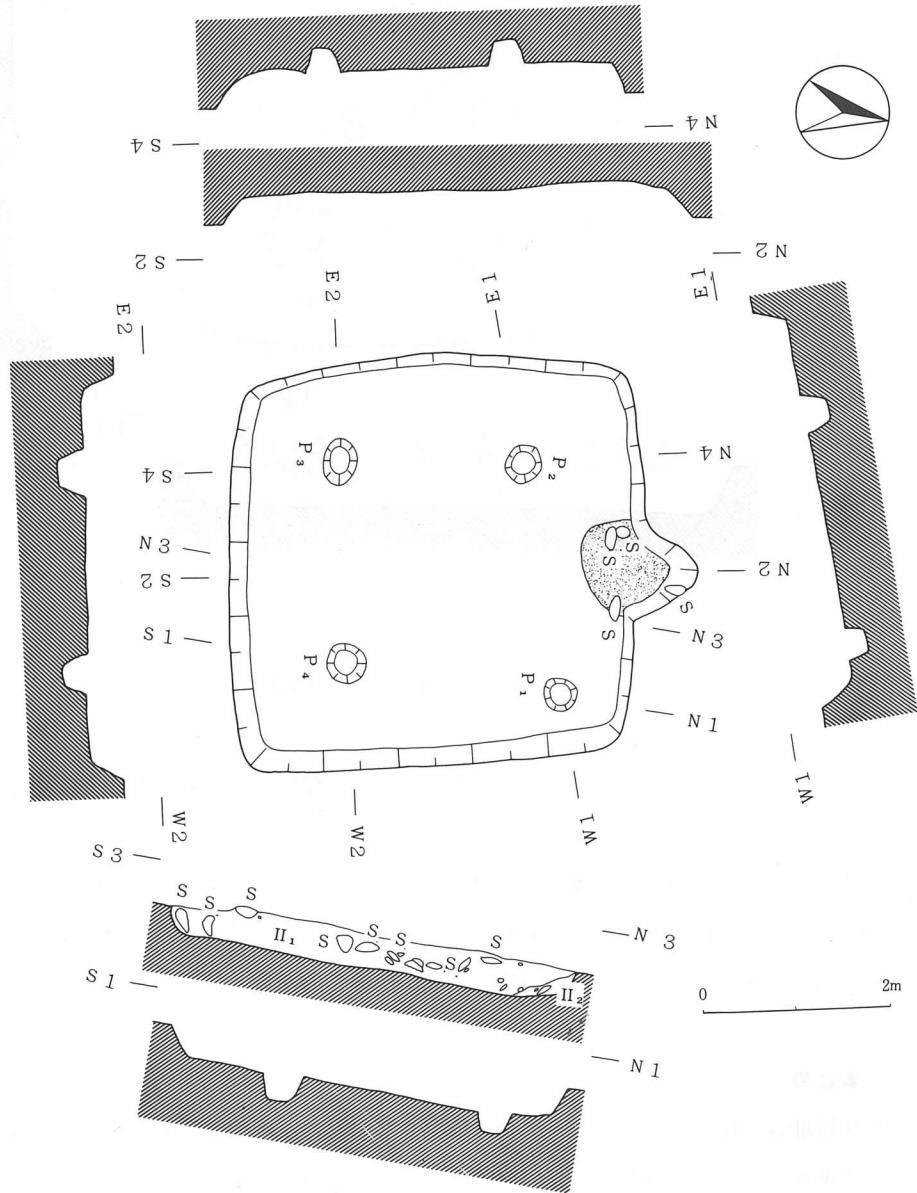
第33図 H 9号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)

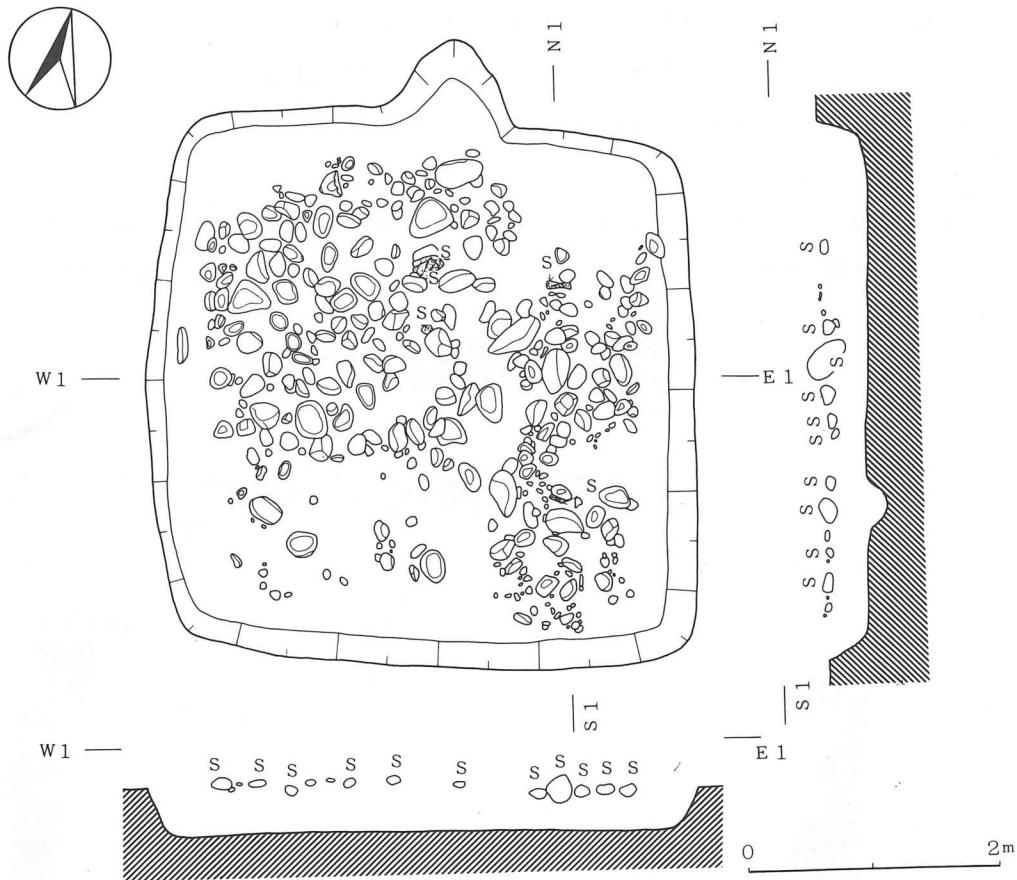
第10表 H 9号住居址出土土器一覧表

探査番号	器形	破片分類	実測部位	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
33- 1	小形甕	A 13 口 底	R	(18.0) 16.7 7.5	胴部中位に最大径あり、胴部は丸味をおびる。 平底である。	口辺部～肩部ヨコナデ 胴部～底部ヘラケズリ 後ヘラミガキ	口辺部～頸部ヨコナデ 後ヘラミガキ。胴部～底部水平方向のヘラミ ガキ	茶褐色 床面中央
33- 2	小形甕	A 13 口 底	R	(12.0) 10.5 (7.0)	胴部中位に最大径があるが口径と大差ない。丸底氣味の平底で全体にすづまりである。	口辺部ヨコナデ 胴部～底部かなり荒い ヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 胴部～底部はナデにより平滑化	茶褐色 床面中央
33- 3	坏	A 13 口 底	R	(13.0) 3.4	口辺部短く内傾し器高は浅い。 平底を呈す。	口辺部からかなり底面に近いところまで条のあるヨコナデ。 底部はヘラケズリ	底面付近まで条のあるヨコナデ 底面はヘラミガキ 内面黒色	内面黒色、外側黒褐色 覆土
33- 4	坏	A 13 口 底	R	(14.0) 5.0	口辺部外傾しつつ内弯する。体の中央に稜を有す。	口辺部はヨコナデ 底部はヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 底部ヘラミガキ	茶褐色 かなり焼成がよい 覆土下
33- 5	坏	A 13 口 底	F	(12.0) — (・)	No 4 と同形ではないかと思われる。	口辺部はヨコナデ 底部はヘラケズリ	口辺部ヨコナデ 底部ヘラミガキ	茶褐色 覆土下
33- 6	坏	A 12 口 底	P	13.5 5.5 •	口辺部やや内傾し、底部は平底氣味の丸底	口辺部ヨコナデ 底部剝落	口辺部付近は水平方向のヘラミガキ。 底面に近づくにしたがって剝落がはげしい。	黄褐色 床面

9・10は高壺形土器の脚部のみで全体の器形は判明しない。2・5は底部のみで器形は明確でないが、2は底径が8cmと長胴の甕にしてはやや大きく、調整の類似や残存部の立ち上がり方から小形甕形土器とおもわれる。5は内外面ともヘラミガキによって仕上げられており椀形土器と推察される。

その他、第36図に示したものとは別個体で実測可能なものが数点ある。1と近似する胴が丸みをおびる甕形土器、底部から角ばらずに立ち上がり外面から穿孔された多孔の甕形土器、約20cm





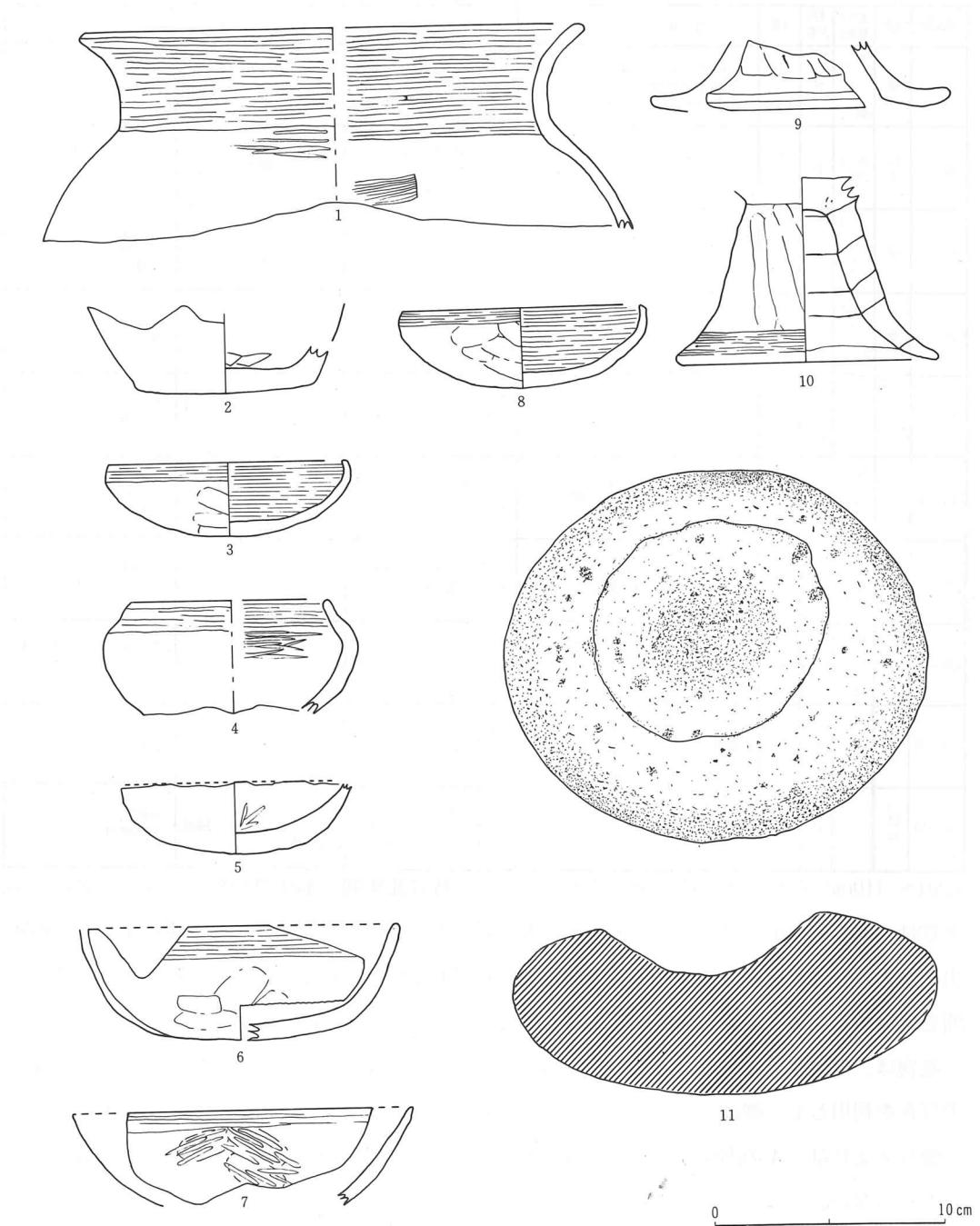
第35図 H 10号住居址覆土内礫群実測図 (1 : 60)

の口径と推定される内外面ヘラミガキが施されている杯形土器（3・8と同様）が出土している。

11は石質が安山岩の凹石で礫群中より出土している。大きさは18.5×14cmの楕円形を呈し、厚さは8cmを測る。孔は10cm×9cmの偏円を呈し、深さ2.5cmである。石質の特性のため、くぼめられた面は、凹凸が著しくざらついている。全体に角がなく河原石を使用したものである。

まとめ

本住居址は、IV層を切り込み、単独で検出されたため、本遺跡で最も明確に把握できた遺構の一つである。プランは概むね、一辺400cmのやや角ばった方形を呈し、カマドはすでに撤去されており、その初源的形態は観察できない。しかし覆土上部の礫群の存在、ピットが、距離を測か



第36図 H 10号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)

ったように設定されていることなど多くの情報が得られる。

主柱穴と思われるP₁～P₄であるが、遺構の項で述べたとおり P₂～P₃はほぼ隣接の壁の下場か

第11表 H 10号住居址出土土器一覧表

插図番号	器形	破片分類部位	実測分類	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
36-1	甕	A 2 口 胴上	R	22.0 — —	口辺部は直立気味に立ち上り、口縁部は外傾する。同部に最大径を有する大きな甕	口辺部～頸部にかけてヨコナデ、その下部にはヘラケズリの後、ヘラミガキの痕跡が認められる。	口辺部～頸部ヨコナデその下部はナデ調整。尚、所々には木端調整も見られる。	黄褐色 サブトレチ
36-2	椀?	A 2 底	P	— — 8.0	丸底気味の平底	底部の接地面はヘラケズリの後、ナデによる平滑化がなされている	底面に木端のような用具による跡が放射状にみられる	茶褐色 碗の底部か? II区礫群中
36-3	坏	A 13 口 底	P	10.5 3.5 •	丸底で口辺部付近に致るとやや内傾する。	口辺部付近ヨコナデ その下部はヘラケズリ	かなり底面付近までヨコナデで、底面はナデにより平滑化されている	黄褐色。No 8に比すると焼成がややわらい。 礫群下
36-4	椀	A 2 口 胴下	R	8.5 — —	口縁部がつぼまり、内傾した立ち上り口辺を有す	口辺部付近はヨコナデ その下部は削落のため明確ではないが、ヘラケズリ調整と考えらる	口辺部付近はヨコナデ その下部はヘラミガキ	茶褐色 礫群上
36-5	?	A 2 底	P	— — •	丸底	底部付近はヘラケズリの後、水平方向のヘラミガキが認められる	底面はナデにより平滑化されている。	褐色 IV区礫群下
36-6	坏	A 13 口 底	F	(13.0) 5.0 •	丸底でやや内弯した口縁	口辺部付近ヨコナデ その下部はヘラケズリ	内面黒色	外面黄褐色 床面
36-7	坏	A 2 口	F	15.0 — —	口辺部はやや内弯しているもののかなり直線的に外傾する	口辺部付近はヨコナデ その下部はヘラケズリ	内面黒色	外面黄褐色 サブトレチ
36-8	坏	A 12 口 底	P	10.5 3.5 •	丸底で口辺部付近に致るとやや内傾する	口辺部付近ヨコナデ その下部はヘラケズリ	かなり底面付近までヨコナデで、底面はナデにより平滑化されている	ほぼ完形、内面は赤褐色、外面は黒斑が大部分を占める。カマド
36-9	高坏	A 2 脚	F	— — —	裾端部が接地面より上がる。	裾端部付近はヨコナデ その上部はヘラケズリ	左 同	黄褐色 礫群下
36-10	高坏	A 2 脚	P	— — —	脚部はかなりラッパ状に開く 坏部は不明	裾部先端はヨコナデがあり、他の部分はほぼ垂直方向のヘラケズリ	脚部先端付近はヨコナデで、他の部分は輪積痕が残る。	黄褐色 I区礫群中

ら90～110cmの距離に規則的に検出されたものの、Rは北東隅に偏りが見られる。このRの偏りよりは、本遺跡検出遺構中、H 4・8・12等に見られるカマドの右側部より多量の半完成土器の出土があり、これを考慮すると、この部分土器置場的空間等の必要性が考えられ、より多くの空間を確保するため、規則的位置よりずらして設置したものと推察される。

遺物は、III層序で述べてあるとおり、覆土の堆積状態が異質でしかも一層であったため、礫群の存在を利用して、礫群より上・中・下と3分類して取り上げる。

礫群上よりは、4の内傾した小形の椀が出土しており、底部が欠損して不明であるが脚が付くかもしれない。

礫群中よりは、2・10・11の3点出土しており、椀?の底部と高坏の脚部である。

礫群下よりは、3・5・6・9の4点出土しており、3・6・9は素縁の口辺部を有す坏形土器で、そのうち3・9はほぼ同じ形態を呈し、やや口縁部が内傾気味である。

いずれの土器も、鬼高峰期の特徴を有す個体で、時間的差はないと思われる。(森泉 定勝)

11) H 11号住居址

遺構（第37図）

本住居址は、B地
点23・24・25—E・
F・Gグリット内に
おいて検出され、本
遺跡検出遺構中、最
南端に位置する。

H12号住居址と切
り合い関係にあり、
又覆土内にはT10号
特殊遺構が存在する。

H12号住居址との
新旧関係は、本住居
址のカマドが、H12
号住の南壁を切って
構築されていたこと
から明らかである。

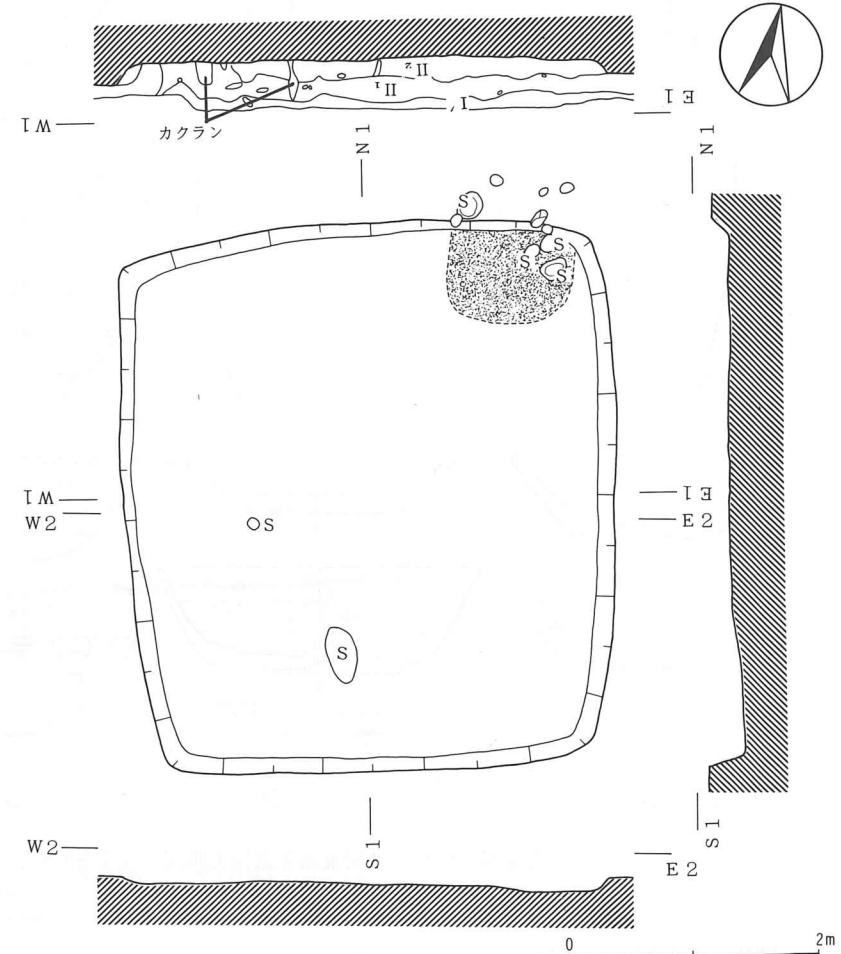
プラン検出は、連
日の乾天により困難
を極め、幾回にもわ
たる散水と東西に設
定したサブトレンチ
により、確認する。

平面プランは、北壁 370cm、南壁 335cm、東壁 400cm、西壁 400cmで南北にやや長い方形を呈
し、主軸方位はN—10°—Wを示す。

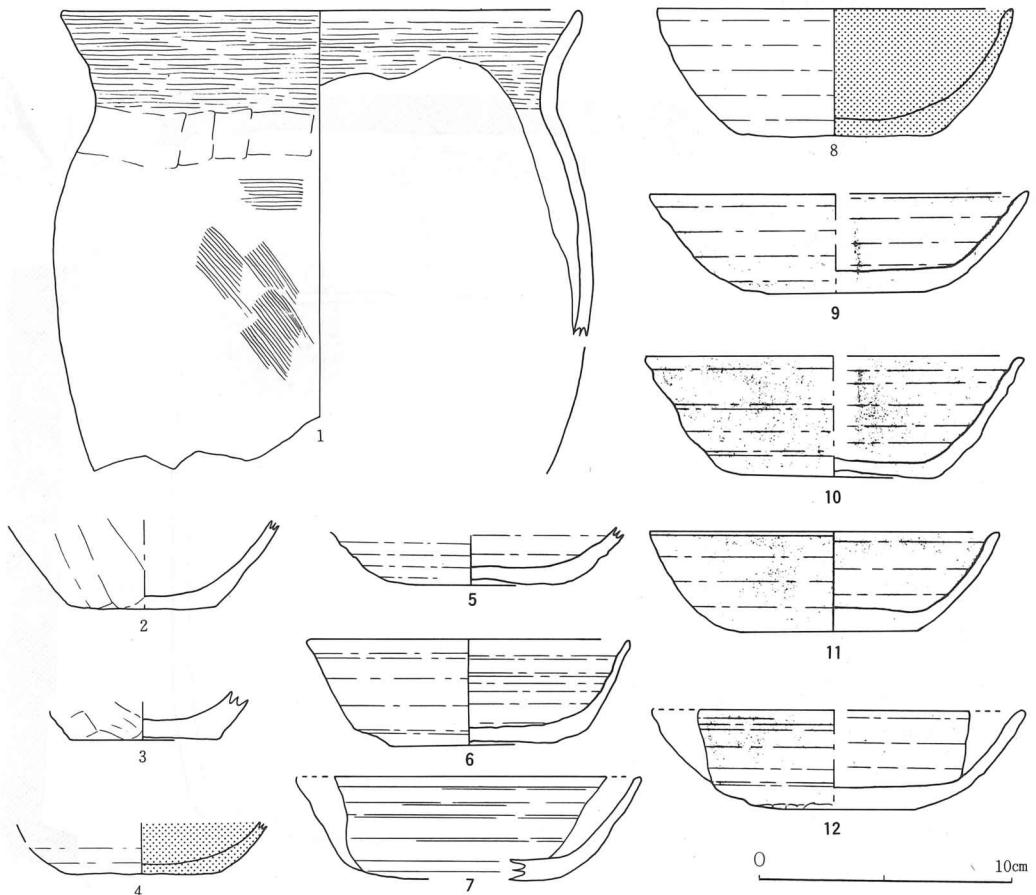
壁高は、確認面から4～25cmを測り、ほぼ垂直に近い立ち上がりを見せており。床面は、やや
西側が高く、東側にゆるやかに傾斜しているが、概むね平坦である。

カマドは、H12号住居址の南壁を切って、北壁東隅に焼土粒、安山岩の検出がみられ、安山岩
の大部分は焼石であったことから、すでに破壊されてその原形をとどめていないが、ほぼこの位
置に構築されていたものと推察される。

ピット、その他の付属施設は検出されない。



第37図 H11号住居址実測図 (1 : 60)



第38図 H 11号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)

遺物 (第38図 1~12)

本住居址からは、土師器、須恵器が出土した。第38図に示したものは、土師器の甕形土器3点（2点は底部のみ）、杯形土器2点、須恵器の壺形土器7点である。

遺構の項で述べたように、崩壊したカマドの内部及び付近から1・2・3・6・8・10・11・12の8点、またカマドの存在するI区の覆土下部から4・7が検出された。9はII・III・IV区の覆土下部より出土した破片が接合した。

1の甕形土器は、口辺部から胴中央付近までしかないが、口辺部付近はロクロ痕、胴上部よりヘラケズリにより整形、調整が行なわれている。

又壺形土器の4・5・7・8・9・12は、底部糸切りのあとヘラケズリによりさらに調整されている痕跡が認められる。特に12は、底部最外円部のみにきれいにヘラケズリが行なわれており中心部には、きれいな糸切り痕があざやかに残っていた。

第12表 H 11号住居址出土土器一覧表

插図番号	器形	破片分類部位	実測分類	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
38-1	甕	A 2 口 下	P	— — 21.0	口辺緩く外反	口辺クロロ痕 胴部はヘラケズリ	口辺部付近のロクロ痕 その下部はナデにより平滑化	赤褐色 一部黒斑を有する カマド
38-2	甕	A 2 底	R	— — —	底部は平底	底面までヘラケズリ	ナデにより平滑化	茶褐色一部黒斑を有する。 カマド
38-3	甕?	A 2 底	P	— — 6.0	底部は上底	底部は糸切 その上部はヘラケズリ	ナデにより平滑化	茶褐色 カマド
38-4	壺	A 2 底	P	— — 6.0	底部は平底	ロクロ痕 底部はヘラケズリで平滑化	内面黒色	茶褐色 I 区覆土下部
38-5	壺	A 2 口 下	P	— — 7.0	底部は上底	ロクロ痕 底部は糸切の後ヘラケズリ	ロクロ痕	黄灰色 IV区覆土下部
38-6	壺	A12 口 下	P	13.0 4.0 9.0	底部付近は台付と似ており上底 口辺部は外傾し、口縁部付近は更に開く。	ロクロ痕 底部は糸切	ロクロ痕	青灰色 I 区床面カマド側
38-7	壺	口 底	F	(13.0) 4.0 (7.0)	口辺部やや外傾しながら内弯する。	ロクロ痕 底部はヘラケズリにより平滑化	ロクロ痕	黄灰色 I 区覆土
38-8	壺	A 12 口 底	P	14.0 5.0 8.0	口辺部やや外傾しながら内弯する。	底面は糸切の後ヘラケズリにより平滑化、体部はロクロ痕	内面黒色 ヘラミガキ	白黄色 カマド
38-9	壺	A13 口 下	R	(15.0) 4.0 (7.0)	底部は平底 体部は直線的に外傾する	ロクロ痕 底部はヘラケズリにより平滑化	ロクロ痕	灰色 II・III・IV区出土片接合
38-10	壺	A13 口 下	R	(15.0) 5.0 (8.0)	底部は上底 口辺部は外傾しつつやや内弯する	ロクロ痕 底部は糸切	ロウロ痕	黄灰色 カマド
38-11	壺	A13 口 下	P	13.0 4.0 7.0	底部は平底 体部はやや外傾しながら内弯する	ロクロ痕 底部は糸切	ロクロ痕	緑灰色 カマド
38-12	壺	A12 口 下	R	(15.0) 4.0 (7.0)	口辺部はやや外傾しながら内弯する	ロクロ痕 底部は糸切の後最外円部ヘラケズリ	ロクロ痕	黄灰色一部黒斑 カマド

まとめ

本住居址は、東西約 350cm、南北 400cmの南北に長い方形を呈し、カマドは、北壁の北東隅に構築されていたものと思われ、主柱穴の存在は認められない。

遺物は、須恵器壺の個体数が多く、遺物の項で述べたように、杯の底部の調整に特徴がみられる。1の甕の存在、須恵器の量的増大等を考えて、本住居址は国分期以前には古くならないと思われる。

(井上 行雄)

12) H 12号住居址

遺構（第39図）

本住居址は、B地
点22・23-E・Fグ
リット内に位置し、
H11号住居址と切り
合い関係を有し、ブ
ラン内ほぼ中央にT
3号特殊遺構が存在
する。H11号住居址
との切り合い関係に
ついては、H11号住
居址の項で述べてい
るおり、南壁を切
ってカマドが存在す
ることにより、本住
居址が古いことは明
らかである。

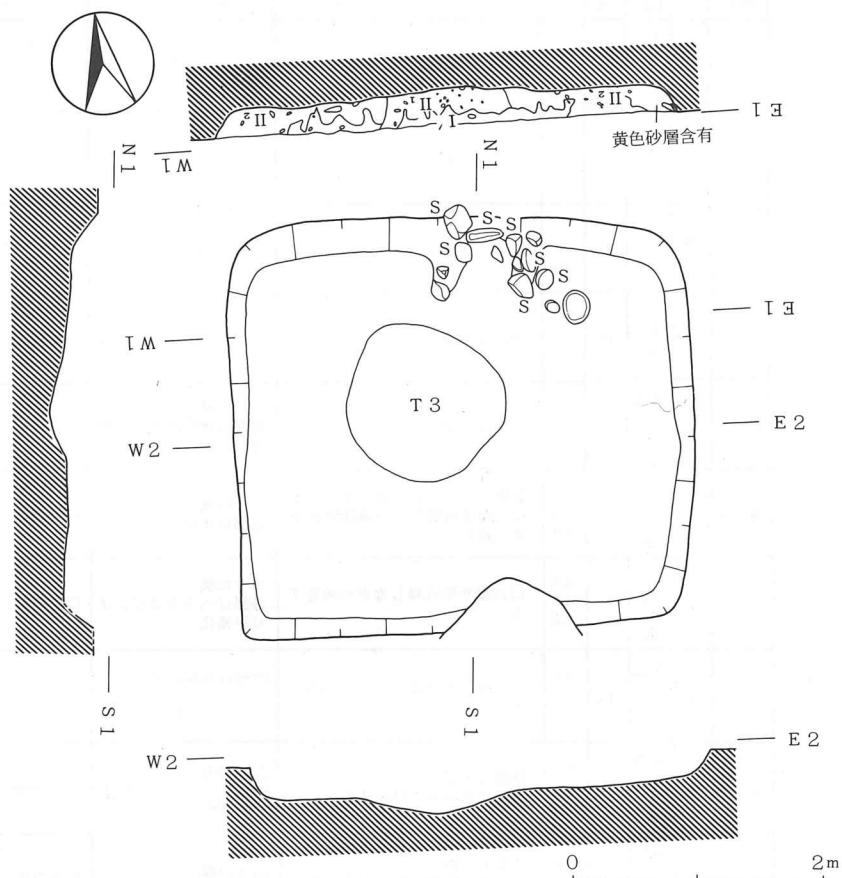
T 3号特殊遺構は、
覆土（第39図II₁層）
が漆黒色で、II₂層を
切り込んでいるため
明らかである。

平面プランは、北壁 340cm、南壁 340cm、東壁 300cm、西壁 310cmの東西にやや長い方形を呈
し、主軸方位はN-10°-Wを示す。

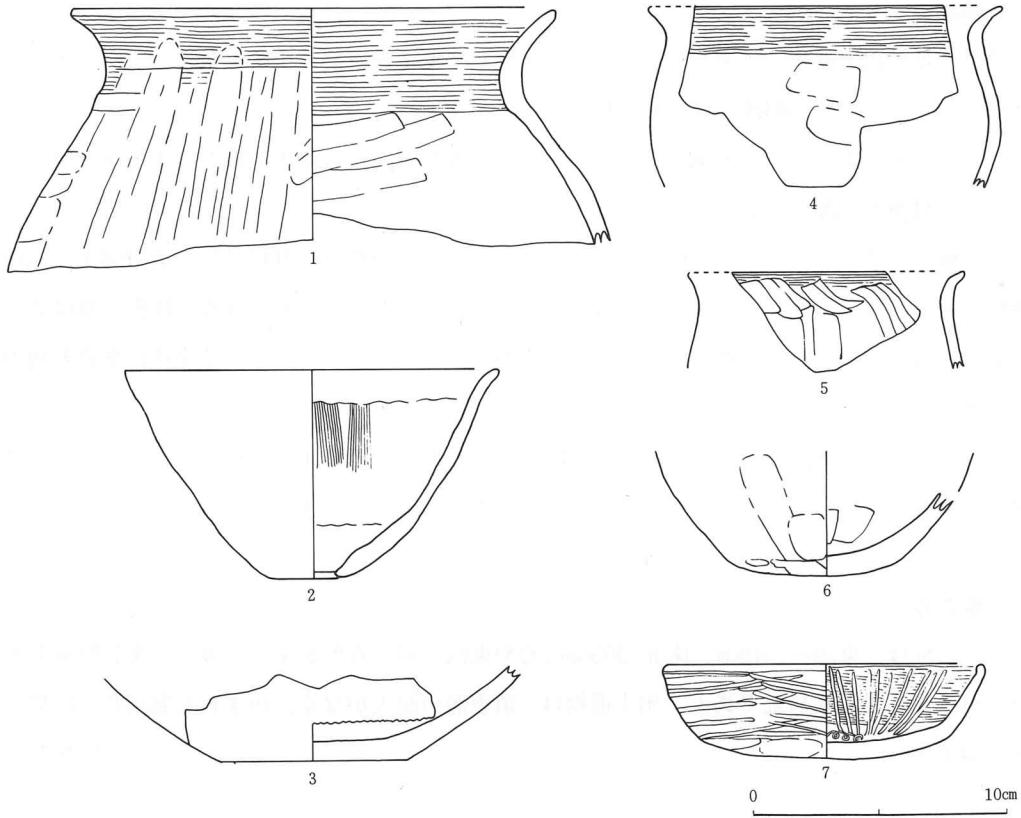
壁高は、14.5~25cmを測り、ほぼ垂直に近い立ち上がりを見せている。床面は、中央よりやや
北西よりにT 3号特殊遺構、南壁の一部をH11号住居址に切られているため判然としないが、ほ
ぼ平坦である。

カマドは、北壁の中央よりやや東よりに（図版10・8）、安山岩を使用して作ったと思われる。
両袖部及び支脚が存在したが、焼土粒の散布はほとんどみられなかった。又その右側部からは甌、
やや球胴状の甌の半完全形品が出土している。

ピット及びその他付属施設は検出されない。



第39図 H 12号住居址実測図（1：60）



第40図 H 12号住居址出土遺物実測図（1：3）

第13表 H 12号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器形	破片分類部位	実測分類	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
40-1	甕	A 2 口 ↓ 胴上	P	19.0 — —	口辺部直立気味に立ち上り、口縁部は外反する。 最大径は胴部とおもわれる。	口辺部から頸部にかけてヨコナデ、肩部から下部はヘラケズリ	口辺部から頸部にかけてヨコナデ。肩部より下部はヘラミガナデ	黄褐色 I区、カマド東脇床面直上
40-2	甌	A 12 口 ↓ 底	P	16.0 8.5 3.0	やや内弯しながら、逆八の字状に開く。口縁部付近はさらに外傾	全面剥落のため不明	口縁部、底面付近、剥落し不明、その中はハケ目の後ナデにより平滑化	黄褐色 I区、カマド東脇床面直上
40-3	?	A 2 底	F	— 7.0	直線的に外傾している。	ヘラミガキが局部的にみえる	不明	黄褐色 カマド内
40-4	小形甕	A 2 口	F	(14.0) — —	口径が最大径となる小形な器形	口辺部から頸部にかけてヨコナデ、その下部はヘラケズリ	口辺部から頸部にかけてヨコナデ。その下部はナデ調整	内面暗灰色 外面黄褐色 III区、覆土下部
40-5	小形甕	A 2 口 ↓ 胴上	F	(11.0) — —	口縁部がわずかに開く小形の器形	口辺部付近はヨコナデをしたあと更にヘラミガキが見られる	ヨコナデ	赤褐色 III区覆土下部
40-6	?	A 12 口 ↓ 底	P	— 6.0	丸底気味の平底	底部付近はヘラケズリ	底面付近はナデにより平滑化されている	茶褐色、焼成がよい I区カマド東脇床面直上
40-7	坏	A 12 口 ↓ 底	P	13.0 3.8 0	口辺部外傾しつつ内弯し、口縁部やや内弯する。底部は平底気味の丸底	口辺部はヨコナデ、平底気味となる部分までヘラミガキ、底面はヘラケズリ	ヘラミガキ	赤褐色 覆土下部

遺物（第40図 1～7）

本住居址の出土遺物で、図示したものは、土師器の甌1点、甕形土器1点、小形甕形土器2点、坏形土器1点、器形の明確でない底部片が2点である。

1・2・6はI区（カマド東脇床面出土）、3はカマド内から検出された。4・5はIII区覆土下部、7は覆土下部より出土した。

2の甌は、逆「八」の字の器形を呈し、一孔を有す。1の甕は、H17号住（第51図1）と器形、調整が近似している。4・5の小形甕は、いずれも、口辺部が短く外反する。杯形土器は7の1点で、外面口辺部は丁寧な横方向のヘラミガキがなされ、内面口辺部には暗文状に垂直方向の、又底面には、連続の円を描くヘラミガキが施されている。

その他、図示でき得なかつたが、大形の甌とおもわれるもの、1と同様な、肩部に張りを持つ甕、素縁口辺部を有する内面黒色化された坏が、覆土下部より出土している。

まとめ

本住居址は、東西約340cm、南北305cmのやや東西に長い方形を呈し、カマドを北壁中央部付近に有した小型の住居址である。出土遺物は、須恵器の混入がなく、いずれも鬼高期の特徴を有す土器である。

（高村博文）

13) H 13号住居址

遺構（第41図）

本住居址は、6-J・K、7・8-I・J・Kグリット内に位置し、H15号住居址、H9号住居址と切り合い関係を有す。切り合い関係及び、北壁、東壁プランの検出は困難を極め、何回にもわたる精査の結果、H9号住居址→H13号住居址→H15号住居址の順に構築されたことを把握する。

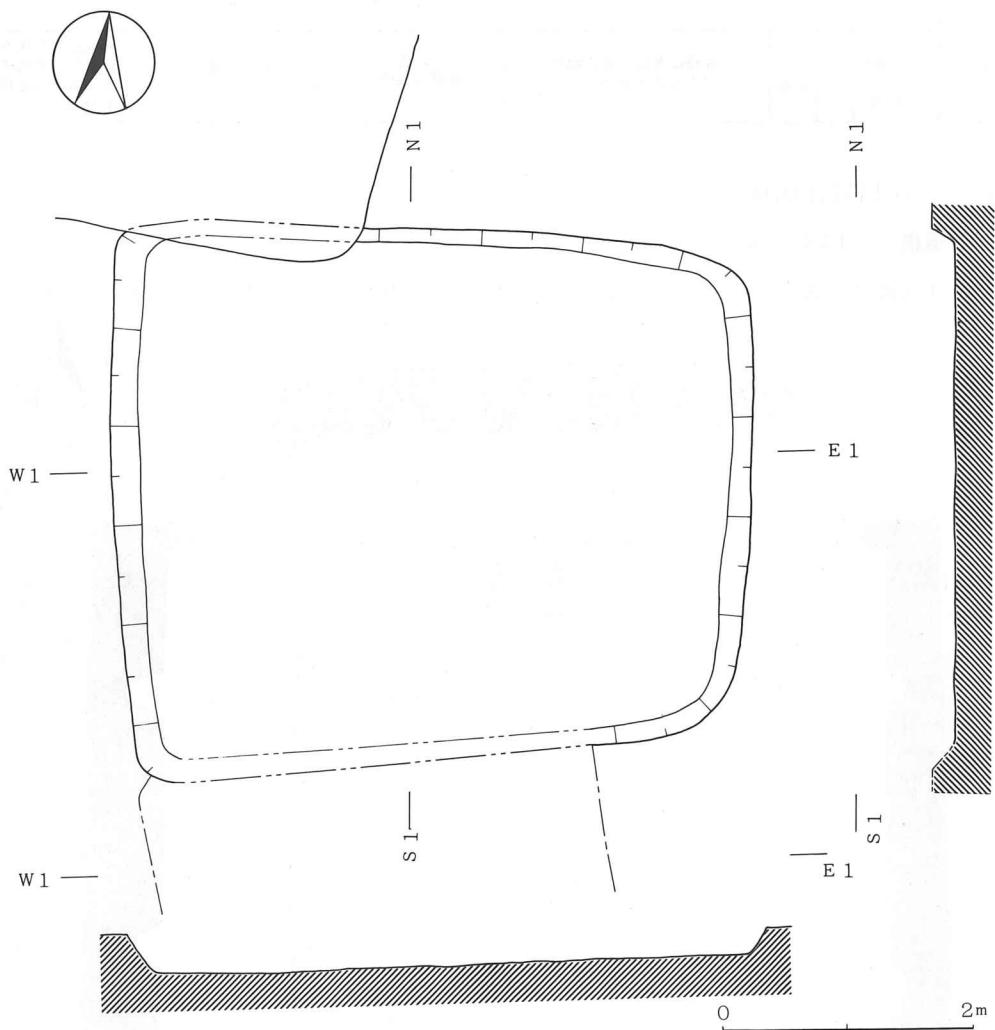
平面プランは、北壁490cm、南壁455cm、東壁355cm、西壁430cmの西壁にやや開く台形を呈し、長軸方位はほぼEを示す。

壁高は、最高値34cmを測り、ほぼ垂直に近い立ち上がりを有す。床面は概むね平坦である。

カマドは、焼土粒の散布地も検出されず不明である。又ピットその他、付属施設の検出も見られない。

遺物（第42図 1）

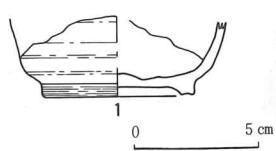
出土遺物は極めて少なく、図示し得た個体は、1の覆土下部より出土した、須恵器の台部～底部付近の1点だけである。



第41図 H 13号住居址実測図（1：60）

まとめ

本住居址は、III層を切り込んで構築した部分が大きかったため、プラン検出の際は困難を極め、西壁がIV層を切り込んで作られていたため、それを手掛かりとして、調査を進めた。又付属施設としてのピット、カマド等の検出は見られない。



第42図 H 13号出土遺物実測

遺物の出土も微少で、時期決定する資料とはなり得ない。

図（1：3）

（高村博文）

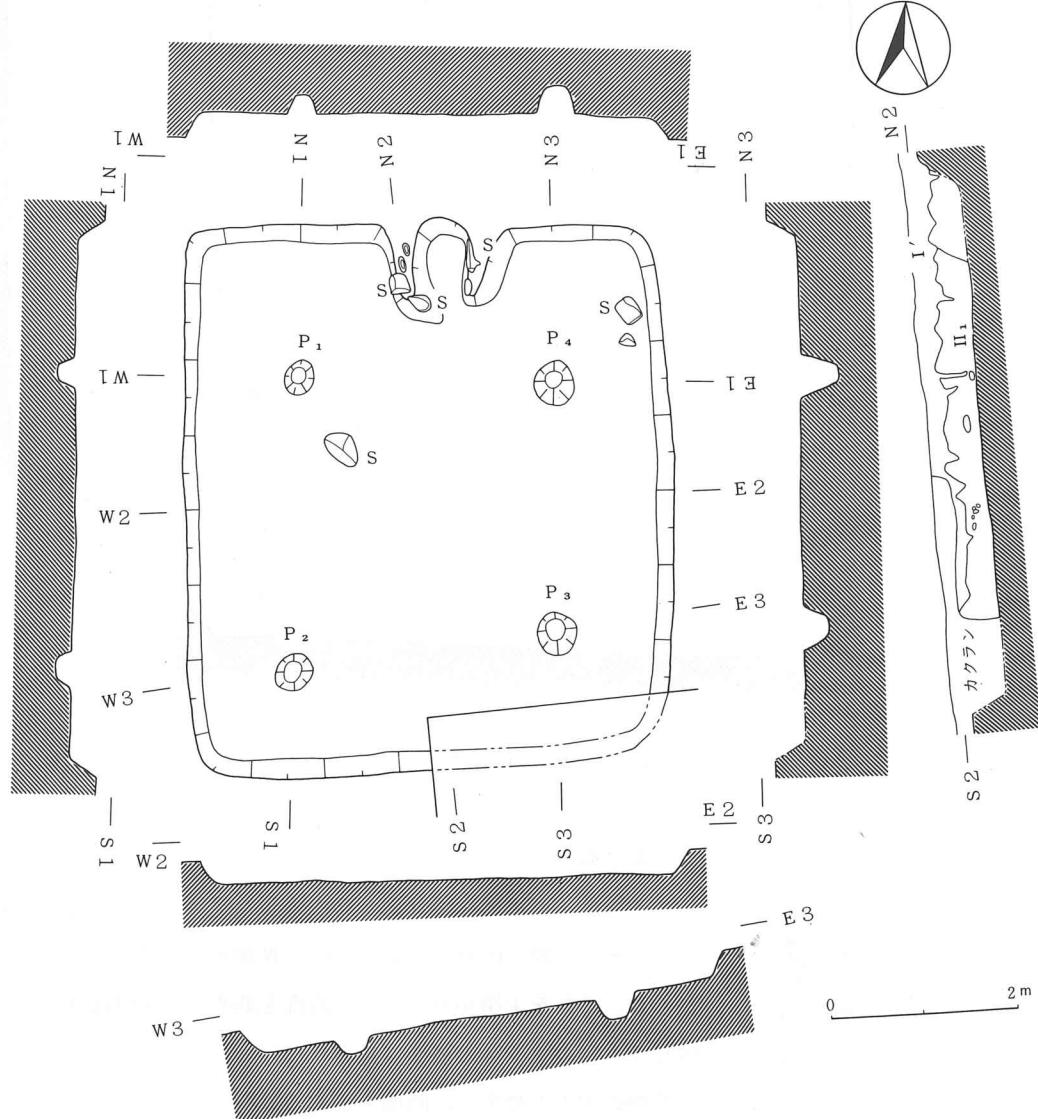
第14表 H 13号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器形	破片分類部位	実測分類		器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
42-1	?	A 2 胴下 底	R	— 6.0	台部は糸切の後に貼付けたものである	口クロ痕 底部は糸切	口クロ痕	外面は青灰色をなし、内面は白色粒子が多量に混入された黒青色をおびる

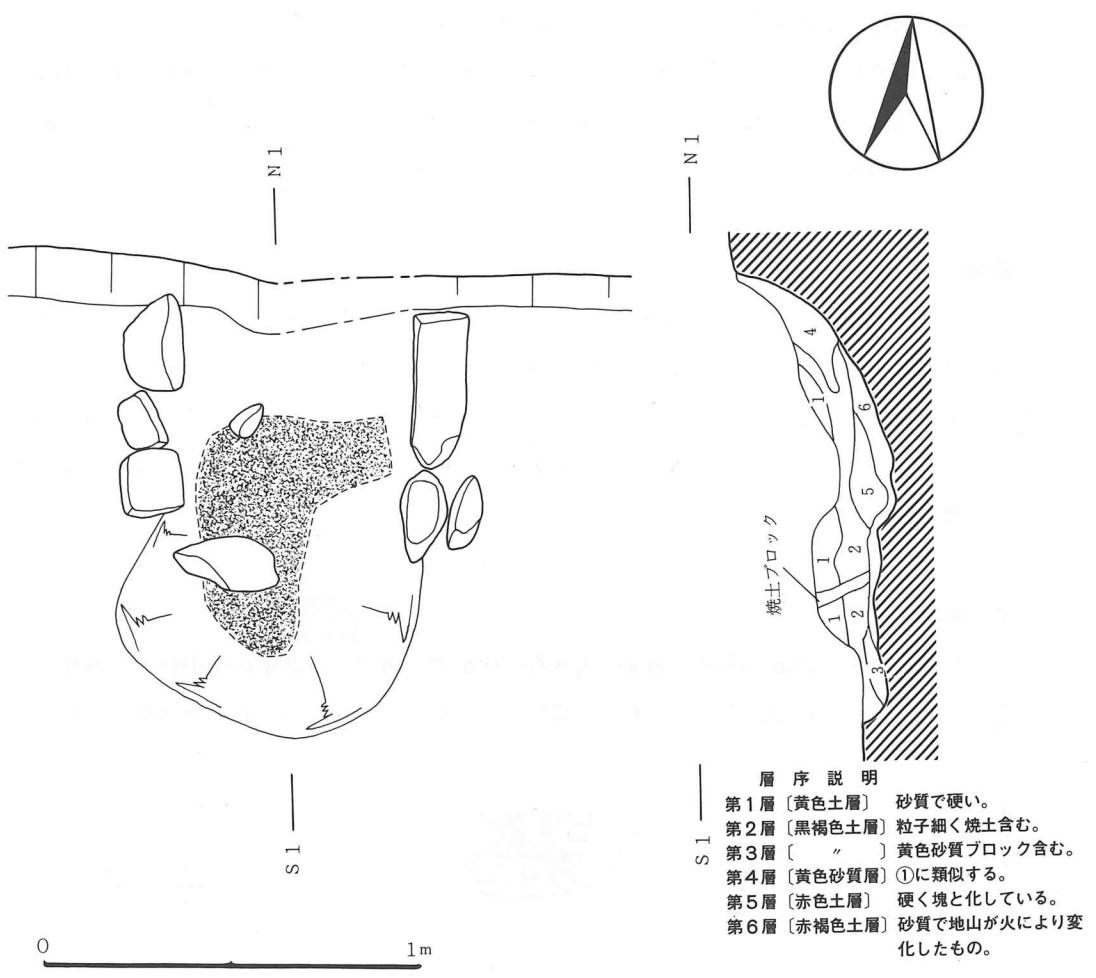
14) H 14号住居址

遺構 (第43図・44図)

本住居址は、A地点南方約20mを測る、B地点19・20・21-E・Fグリット内に位置し、北壁



第43図 H 14号住居址実測図 (1 : 80)



の上部は、表土削平が行なわれていなかった。そのため全員総出により、秋空に汗を流し、廃土除去と表土の削平を行う。他遺構との切り合いはないが東南隅は試掘溝により攪乱されている。プラン確認はむずかしく、南北にサブトレーンチを入れ土層の観察により輪郭を把握する。平面プランは、北壁 485cm、南壁 470cm、東壁 530cm、西壁 575cm と H 4号住居址に次ぐ大きな住居址で、南北に長い長方形を呈し、主軸方位は N-6°-W を測る。壁高は約30cmを測り、壁体はかなり固く、ほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、全体に黄色粒を混入した非常に堅い敲き床が存在する。

カマドは、北壁やや東よりに存在し、未加工の河原石と粘土をもって構築され、両袖部には長

方形に加工された凝灰岩を、東袖では横転させ、西袖には直立させて使用しており、真赤に焼けている。火床部は、広く、深く灰と焼土で埋まっており、長時間使用したと思われ、底面より20cmの上部に、層厚約2cmを測る赤色の土板と化した焼土が存在する。

ピットは4個所検出されており、P₁は径30cm深さ20cmの円形を呈す。P₂は径30cm、深さ20cmの円形を呈す。P₃は径35cm、深さ25cmの円形を呈す。P₄は径40cm深さ40cmの円形を呈す。いずれのピットも住居址の4隅に規則的に配置されており主柱穴と思われる。

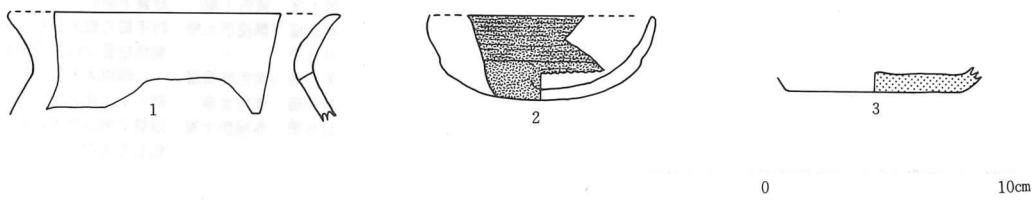
遺物（第45図 1～3）

本住居址で図示できたものは、土師器の小形甕形土器1点、壺形土器2点がある。1は、カマドの西脇床面直上に出土し、2は口辺部が内弯する小形の壺形土器で赤色塗彩されている。内面全体と外面口辺部から稜の下位付近までは明確に看取できるが、接地面周囲の塗彩はほとんど剥落している。3は内面黒色土器である。その他実測不可能で器形の判明したものには、素縁口辺の器厚の薄い壺形土器がある。

まとめ

本住居址は、東西480cm、南北550cmの大きな住居址で、カマドが北壁の中央付近にあり、主柱穴も4個所、はっきりと確認された。出土遺物は、少量であるが、いづれも鬼高期の特徴を有する個体である。

（武藤 金）



第45図 H 14号住居址出土遺物実測図（1：3）

第15表 H 14号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器形	破片分類部位	実測分類	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
45- 1	小形甕	A 2 口	F	(13.0) — —	口辺部が僅かに外傾する器形	剥落がはげしく不明	左 同	茶褐色
45- 2	壺	B 口 ↓ 底	F	(9.0) (3.5)	口辺部外傾しつつ内弯する。 体のほぼ中央に稜を有す	口辺部ヨコナデ 底部はヘラケズリ 全面赤色塗彩	口辺部付近ヨコナデ その他ヘラミガキ 全面赤色塗彩	
45- 3	壺	A 2 底	P	— — 7.0	底部は平底	底部はヘラケズリ	内面黒色	外面黄褐色

15) H 15号住居址

遺構（第46図）

本住居址は、6・7-J・K・Lグリット内に位置し、全体層序III、IV層を切り込んで構築されている。

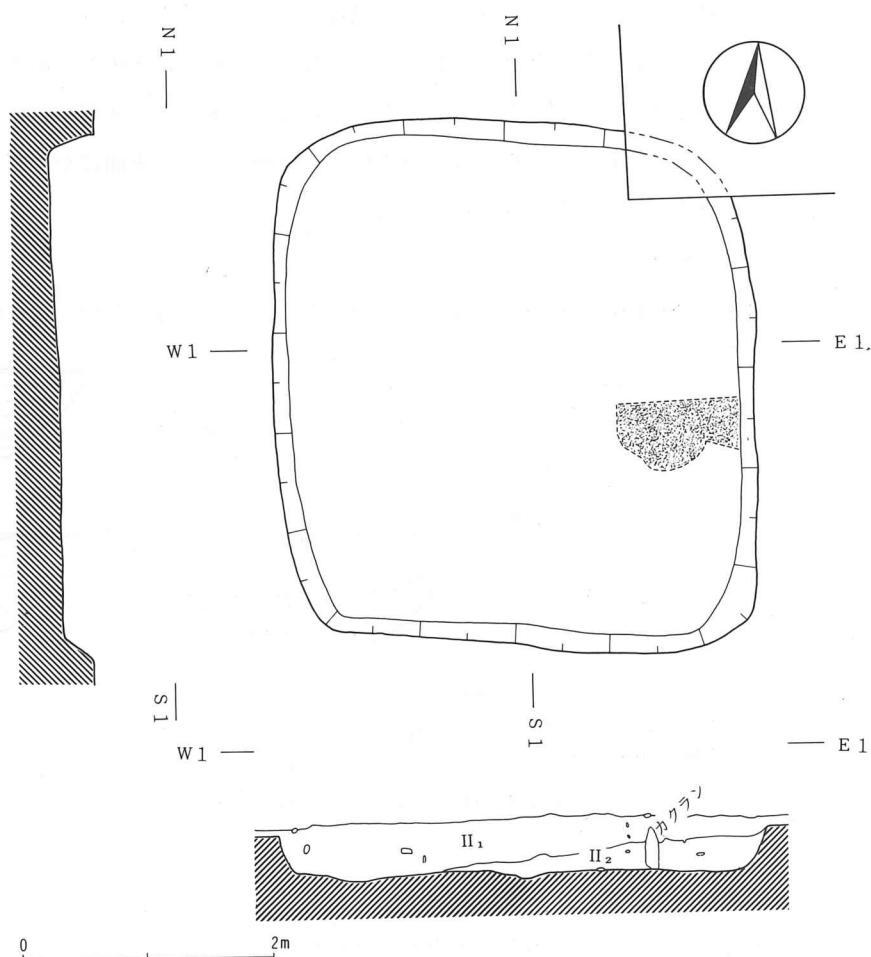
平画プランは、東西約390cm、南北約420cmのやや南北に長い隅丸方形を呈し、東北の一角は試掘トレンチできらわれている。

東南隅では、H13号住居址の西北隅を切っている。H13号住居址はさらに、その南壁でH9号住居址の北壁をきり、H9号住居址の南北隅はH8号住居址の北東隅できられ、H9号址の東側には近接してH17号住居址がある。

また、本住居址の北西には近接してH6・7・18号の各住居址が切り合い連続して存在し、全体として本住居址は、A地点住居址群の中心的位置にあるといえる。

覆土は黒褐色、漆黒色の2層に分かれ、覆土2層（II₂）の漆黒色土層は、粘質あり、焼土粒、炭火粒を含有し、東側に厚く、西にいくに従って薄く、中央西よりに至って終わっていて、東からの流入が考えられる。その上を覆う黒褐色土層は、黄色砂粒、小礫を多量に含有している。

壁高は、確認面から約35cm、西壁と南壁はしっかりと急傾斜をもって立ち上がっている。東壁は、南部よりは部分的にしっかりとしているものの、焼土散布地付近では明確さを欠く箇所もあって、床面より追求して確認することができた。壁体が固くしまっていること、色調がやや赤味を



第46図 H 15号住居址実測図 (1 : 60)

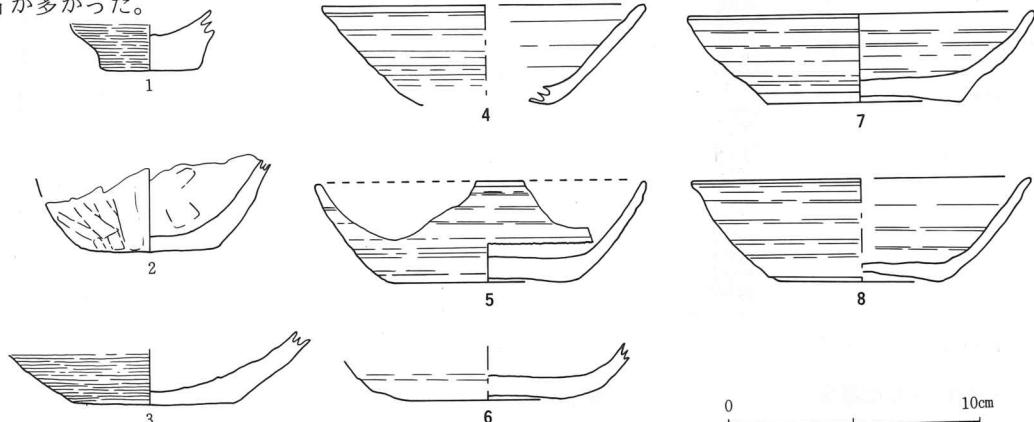
帶びている等で壁と認められた。北壁はややもろく、色調も識別が困難な箇所もあったが全体として確認できた。東北コーナー近くは試掘トレンチの埋土があり、この部分は確認できない。

床面は、ほぼ平坦な状態で、粘土が多少残っており、敲き床の痕跡も認められた。西側部分では、鮮やかな黄色を呈した砂礫層（IV層）に達し、床面との区別が判然としない。

東壁中央部付近には、粘土及び焼土粒を含む層があり、床面にやや厚く粘土をしいてあり、カマドの残存かもしれないが不明である。

柱穴は検出されなかった。

又覆土の堆積が深かったので、多くの遺物の出土を期待したが、調査の結果は予想に反して破片が多かった。



第47図 H 15号住居址出土遺物実測図〈その1〉(1:3)

遺物 (第47図 1~9)

本住居址からは、土師器、須恵器、鉄器が出土した。

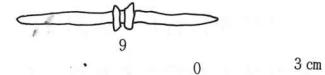
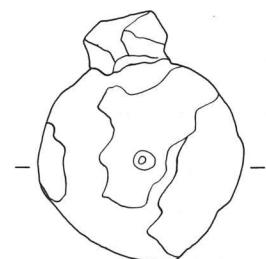
甕形土器の底部とおもわれるもの3点、須恵器壺形土器5点、鉄製紡錘車とおもわれるもの1点が第47図に示してある。

7は、床面直上より、6はI区床面より、1・3・4・5・8はすべてII区の覆土下部より出土した。

須恵器壺形土器には、底面を欠く4を除くすべて糸切り痕がみられる。

9は、II区床面より出土しており、鉄製の紡錘車と思われ、直径15.5cmを測る円形を呈し、厚さは孔の付近で0.3cmを測る。孔径は2cmで突起している。

その他、つばつき甕、灰釉の少片が出土している。



〈その2〉(1:2)

第16表 H 15号住居址出土土器一覧表

插図番号	器形	破片分類部位	実測分類	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外面)	調 整 (内面)	備 考
47-1	甕	A 2 底	P	— — 4.0	—	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 一部黒斑あり II区覆土下部
47-2	甕	A 2 底	P	— — 6.0	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ	茶褐色 一部黒斑あり 覆土下部
47-3	甕	A 2 底	P	— — 6.5	—	全体的にヘラケズリ	底部中心に直径 2 cm 程 の凹みがある。ロクロ 痕よりなる凹凸を残す	茶褐色 外面の一部に赤褐色あ り、II区覆土下部
47-4	坏 ?	A 2 口 ゞ 底	R	(12.0) — —	底径が口径に比して極端に短か い	ロクロ痕	ロクロ痕	黄灰色 II区覆土下部
47-5	坏	A 13 口 ゞ 底	F	(13.5) 4.0 7.0	上底気味の底部より直線的に立 ち上り、口辺は短かく内弯する	ロクロ痕	ロクロ痕	II区覆土下部
47-6	坏	A 2 底	R	— — 6.0	やや上底気味	ロクロ痕	ロクロ痕	灰色 I区床面直上
47-7	坏	A 12 口 ゞ 底	P	14.0 3.5 7.5	口辺部は外傾して立ち上り中央 より内弯する。 底部は上底	ロクロ痕 底部糸切痕	ロクロ痕	青灰色 糸切底 IV区床面直上
47-8	坏	A 13 口 ゞ 底	R	(14.0) 4.0 6.5	口辺部短かく外反し、器肉は全 体に薄手である。 底部は上底状	ロクロ痕 底部糸切痕	ロクロ痕	黄灰色 糸切底 II区覆土下部

まとめ

本住居址は、H 8・9・13号住と切り合い関係を有し、その中で最も新しく、本遺跡検出遺構中でも新しいと思われる。又出土遺物も須恵器の含有量が多く、坏の底部はほとんど糸切り痕が観察できる。このことからも本住居址は国分期より以前には上がらないものと思われる。

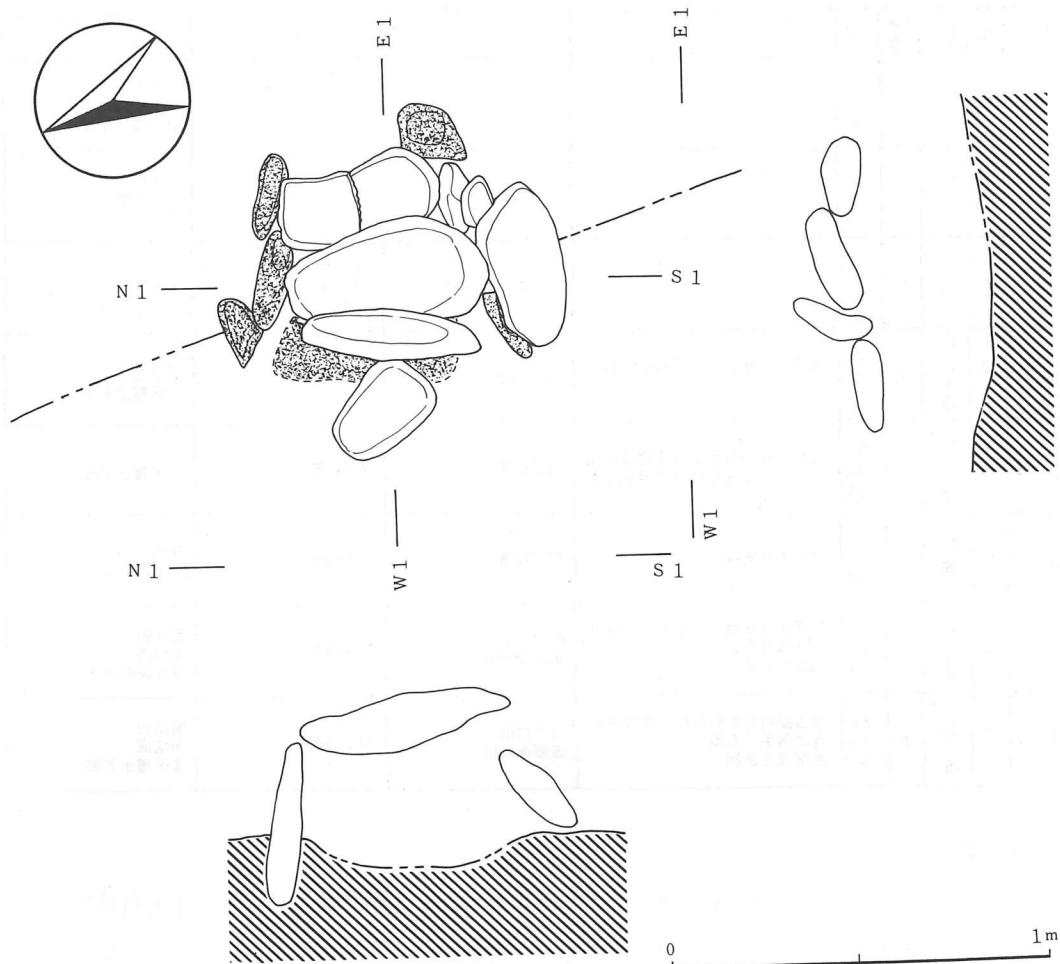
(井出 正義)

16) H 16号住居址

遺構 (第48図)

本住居址は、7・8-E・Fグリット内に位置し、試掘調査時にカマドの石組だけ検出されており、本調査開始時より露出していた。しかし試掘調査においてもプランの確認ができなかったように、本住居址の存在する位置は、III層の帶状に続く土層内にすっぽりつつみこまれた中に構築されており、何回にもわたる水の散布と上面精査の繰り返しにもかかわらず、プランは把握できなかった。又東西、南北にサブトレンチを設置し、断面からの観察を行なったが不明であった。

石組は、東側が狭く、西側に広くなるように組まれており、南側に5ヶ、北側に3ヶの安山岩が内側に傾斜しつつ、ほぼ立てて使われており、その上に3ヶの大きな安山岩が、のせられてい



第48図 H 16号住居址実測図 (1 : 20)

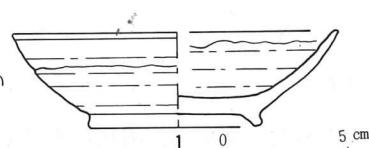
第17表 H 16号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器形	破片分類部位	実測分類	法量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
49-1	台付 壺 灰 釉	A13 口 底	R	(13.0) 4.0 7.0	台部は貼付による やや内弯しながら外傾する	口クロ痕 自然釉が口辺部付近に 付着している	口クロ痕 自然釉の付着が口辺 部付近に認められる	灰色

る。又わずかであるが、西側部分に焼土粒の散布が見られ、両袖に使用されていると思われる安山岩の大部分が焼けていた。

出土遺物は、石組の北側より第49図に示した灰釉陶器杯形土器が出土している。

(高村 博文)



第49図 H 16号住居址出土遺物

実測図 (1 : 3)

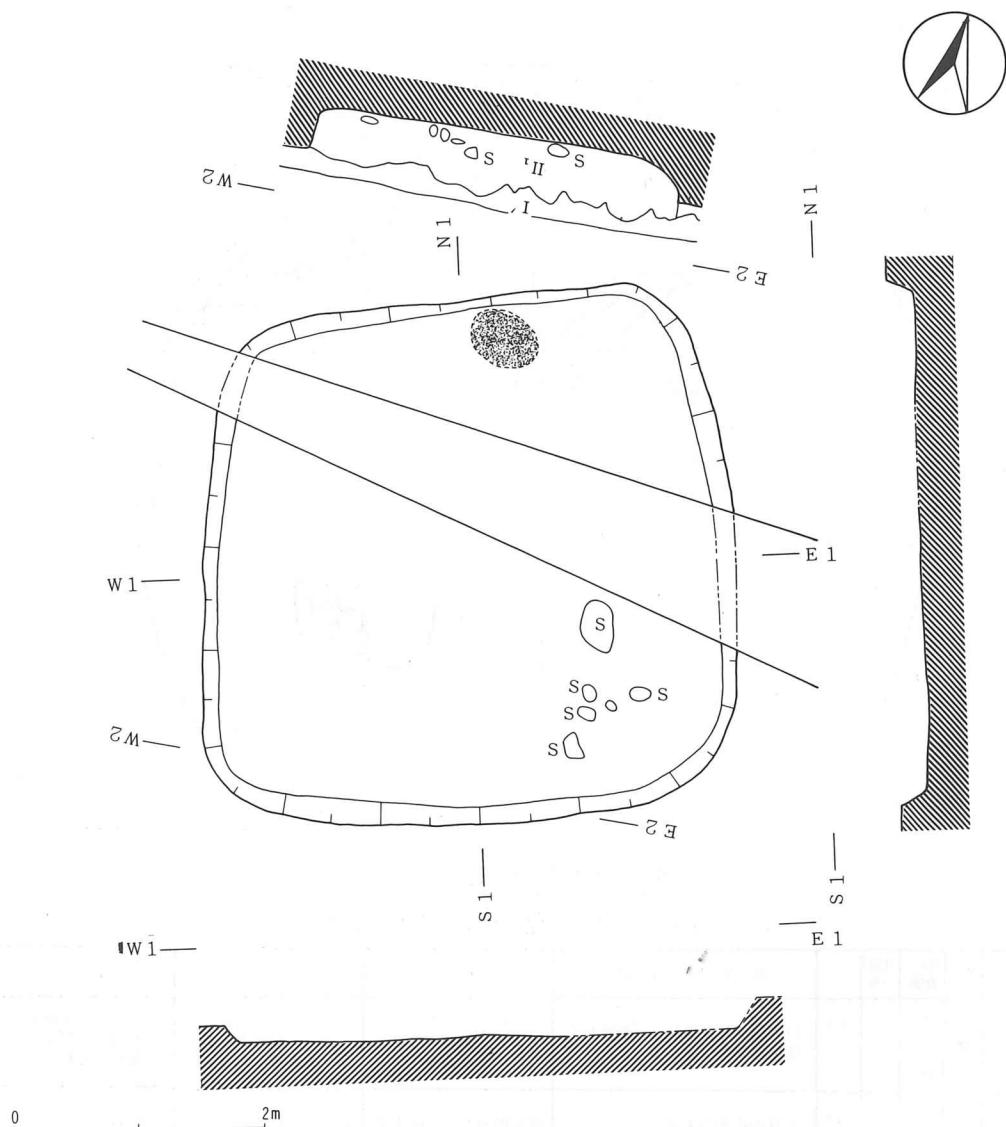
17) H 17号住居址

遺構 (第50図)

本住居址は、7・8・9-H・I グリットから、全体層序第IV層上面において検出された。西側にH 9・13号址が、東側にH16号址が存在する。

平面プランは、北壁 330cm、西壁 355cm、南壁 395cm、東壁 370cm、床面積約 10.8m^2 を測る隅丸台形を呈し、東壁中央はやや張っている。長軸方位はN-15°-Wを指している。

覆土は、単一層で小礫を多量に含む黒色土層であり、砂質に富んでいる。壁高は、南・東壁約

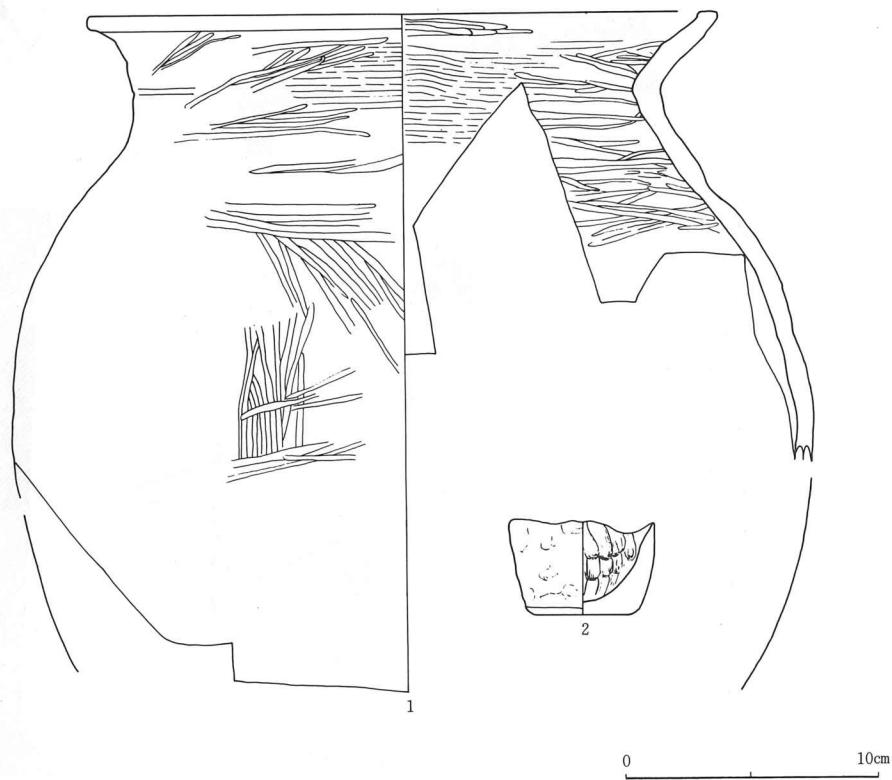


第50図 H 17号住居址実測図 (1 : 60)

25cm、北壁20cm、西壁10cmを測る。全体層序第III層と第IV層にわたって掘り込んでいる。第III層に掘り込んでいる部分は、東壁、北壁の東側部であり第III層と覆土が酷似しており、この部分の壁の検出は極めて困難であった。

床面は、南側が比較的堅緻で北側半分は軟弱であった。また、全体的に西に高く、東に低い緩傾斜面を呈している。東南部には、42cm×26cmの川原石や拳大の川原石がみられた。

北壁中央よりやや東側に60cm×40cm範囲の床面に焼土粒子が散在していた。しかし、カマドに関係する掘り込みなどみられなかった。その他付属施設等は検出されなかつた。



第51図 H 17号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)

第18表 H 17号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器形	破片分類	実測分類		器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
51-1	甕	A 2 口 ↓ 胴上	P	25.0 — —	口辺部は強く外反し、胴部は丸味をおびる	口辺部ヨコナデ後ヘラミガキ。胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ	口辺部ヨコナデ後ヘラミガキ。胴部ナデの後ヘラミガキ	外面は一部磨滅 黄白色を呈す。 III区床面直上
51-2	手 捏	A 12 口 ↓ 底	P	5.8 3.8 4.0	盃状の小形なもの 平底を呈す	胴部指頭おさえ後ナデ により平滑化	胴～底部指頭おさえ	黄褐色 IV区床面直上

遺物（第51図 1～2）

本住居址の出土遺物で図示できたものは、1の甕形土器と2の手捏土器である。1はIII区の床面直上より出土した。最大径は胴部にあるとおもわれる。胴部は丸味をおびる。内外面とも口辺部から胴部までヘラミガキで仕上げられている。2は、IV区床面直上より検出された。

まとめ

本住居址は、主柱穴、カマド等の存在を積極的に論及する資料がなく、住居址としての詳細は不明である。1の甕形土器に類似したものが、H4、H12号住居址に出土している。また、祭祀的要素をもつといわれる手捏土器が出土しているのもこの遺構の特徴でもある。

(黒岩 忠男)

18) H 18号住居址

本住居址は、3・4・5—L・Mグリット内に位置し、H6号住居址の北側に存在する。本住居址は、H16号住居址と同様、III層の帶状層位を地山とした遺構であることと、床面レベルがほとんど、耕作土I'層の下面と同じで、破壊を受けていたため、破壊されていたカマドのみ検出された。残されていた焼石の方向、焼土の散布状況などから推して東壁に構築されていたものと推察する。遺物は鍔付の甕、器高の低い皿形の台付杯等が伴出しており、国分期後葉の遺構と思われる。

(高村 博文)

2 特殊遺構

1) T 1号特殊遺構

遺構（第52図）

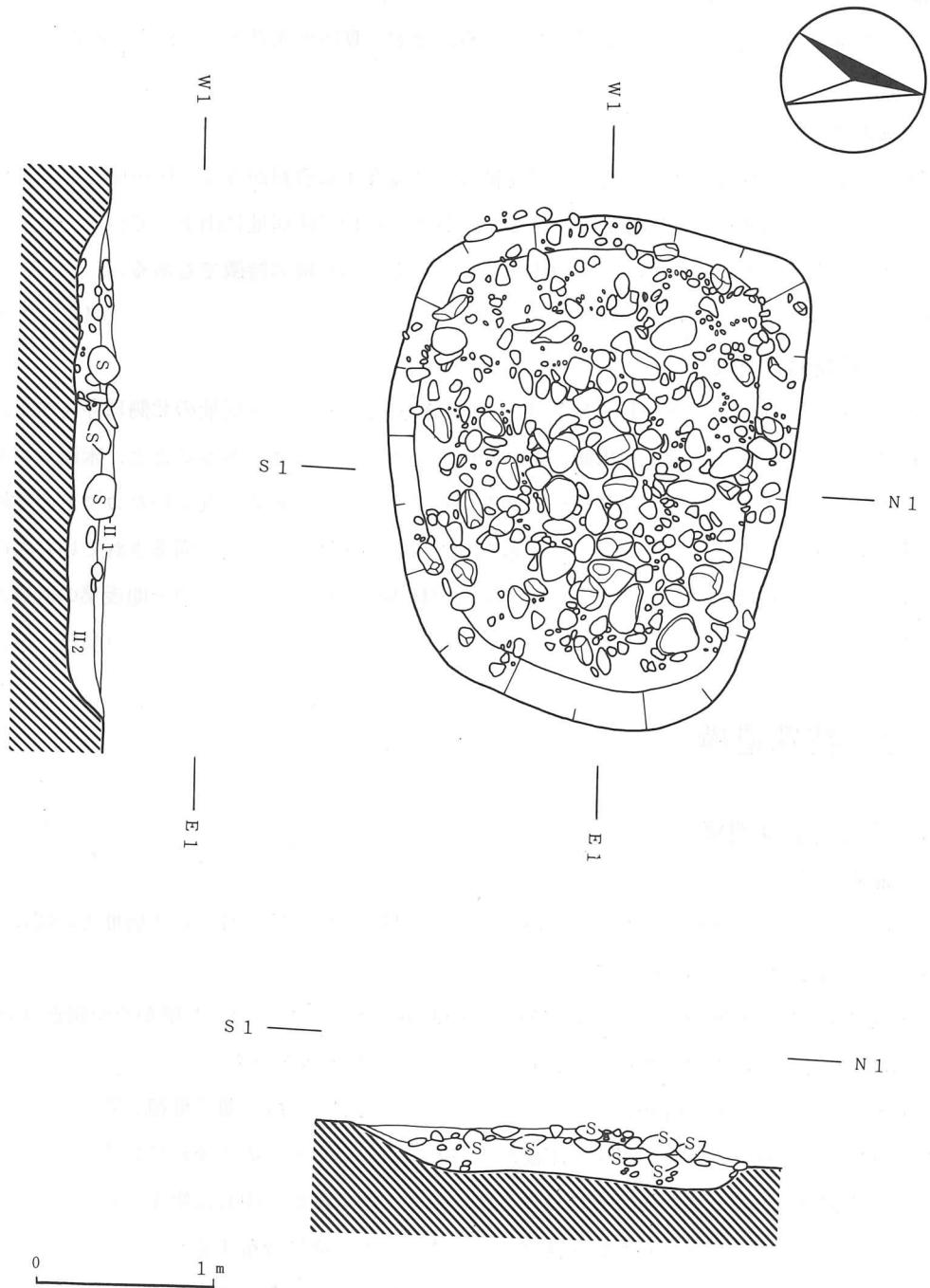
本遺構は、5・6—O・Pグリット内に位置し、H1号住居址とH2号住居址との間にはさまられ、その東北—西南の対角線上にある。

平面プランは、北壁 250cm、南壁 230cm、東壁 160cm、西壁 195cm の北壁がやや胴張り気味で、東西に長軸を有す隅丸長方形を呈し、長軸方位はN—84°—Wを示す。

覆土は2層に分かれ、II₁層は漆黒色であり、プラン内上面全域に薄く堆積している。このII₁層を取り除くと、直径約20cm内外の河床礫が不規則にぎっしりとづめこまれている。

礫の状態は、組まれているようには見えず、やや大型の礫が、中心に集まっているようにうかがえるが、あまりはっきりした偏在性はなく、プラン内一面に分布する。

礫のあり方は、自然的ではなく人為によるものと推察する。なお礫の分類については後述するように、白倉氏に依頼した。



第52図 T1号特殊遺構実測図 (1 : 40)

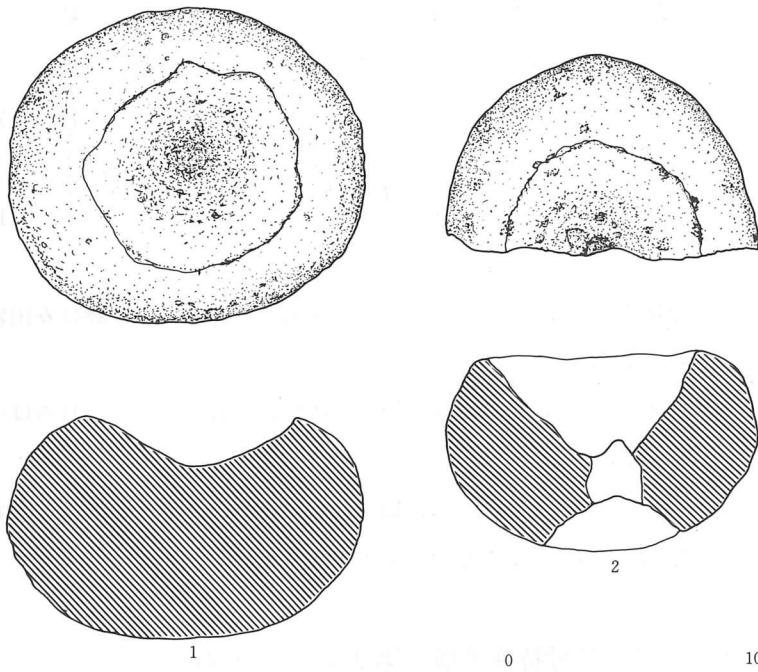
遺物 (第53図

1～2)

凹石 2点が礫群中
より出土している。

1は、 $14 \times 12.5\text{cm}$
の橢円形を呈し、厚
さは 9 cm を測る。孔
は、広く設けられて
おり、 $8 \times 7.5\text{cm}$ の
不整形である。石質
は安山岩である。2
は、多孔質安山岩で
半分程欠損している。
残存部の短径 12 cm、
厚さは 8 cm を測る。

上下面に孔があり、
約 2 cm 幅で貫通して
いる。



第53図 T 1号特殊遺構実測図 (1 : 3)

その他、北東隅、礫群上より実測は不可能であったが、長胴の甕の胴部が出土しており、薄手
で、外面はヘラケズリにより調整されている。

(井出正義・島田恵子)

T 1号特殊遺構内礫群の岩石について (白倉盛男)

- 1 東西約 250cm × 南北約 190cm の落ち込みに集石してあり、中央部に比較的大きいもの（長径 20～30cm）が多く、無作為に入れたよう見え、最低部には旧河床礫層が露出していた。
- 2 集石は現千曲川河床礫とほとんど同種、同質の円礫で扁平なものが多い。
- 3 大きさによる分類

(長径)	(個数)
20～30cm	17
20～15cm	193
10cm内外	264
5cm内外 (バラス)	4240
	4,714

4 長径15~30cmの 210ヶにおける岩質分類

花崗岩	内岩	玢岩	安山岩	流紋岩	玄武岩	チャート	輝緑凝灰岩	粘板岩	砂岩	硬砂岩	合計
3	5	2	130	8	2	21	11	1	11	16	210
.....
.....

○安山岩が62%にあたり、現佐久平を流れる千曲川河床礫は安山岩が85%以上であるので比率は稍低い。

○チャート、硬砂岩、輝緑凝灰岩、砂岩が比較的多い。これらは千曲川の礫で美くしく見えるものである。

5 並べかた、比較的大形のものに扁平なものが多い、美くしく見えるものが多い所から、人為的にえらびぬかれて集石したものと考えられる。

2) T 2・3・7号特殊遺構 (第56・57・58図)

T 2・3・7号特殊遺構は、出土遺物より同様な性格をもつものと判断して、まとめて記述する。

T 2号特殊遺構は、5—Cグリット内に位置し、第56図に示してあるとおり、須恵器甕形土器の口辺部～胴上部1点、洪武通宝4点が出土しており、他に骨粉の検出もみられる。

T 3号特殊遺構は22・23—E・Fグリット内より検出され、H12号住居址で述べたように、住居址のほぼ中央付近で、床面まで切り込んで存在する。覆土は漆黒色層で、黄色砂粒の粒子又はブロック状に混入しており、人為的堆積であることは確実である。

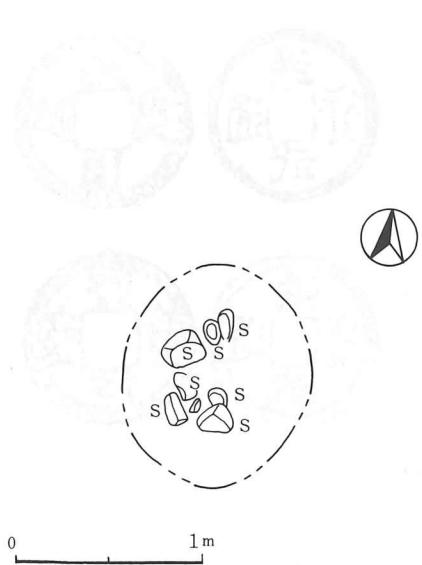
第57図 1～4に示してある、須恵器蓋(1)1点、甕(2)1点、等が出土しており、骨粉の存在も見られた。

T 7号特殊遺構は、H11号住居址覆土内に存在し、須恵器甕形土器(1・2)2点と平根鏃で両丸三角形式の鉄鏃が1点出土している。

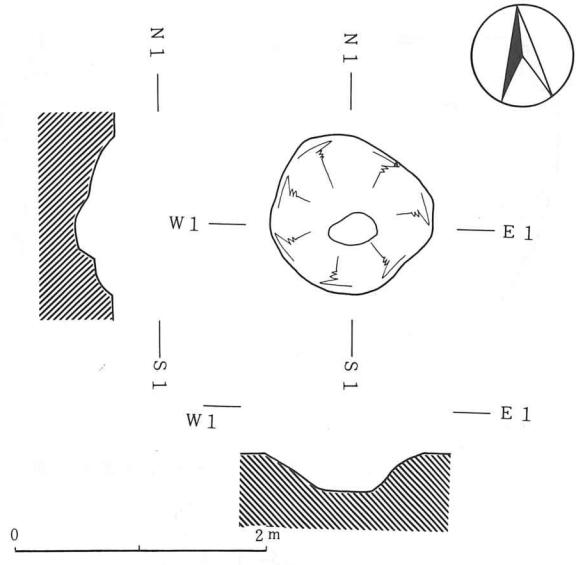
T 2・3・7号特殊遺構のうち明確にプランの把握ができたのは、T 3号特殊遺構だけである。いずれの遺構からも、肩部に最大径を有す、口唇部に特徴のある須恵器甕の出土と、骨粉によって、土壤墓的性格を有すものと思われる。
(高村 博文)

3) T 4・5・6号特殊遺構

T 4・5・6号特殊遺構は、9・10—P・Qグリット内において検出され、H 4号住居址の南



第54図 T2号特殊遺構実測図 (1:40)



第55図 T3号特殊遺構実測図 (1:60)

第19表 T2号特殊遺構出土土器一覧表

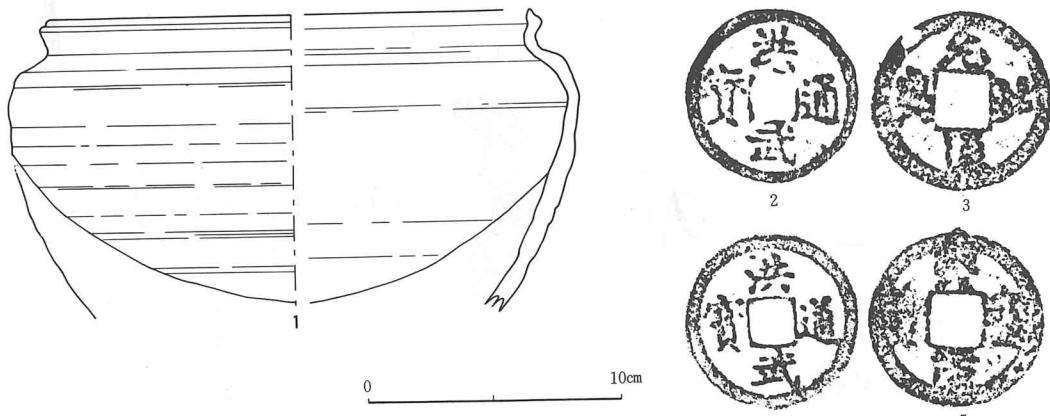
插図番号	器形	破片分類部位	実測分類	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
56-1	壺	A 2 口	F	(20.0) — —	口辺部短く外反し 口縁部は内傾する 口縁部内側に稜を有す	口クロ痕	口クロ痕	

第20表 T3号特殊遺構出土土器一覧表

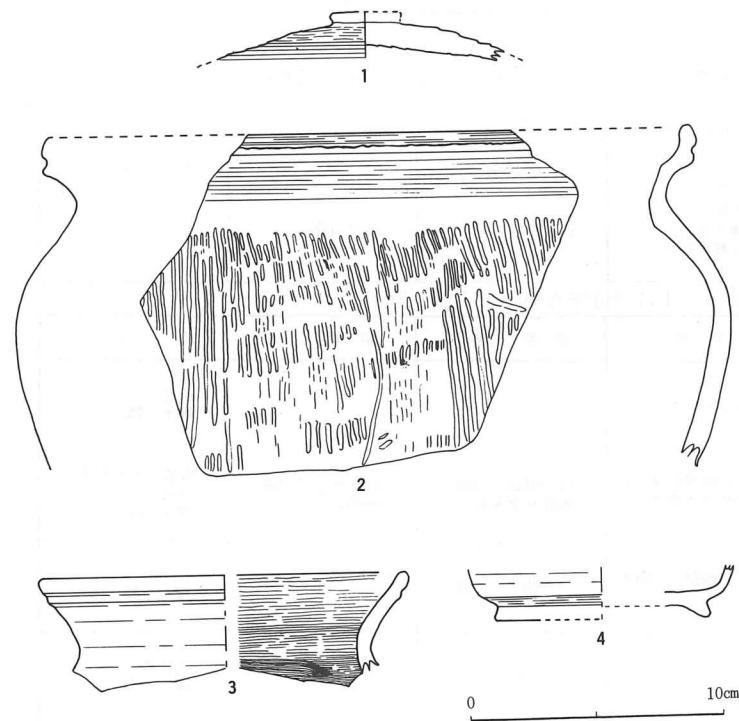
插図番号	器形	破片分類部位	実測分類	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
57-1	蓋	A 2	P	— — —	つまみ部はほぼ平坦である	—	—	灰色 覆土下部
57-2	壺	A 2 口 胴上	F	(26.0) — —	口辺部外反し、口縁部直立する 口縁部に一条の沈線が施されている	口辺部口クロ痕 胴部タキ目	口辺部口クロ痕 胴部ナデ	骨壺と思われる 白灰色 覆土下部
57-3	壺	A 2 口	F	(14.0) — —	口辺部外反し、口縁部に一条の 沈線をもつ	口辺部口クロ痕	口辺部口クロ痕	灰色 覆土下部
57-4	高台付碗	A 2 底	R	— (8.5)		口クロ痕	口クロ痕	青灰色 覆土下部

第21表 T7号特殊遺構出土土器一覧表

插図番号	器形	破片分類部位	実測分類	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
58-1	壺	A 13 口 底	F	(20.0) — —	胴上部に最大径をもち、肩部に 張りをもつ。底部はやや上底	口クロ痕。底部付近は タキ目が見られる。 又底面はナデにより平 滑化	口クロ痕	口唇部が内傾し凹帯を 作出している点より、 蓋が伴うものと考えら れる
58-2	壺	A 2 胴下 底	F	— — 10.5	底部は平底	剥落が激しく、観察不 明	ナデにより平滑化され ている。	灰色



第56図 T 2号特殊遺構出土遺物実測図（1：3、ただし古銭は1：1）



第57図 T 3号特殊遺構実測図（1：3）

の南東隅角に径30cm、深さ10cmのピットが存在する。出土遺物は、いづれの遺構からも、ほとんどなく、T 4号北東礫内より中世と思われる、土鍋の内耳片が出土している。どのような性格をもつ遺構なのか不明である。

(高村 博文)

側に存在する。

いづれも上部に礫群が存在し、特にT 4号上部の礫群は、大型の礫を使用して西壁上部に直線的に配置されている。

平面プランは、T 4が東西200cm、南北320cmの、南北に長い隅丸方形を呈し、長軸方位N-9°-Eを示す。

T 5は160×85cmの東西に長径を有す楕円形を呈し、長軸方位N-81°-Eを示す。

T 6は東西150cm、南北に120cmのやや東西に長い方形を呈し、長軸方位はN-74°-Eを示す。又、T 6号

4) T 8・9・10号特殊遺構

T 8・9・10号特殊遺構はいずれも、掘り込み面の検出されなかった礫群で、T 8号は、H 1号住北側に長軸方向を北東に有す楕円形の範囲に、T 9号はH 1号住居址内にはほぼ方形に近い範囲内に、T 10号は、H 8号住南壁上部に長軸方向を概むね北に有す楕円形の範囲内に存在する。出土遺物には、ロクロ使用による台付壺（土師器）が多く出土している。

(高村 博文)

3 その他

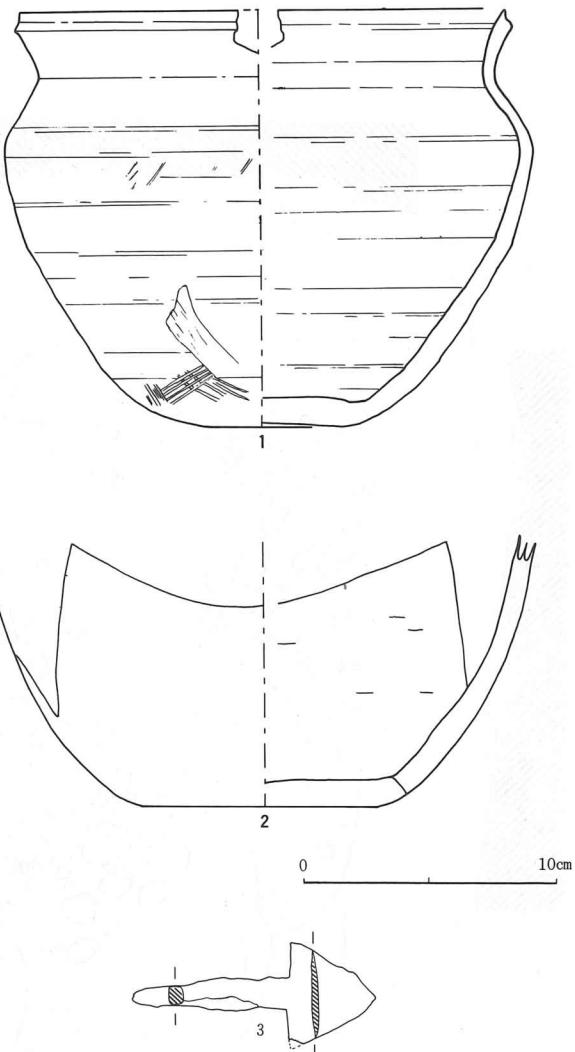
グリット・表採遺物（第60図）

1・2・3・4は、石質が流文岩の砥石である。砥石に適した段階に陶土化が進んだ流文岩が用いられている。1は長さ24.5cm、最大幅12cm、最大厚5.5cmを測り、24-Fグリットより出土した。上面ともよく使用されている。特に両側面は使いこまれており、大きくすり減っている。看取される使用痕は、縦方向がもっとも多く深い。2は24-Cグリットより出土し、長さ8.5cm最大幅5.5cm、最大厚4cmを測る。

3は24-Fグリット内より出土し、上面、側面ともよく使用されている。4は図上、下方とも欠損しているので、4-Lグリットから出土した。上面には、1・2・3とは異った幅広の使用痕がみえる。

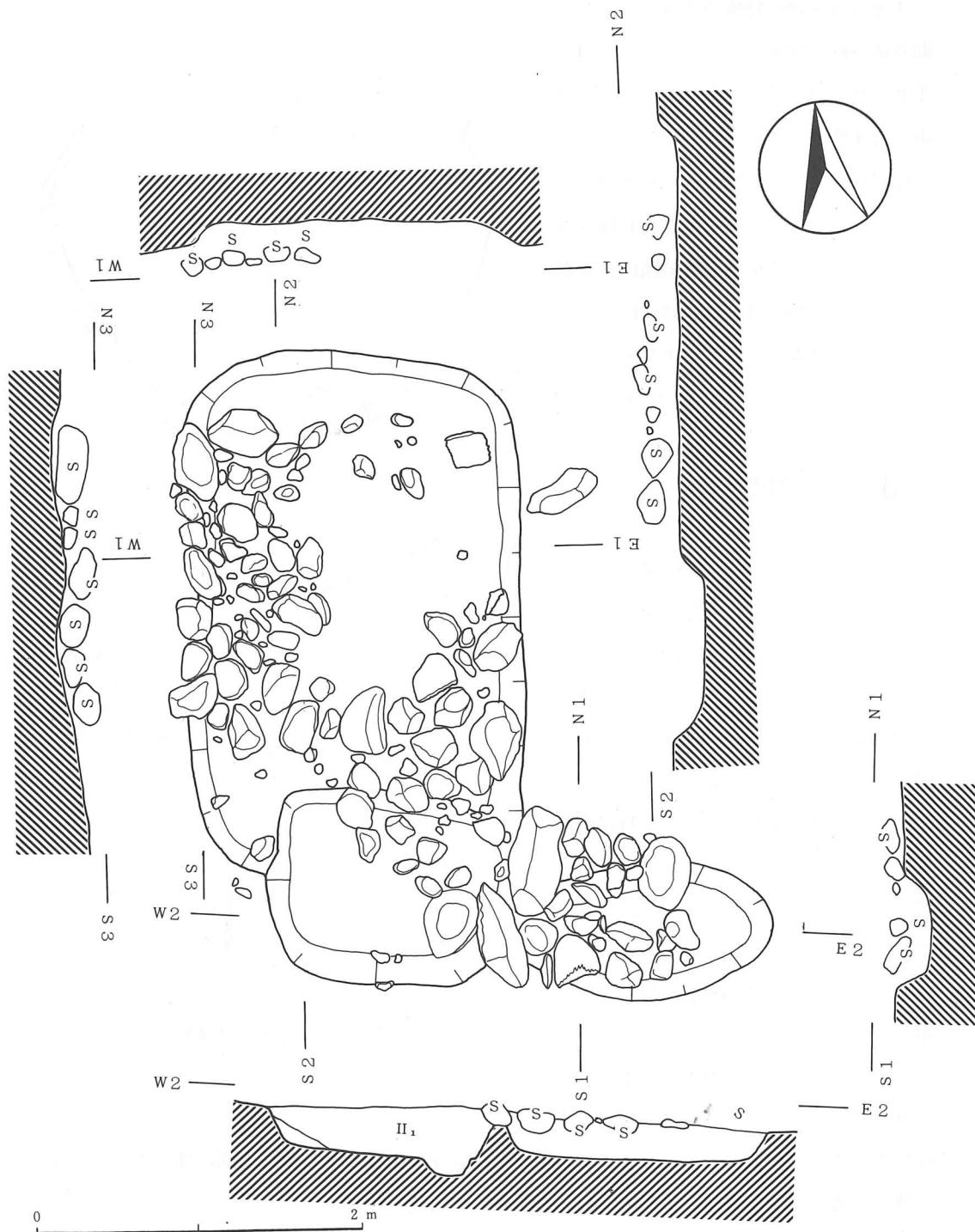
5・6は、寛永通宝で背に「文」の背文がある。他に2枚出土しているが無背文である。

(林 幸彦)

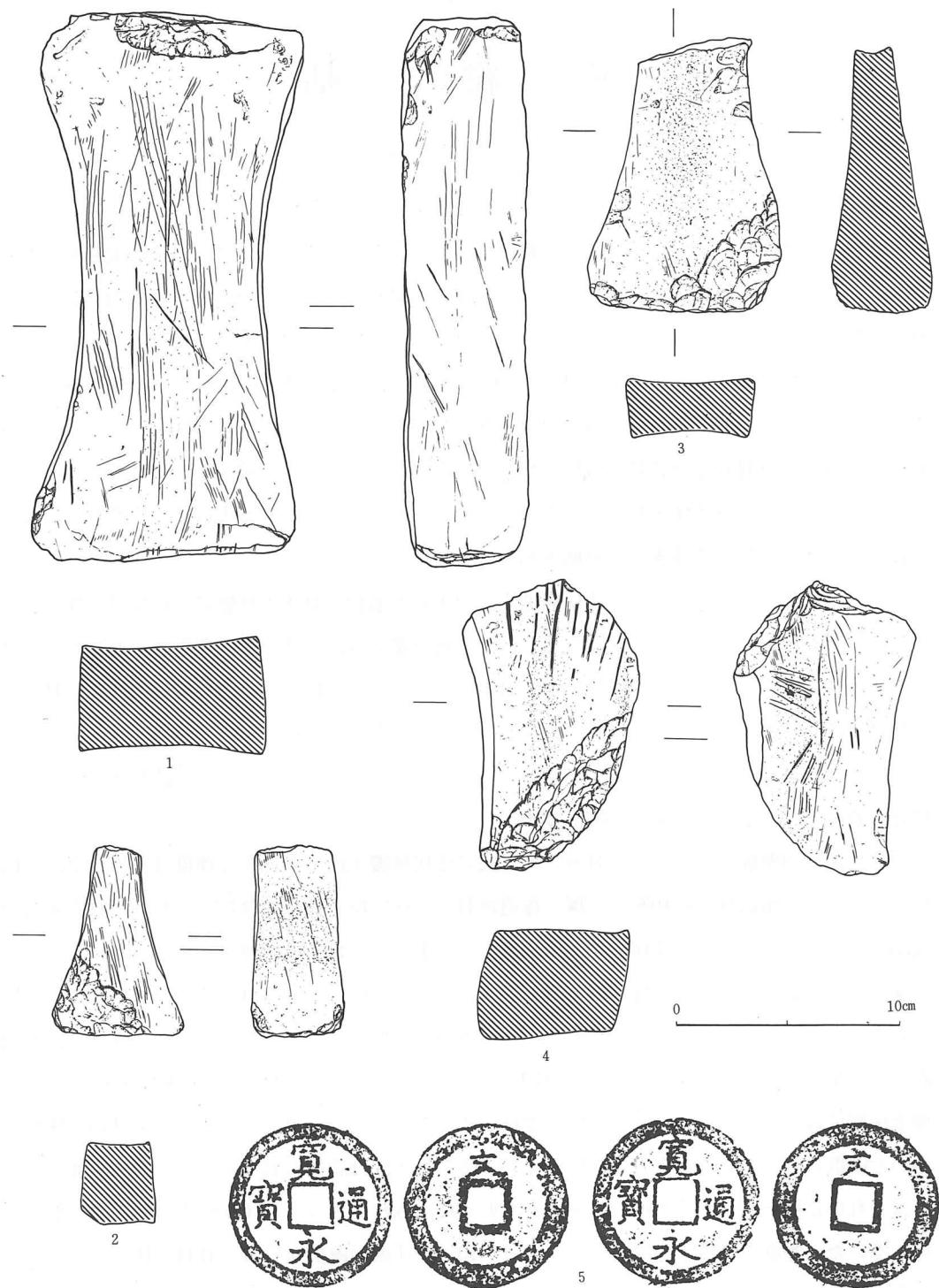


第58図 T 7号特殊遺構出土遺物実測図

(1 : 3)



第59図 T4・5・6号 特殊遺構実測図 (1:40)



第60図 その他出土遺物実測図 (1 : 3 ただし古銭は1 : 1)

V 総 括

遺構

本遺跡の検出された遺構に関しては、IV章で述べたとおりである。ここではその大略を記したい。H 1・6・7・13・15・17号住居址は、全体層序III層（黒褐色土層）を一部地山として、又H16・18号住居址は、その層中に構築されており、プラン検出には困難を極めた。

切り合い関係を有さない住居址はH 1・10・14・17号住居址とT 1・2号特殊遺構のみで、あとはすべて切り合い関係を有す。特にH 8・9・13・15号住居址の切り合い関係から、H 9号→H 8号、H 9号→H13号→H15号住居址の順で構築されていることが確認されており、少なくとも3～4時期にわたって住居址が営なまれていたことがわかる。以下、本遺構検出遺構中これらの問題点として考えてゆきたい事柄を列挙して進めたい。

H 4・8号住居址の遺物 両住居址より出土した遺物及び出土状態については、IV章及び後述するV章の遺物の項で、詳述しているので重複は避けるが、その量的豊富さ、及びカマド付近から多量の出土等（H 4号住居址には、H 2・3・5号住居址と切り合い関係を有し、H 8号住居址床面直上に礫群の存在を考えると、単純に伴出遺物として取り上げられないもの）からみて佐久平における鬼高後半～終末期における、編年的資料、及び住居址の空間利用においても良好な資料といえよう。（第61・62図参照）

住居址覆土内礫群 H 6・8・10号住居址覆土内に存在する礫群は、佐久市内で同様な例が、上ノ城遺跡⁽¹⁾で約10軒、三塚三塚遺跡H 1号住居址⁽²⁾、儘田遺跡⁽³⁾に見られいづれも鬼高後葉から国分期にかけての住居址で、床面直上に、拳大または頭大の礫群が検出されている。又三塚三塚遺跡H 1号住居址の礫群内には、焼土、炭火物が混入しており、儘田遺跡H 2号住居址でも木炭片が混入していたと報告されている。本遺跡の場合、H 6・8号住居址内礫群は、床面直上に、拳大から頭大の礫が存在し、H10号住居址は、覆土上部にほぼ拳大の礫が存在している。覆土の層位は、III章で述べたように自然堆積と認め難く、人為的可能性が強い。又H10号住居の浮いた礫群にしても、遺物の出土状態からして時期的差位は認められない。更に同住居址のカマドはきれいに袖石、焼土等が取り除ぞかれた形で検出されており、わずか壁際の袖石の一部が残存していた。礫群内に出土したもので、H 8・10号住居址内礫群からは、H14号住居址カマドの袖石にみられるような、真赤に焼け長方形に加工された凝灰岩が伴出している。三塚三塚遺跡H 1号住居址と同様、H 8号住居址内礫群下にも焼土粒、炭火粒の存在がみとめられる。以上の事

柄だけからでは、その性格について言及できないが、鬼高期後葉から国分期にかけて、何らかの意図のもとに住居址廃絶直後持ち込まれ、単に廃絶のために石をなげ入れたとは考えられない。

主柱穴について H 1・4・8・10・14号住居址床面より検出されたピットは、その位置、規模、形態により主柱穴とおもわれる。特にH 1号住居址の4ヶの柱穴はいずれも、壁側に傾斜をもっていることが観察される。H 4号住居址よりは、4ヶの主柱穴のほかに南壁側、中央部付近に、対になった2ヶのピットが検出されており、入口部の施設として用いられたのではないかと推察される。H 10号住居址の東北隅を除く3ヶの柱穴とH 14号住居址の4ヶの柱穴は3隅及び4隅に、設計されて配置されたような形で検出され今後の問題点としたい。又H 10号住居址のカマド東側の柱穴はやや東壁に偏りが見られ、H 8号住居址の場合も、同様の位置からは主柱穴らしきピットは検出されず、貯蔵穴用と思われるピットが検出されているにすぎない。H 4・8号住居址の遺物出土状態から、この時期においてカマドの右側に空間を有する必要性があったのではないかと思われ、具体的所見については、資料の増加を待ちたい。

カマドについて 本遺跡検出住居址中、カマドの存した住居址は、H 4・6・8・12・14・16号である。H 4・8号住居址の構築法は似ており、北壁の中央付近に安山岩の偏平な自然河床礫を両袖部主柱にのみ利用し、まわり及び壁までの袖部は粘質のつよい土で固められている。H 6号住居址のカマドは煙道部のみで、詳細は不明であるが、東壁に舟の舳先形に、きれいに組んで構築されている。H 14号住居址のカマドは、図版十一のように、北壁の中央付近に加工した凝灰石と自然石（安山岩）をうまく組み合わせ、両袖に利用している。この加工した凝灰岩を利用する例は上ノ城遺跡においてもみられる。⁽¹⁾ H 16号住居址のカマドは、図版十のようにすべて安山岩を利用してきれいに組まれ、東壁に構築されていたものと思われる。

特殊遺構について 特殊遺構は10基検出されており、形態、出土遺物から考えて大きく3つに分類されるものと思われる。

第1類 T 1・8・9・10号特殊遺構がこれに当たり、拳大の河床群が、方形、隅丸方形及びソーセージ状に集石されている。特にT 1号は、IV章で詳述しているように掘り込みを有し、礫の選択がおこなわれていたように観察されている。出土遺物は、T 8・9・10号にロクロ使用による、器高のやや低い高台付壺形土器及び楕形に近い瓦質の壺形土器（小形である）も見られる。T 1号よりは、外面ヘラケズリの、薄手長胴の甕の胴部が伴出している。

第2類 T 2・3・7号特殊遺構がこれに当たり、礫群はともなわないが、ほぼ円形に近いプラン（T 3号）を有し、骨粉及び肩の張った、口唇部に特徴を有す（蓋を伴なうものと思われる）須恵器の甕形土器が共通して出土している。又T 2号からは、洪武通宝が4枚出土している。

第3類 T 4・5・6号特殊遺構がこれに当たり、いずれも覆土上部に礫が存在するが、第1類とは異なり、比較的大形の礫を配石している（T 4号西壁上部に顕著な例が見える）。出土遺物はほとんどなく、T 4号東北隅の上部より中世土鍋の内耳片が出土している。

以上より、第2類は、骨粉、藏骨器的性格を有す須恵器甕形土器及び古銭の伴出から土壙墓と思われ、第1類においては、同様な例が、高畠遺跡、儘田遺跡で検出されているものの、その性格に関して積極的所見は得られなかった。第3類は、中世土鍋内耳片の伴出により中世以前には上がらないものと言える。

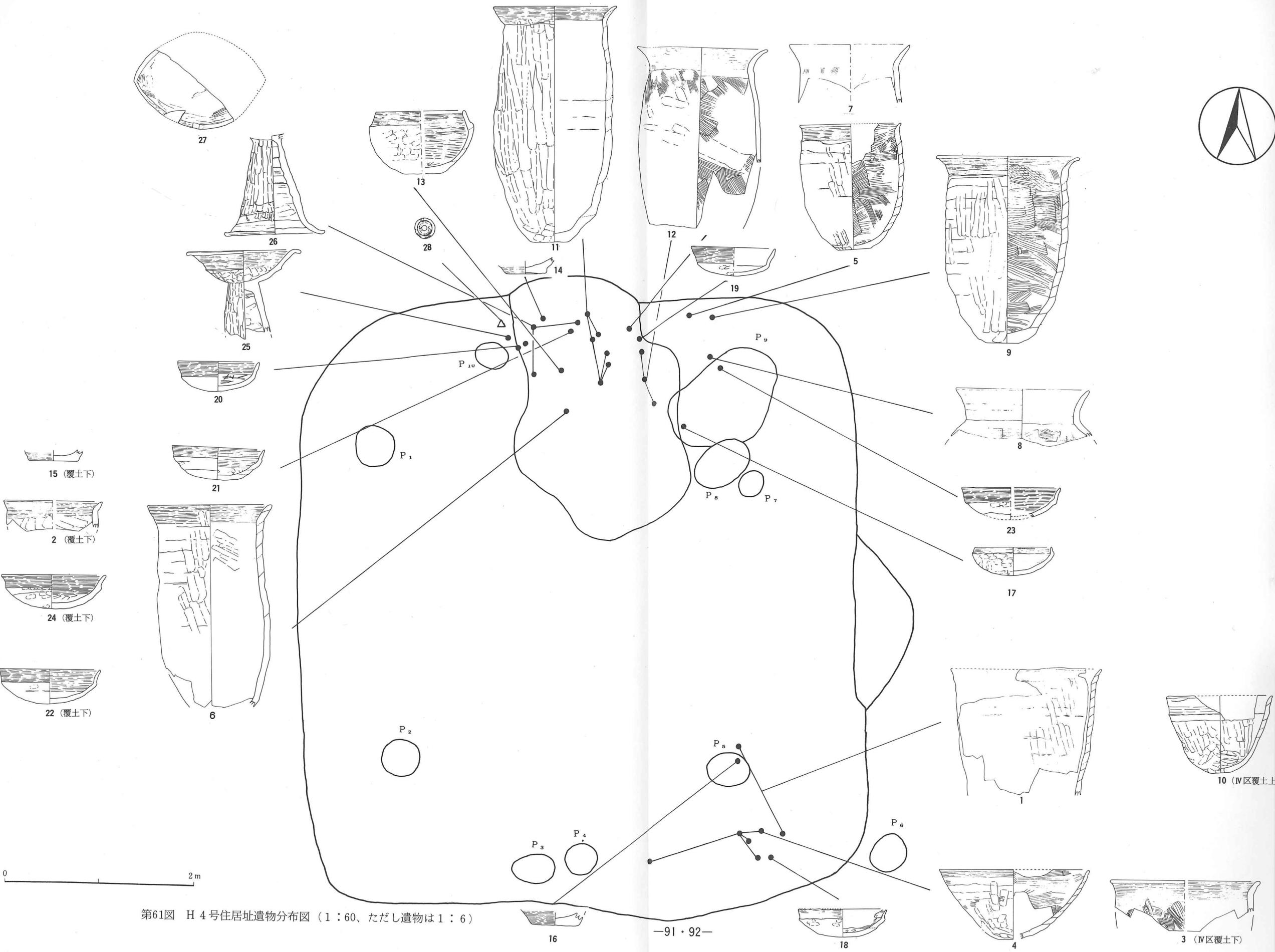
遺物

本遺跡からは住居址18軒、特殊遺構10基が検出され、多量の土師器、須恵器等が出土した。出土土器については、良好な資料が出土したH 4、H 8号住居址を中心⁽⁴⁾に考察したい。

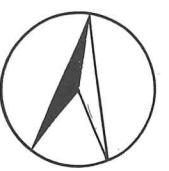
H 4号住居址からは、甕、甕、壺、椀、高坏形土器が出土し、H 8号住居址もほぼ同様な組成である。

甕形土器は、大形で一孔を有すもの、小形で一孔を有すものと多孔のものとがある。大形のものは鉢形を呈し、底部全体が甕穴となっている。外面は、縦、斜め方向のヘラケズリ痕が明瞭に認められ、内面は、丁寧にヘラミガキされており滑沢がある。H 8号住居址の1・6が代表例である。口辺部は外反し、口縁部は大きく外へ開き気味で胴部はふくらみをもたず底部へ続く。市道遺跡H 4号住居址出土の甕形土器は、鉢形を呈し胴部中位に丸みをもっており、鬼高峰期の中葉に比定されている。H 8号住居址の1・6は、胴部にふくらみはほとんど持たず、口辺部は、伴出の甕形土器同様に大きく外へ開き、特に1は口唇部に一条の凹線⁽⁵⁾が巡っており、市道遺跡のものよりは、比較的新しい様相を呈している。小形の多孔を有すものは、平底の底部に10数個の径4mm～6mmの孔を外面より穿った鉢形を呈すもの、H 8号住居址の2・5・7～9と、やや曲線を描くも全体が「逆八の字」状を呈す、H 4号住居址の4がある。小形一孔を有すものは、H 4号住居址の10、H 12号住居址の2がある。「逆八の字」状を呈す小形のものは、東京都・船田遺跡の出土例⁽⁷⁾、本遺跡に近接する市道遺跡の出土例⁽⁸⁾と比較すると、胴部はやや丸味をおび、底部より外へ開く度合いが大きくなっているために、「逆八の字」状はくずれたものとなっている。H 8号住居址の2・5・7～9は、大形の1・6と近似した器形を呈じ、口唇部にやはり一条の凹線がみられ同一の時期とおもわれる。「逆八の字」状のものは、上記の特徴がみられ、市道遺跡のそれよりは、やや新しくなる。

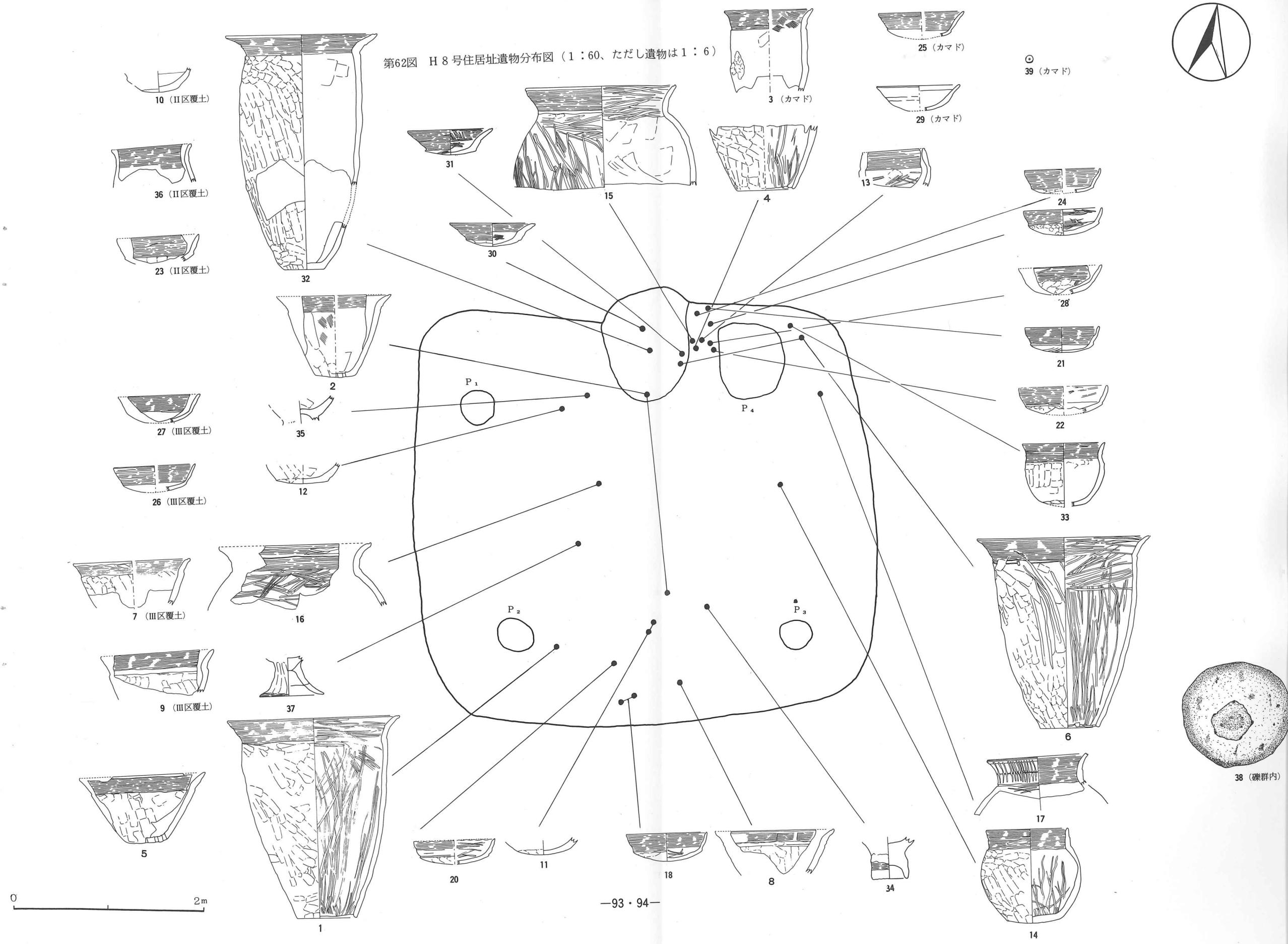
甕形土器は、長胴を呈すものと、胴部がふくらむものがある。長胴を呈すものは、H 4号住居址の2・5～7・9・11・12とH 8号住居址の32がある。H 4号住居址のものは、胴部最大径が



第61図 H 4号住居址遺物分布図 (1:60、ただし遺物は1:6)



第62図 H 8号住居址遺物分布図 (1:60、ただし遺物は1:6)



胴部中位にあるものと下位にあるものがあるが、ほとんど口径より小さくなっている。H 8号住居址の32は、口辺部大きく外反し、肩部に若干の張りを持ち底部にむけて緩やかにすぼまる。底部は小さい平底で不安定である。内外面の調整はH 4号住居址のものと大差ないが、口辺部の様相に差異がみられる。口辺部外面中央には段を有し、口唇部内側には一条の沈線（凹線）が巡っている。東京都・落合遺跡、千葉県・須和田遺跡出土のものに類似性をもつ。これらの甕形土器は、H 4号住居址出土の一群に胴下位と中位にふくらみをもつ特徴がみられるもののH 4号住居址の9のように胴上位に、僅か張りのあるものもあり、市道遺跡で鬼高峰期中葉とされているものとは胴部の特徴に差異が認められる。また、最大径の位置も市道のそれとは異なり、H 4号住居址の長胴の甕形土器は、口径にある。これらの特徴よりH 4号住居址のものは、鬼高後葉に比定されるとおもわれる。また、H 8号住居址の32は、胴部のふくらみは完全に消えて口辺部は大きく外反する。しかも、口辺部には飾り気がみられ、H 4号住居址の長胴を呈す甕形土器より、新しい様相を示す。

胴部のふくらむものは、H 4、8、10、12、17号住居址より出土している。いづれも胴下半以下を欠損している。H 8号住居址の3点、15・16・17は他の住居址のものと差異がある。3点とも外面がヘラミガキによって仕上げられている。また、15・17の口唇部には、一条の凹線が巡っている。16は、口唇部に平坦面をもち凹線を有し、千葉県・須和田遺跡の甕形土器に類似性をもつ。⁽⁹⁾ H 8号住居址出土の15・16・17は、32の長胴の甕とともに鬼高後葉末あるいは次期の様相をも呈している。

小形甕形土器は、長胴を呈する大形の甕に近似し、口唇部に一条の凹線を有すA類、器高と口径が大差なく底部は丸底状の平底で、口辺部短く外反するB類、口辺部外反し球胴を呈し平底のC類、口辺部直立し丸底気味のD類の4つのタイプがある。A類はH 8号住居址の3、B類は、H 9の2、H 8の33、H 12の4・5、C類はH 9の1、D類はH 8の14であり、外面の調整は、口辺部ヨコナデ、胴部ヘラケズリがほとんどにみられる。内面の調整は、C・D類にヘラミガキがみられ、特にD類は内面黒色研磨されている。他はすべてナデにより平滑化されている。

壺形土器は、出土個体数がもっとも多く器形もバラエティーに富んでいる。これらは、口辺部が内傾した立ち上がり口辺をもつA類（H 4号住居址の17）、外稜を有し外に開く立ち上がり口辺を有すB類、素縁口縁をもつC類に大きく分類される。⁽¹¹⁾ B・C類は、個々の特徴に変化がみられる。

B類

B₁類 口辺部外反し（やや外傾気味のものもある。）外稜を有すもの。（H 4号住居址の18・21～24、H 8号住居址の25～27がある。）

B₂類 口辺部外傾しつつ内湾するもので、口辺部の立ち上がりは、器高の半分以上を占め

- る。（H 4号住居址の20・21、H 8号住居址の19～24、H 9号住居址の4・5、H 14号住居址の2がある。）H 8号住居址18・30・31の口唇部に一条の凹線がめぐる。
- B₃類 口辺部外反し、口縁部は大きく開き外稜はくずれて整然としない。（H 8号住居址の30・31がある。）口唇部には一条の凹線がめぐる。
- B₄類 外稜を僅かに有すか、ヘラケズリによって消去されているものである。（H 1号住居址の8、H 8号住居址の28・29、H 12号住居址の7がある。）

C類

- C₁類 球体の一部を切ったような形状で口縁部がやや内弯するものとやや短く内傾気味のもの。（H 9号住居址の3・6、10号住居址の3・8がある。）
- C₂類 口辺部がごく短く外反するもので、底部は丸底を呈す。（H 1号住居址の1がある。）
- C₃類 口辺部が外へ延びたままで、平底気味の丸底を呈すもの。（H 1号住居址9、H 10号住居址の6がある。）

以上の坏形土器は総じて鬼高峰期の範疇に含まれるものである。C類は前時期の伝統を残しているものと思われ、C₂類はやや古い様相を示している。C₁類は鬼高峰期の全般にみられるものである。A・B類は、外稜を有するもので、須恵器の模倣等により発生したものといわれている。特にその中でもA類は古い様相を示し、B₁類は、H 4号住居址出土坏形土器8点のうち6点を占め併出した長胴の甕形土器等の特徴から鬼高後葉に比定されよう。H 8号住居址の坏形土器の14点のうち五割を占めるB₂類は、H 4号住居址等にも少数みられるが、口唇部に一条の凹線が巡る甕、甕形土器に共通する特徴を有し、鬼高峰期の終末期とおもわれる。B₃類は、外稜がくずれて整然としなくなり、口唇部には、B₂類とともに甕、甕形土器と共に一条の凹線が巡る特徴を有し、B₂類とともに鬼高後葉末のものとおもわれる。また、B₄類は、外稜の不明瞭さに特徴があり、B₁類よりは、後出するものとおもわれる。

坏形土器の異形ともいえる木葉形を呈すものがH 4号住居址より出土しているが、佐久地方では類例をみていない。

椀形土器は、出土数が少量であった。全体の器形をしれるものは、H 4の13のみである。口辺部内傾し底部は丸底気味の平底である。H 8の13、H 10の4は口辺部から胴中央部付近までの残存である。口辺部は内傾する小形のもので、部分的にヘラミガキが施されている。

高坏形土器は、出土例が少く、H 4号住居址で2点、H 8号住居址で1点、H 10号住居址で2点出土しているが、完形のものは1例もなく、全体の器形を知り得たものはない。H 4号住居址の25・26は、大形のもので外面は縦方向のヘラケズリ痕がみられる。他は、小形の脚部のみ残存している。H 8号住居址の37は内面黒色研磨のものである。

以上、鬼高峰期に属するものについて述べてきたが、ここで須恵器についてふれたい。須恵器は

壺形土器が圧倒的に多く、少量の甕形土器、蓋が出土しており、H 2・5・6・11・13・15・16号住居址より伴出している。

H11号住居址の壺形土器の底部には、他の住居址出土のものとは異ったものがある。H11号住居址の5・7・9・12の底部には、ロクロ使用に際して行なわれた糸切りの痕を、ヘラケズリなどによって消去された痕跡が認められ、伴出した土師器の壺形土器8にも同様なものがみられる。このH11号住居址は、これらの特徴をもった須恵器と土師器の甕形土器1・2・3と壺形土器4・8が伴出しており、国分期前葉とおもわれる。

他の須恵器を出土した住居址は、おおむね国分期に属するものとおもわれる。なお、H16号住居址からは、1の台付壺形土器の灰釉陶器が出土しており、国分中葉とおもわれる。また、H18号住居址からは、土師器の鍔釜片が出土しており、国分後葉に比定されよう。⁽¹²⁾

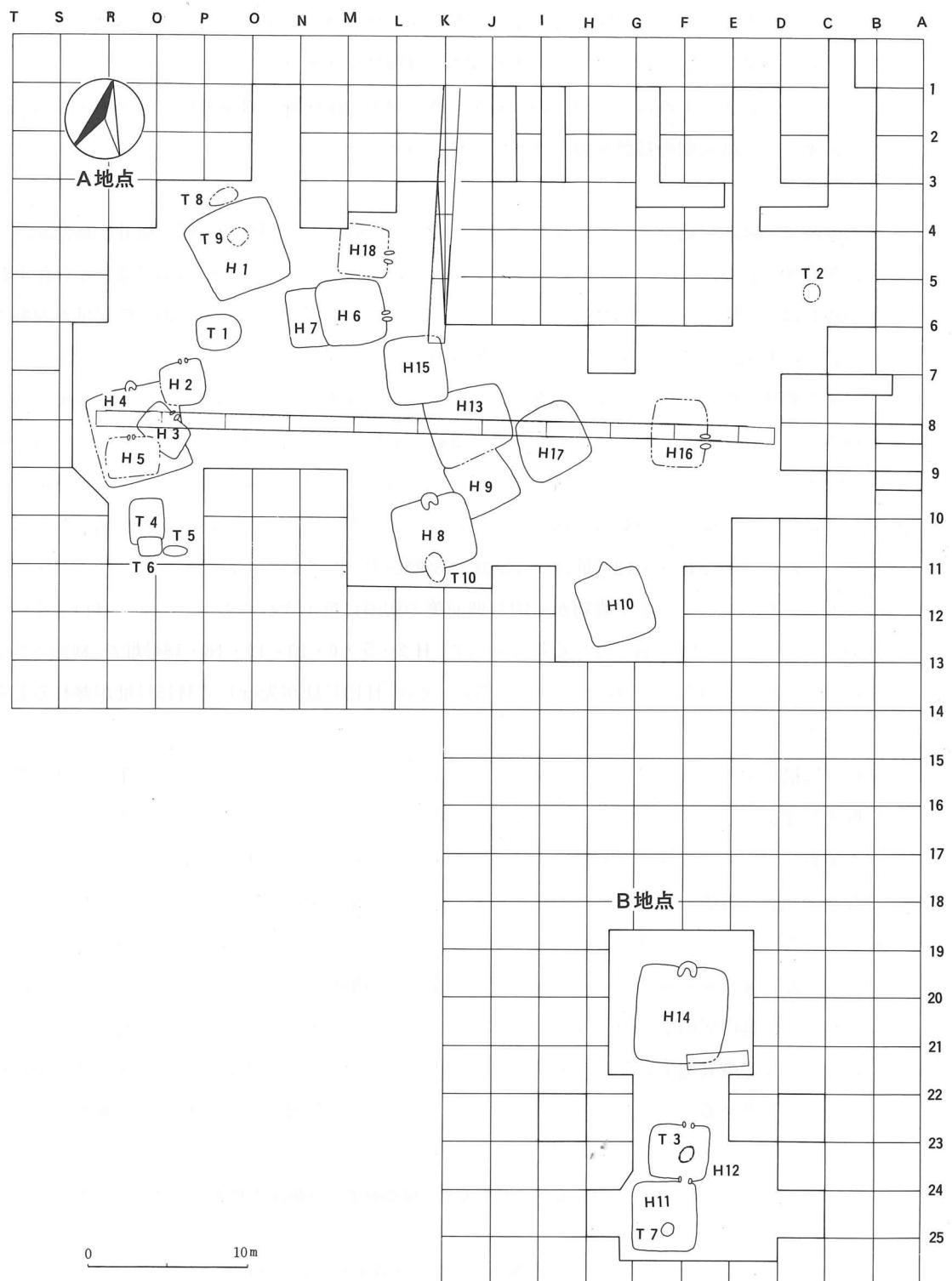
また、土師器、須恵器の壺形土器の中には墨書土器がみられる。H1号住居址の5には「吉」が、6には解読不明の文字が、H6号住居址の2には「月」という文字がそれぞれ記されている。

さて、以上個々の土器について述べてきたが、それらの時期について、遺物の出土状態と考え合わせて住居址ごとに述べてみたい。

H1号住居址からは、鬼高後葉とおもわれる壺形土器等が出土し、糸切り等がみられる壺形土器が混入している。H2号住居址からは、少量であるが、国分期に比定される高台付碗形土器等が出土している。H3号住居址は、出土遺物が少くしかも残存部位が僅かなものであるため、時期決定はなし難い。H4号住居址は、多量の土器が出土し、しかも、甕形土器は、IV区に、長胴の甕形土器は、カマドに、胴がふくらむ甕形土器は、貯蔵穴とおもわれるピット近辺に、壺形土器はカマドの東脇にというように出土状態の偏在性がみられた。これらは総じて鬼高後葉に比定されよう。H6号住居址は、須恵器の壺形土器が多量に出土している。国分期にあたるとおもわれる。H8号住居址は、H4号住居址と同様に多量の土器が出土した。出土状態については、第IV章で詳述してあるが、ほぼH4号住居址と同様な偏在性が認められた。出土土器は、前述してあるように、鬼高期の終末の様相を呈している。H9号住居址からは、壺形土器B₃類、C₁類が出土しており、ほぼ鬼高後葉とおもわれる。H10号住居址は、C₁類、C₃類の壺形土器がみられる。H9号住居址と時期的にさほど差はないとおもわれよう。H11号住居址は、前述のように、須恵器壺形土器の底部のヘラケズリ痕、土師器の甕、壺形土器より、前期的な製作技法を引き継いでおり国分期前葉に比定される。H12号住居址の遺物は、甕形土器、小形甕形土器等があり、鬼高後葉に比定されよう。H13号住居址は、国分期とおもわれる須恵器が少量出土した。H14号住居址は、B₂類に属す、両面が赤色塗彩された壺形土器があり、底部平底で内面黒色研磨の壺形土器とともに鬼高後葉でもやや新しい様相を呈している。須恵器の壺形土器が主体的にみられるH15号住居址の出土土器は、総じて国分期に比定されよう。H16号住居址の灰釉陶器は、前述のよう

第22表 上桜井北遺跡検出住居址一覧表

地 点	遺 構	平面プラン						壁 高	カ マ ド	柱 穴	時 期	備 考					
		形態	規 模				主軸方位										
			N	W	S	E											
A	H 1	隅丸方形	550	475	480	465	N—5°-W	12.5 24.5	(北)	主柱 4	鬼高後葉						
A	H 2	不整形方	270	(210)	(270)	270	N—4°-E		(北)	0	国分期						
A	H 3	隅丸台形	265	(220)	(300)	200	N—53°-W		(北)	0	鬼高後葉						
A	H 4	不整長方形	535	(546)	(540)	580	N—8°-W		北	主柱 4 入口 2	"	貯藏穴 1					
A	H 5	?	-	-	-	-	N—4°-W	-	(北)	0	国分期						
A	H 6	隅丸方形	370	380	390	360	E	14.5 36	東	-	"	覆土内礫群					
A	H 7	?	-	365	-	-	-		-	-	?						
A	H 8	隅丸方形	420	385	430	380	N—2°-W	15.5 26	北	主柱 4	鬼高後葉	貯藏穴 1 覆土内礫群					
A	H 9	(隅丸方形)	(300)	355	340	(370)	-		(北)	0	"						
A	H 10	方形	390	395	400	400	N—9°-W	26.5 39	(北)	主柱 4	"	覆土内礫群					
B	H 11	方形	370	400	335	400	N—10°-W	4 25	北	0	国分期						
B	H 12	方形	340	300	340	300	N—10°-W	14.5 25	北	0	鬼高後葉						
A	H 13	台形	(490)	430	(455)	355	-		-	0	国分期						
B	H 14	長方形	485	575	470	530	N—6°-W		北	主柱 4	鬼高後葉						
A	H 15	隅丸方形	340	370	340	360	-		(北)	0	国分期						
A	H 16	?	-	-	-	-	E—10°-S	-	(東)	-	"						
A	H 17	隅丸台形	330	355	395	370	-	7.5 26.5	(北)	0	鬼高後葉						
A	H 18	?	-	-	-	-	E	-	(東)	-	国分期						



第63図 上桜井北遺跡遺構全体図 (1 : 400)

に国分中葉かと思われる。手捏土器、甕形土器のみられるH17号住居址出土土器は他の小片もふまえて鬼高後葉に比定されるものとおもわれる。H18号住居址は前述のとおりである。

これら住居址出土土器は、多量にのぼるが、特にH4号住居址とH8号住居址の出土土器は、鬼高後葉とその終末期の特徴を表示する好資料といえよう。

本遺跡は、跡部地籍より形成された河岸段丘先端に位置する。現在の三塚、桜井、跡部部落がこの微高地上に存在し、佐久平においても、一番の穀倉地帯であり、水田の中に家々が存在する。

周辺には、三塚町田、跡部町田、市道、鶴田遺跡が存在し、和泉期～国分期の住居址が発掘されている。本遺跡もこの地帯における、一集落址として位置づけることができる。

さて本遺跡の検出遺構は、集落址としての利用と上記特殊遺構第2類等に見られる墓址としての利用の2大別が考えられる。上述、遺構、遺物の関係から鬼高後葉に当るものとして、H1・3・4・8・9・10・12・14・17号址等が挙げられるが、切り合い関係等からH4・9号址が先行し、特にH8号址は真間期への移行期と思われ、須恵器の伴出がないので鬼高末期に比定されよう。これらの中でH9・12号址は、住居址の規模がやや小さいが、他のものは1辺4mを超える共通点を有している。次に遺物から国分期前葉の初頭に推定されるものとして、H11号址を挙げることができる。国分期に当たるものとして、H2・5・6・13・15・16・18号址が、検出されているが、そのうちH13・15号址の切り合い関係により、H13号址が先行してH15号址が遅れるものと考える。

特殊遺構においては、伴出遺物から、T1・8・9・10号の一群が最も古く、T2・3・7の一群及びT4・5・6号の一群は明らかに一段新らしく位置するものと考えられる。

本調査において、集落址としても、それにともなう農耕地等の把握を完全に行なうことができなかつたが、古墳時代後期から中世に至る長い期間性格を異にしながら利用されてきたことが明らかとなった。さらにH8号址のカマド構築土内より出土した臼玉は、単に構築中にまぎれこんだものか、又はある意味をもって入れたものか、その類例を待たなければならないが、当佐久地方においては住居内より出土する臼玉とともに注意しなければならないと思われる。

最後に、この微高地上に存在する遺跡群とともに、その生産的基盤の追求を今後行なわなければならぬと考える。

(林幸彦、高村博文、藤沢平治)

註1 「うえのじょう」佐久市上ノ城遺跡緊急発掘調査概報 佐久市教育委員会

昭和49年

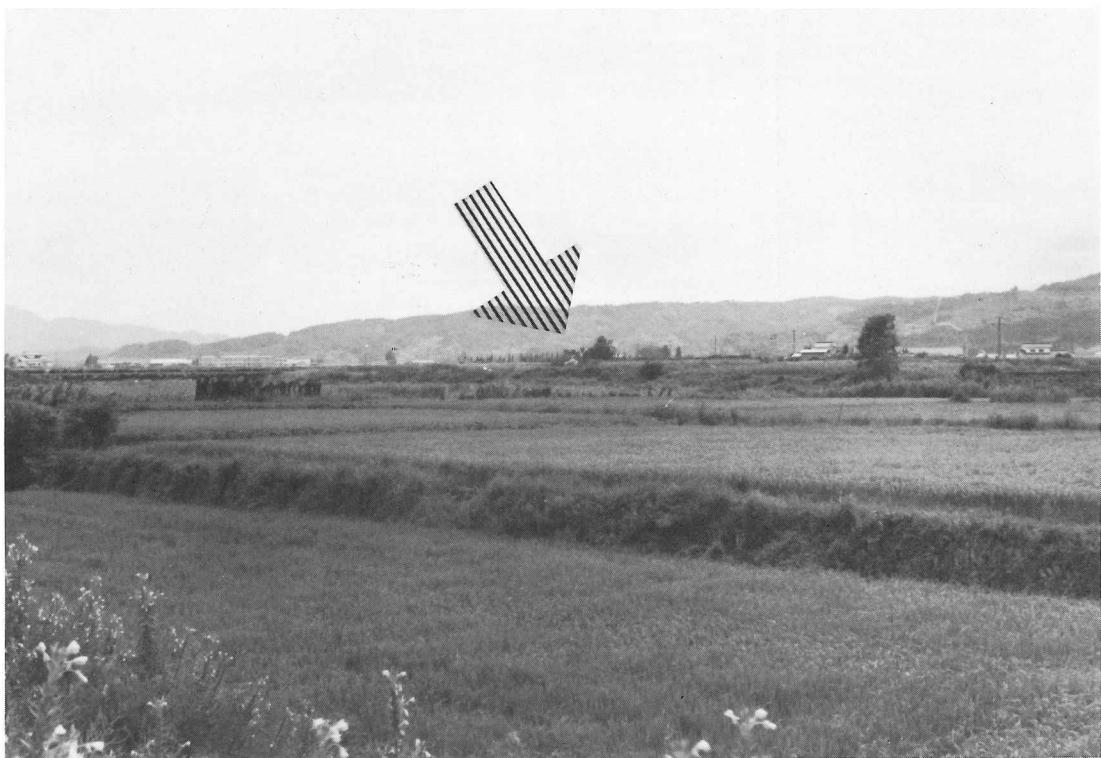
註2 藤沢平治 『三塚』佐久市三塚遺跡緊急調査概報 佐久市教育委員会

註3 竹内 恒 『儘田遺跡緊急発掘調査報告』 佐久市教育委員会 昭和46年

- 註4 文章中の土器番号は、各住居址出土遺物実測図の番号に準ずる。
- 註5 このような、口縁部端に凹線が入る甕形土器、長胴を呈する甕形土器は、真間I式土器の特徴とされている。杉原莊介・大塚初重『土師式土器集成』本編4による。昭和49年。
- 註6 藤沢平治『市道』長野県佐久市市道遺跡の発掘調査IV章による。昭和51年。
- 註7 杉原莊介・大塚初重『土師式土器集成』本編3による。昭和48年。
- 註8 註6と同じ。
- 註9 註5と同じ。
- 註10 註6と同じ。
- 註11 註7と同じ。
- 註12 笹沢浩『上水内郡誌歴史編』「善光寺平第五様式器の土師器とその生産」による。昭和51年。

参考文献

- 藤沢平治『市道』長野県佐久市教育委員会、市道遺跡調査報告書刊行会 昭和51年
〃 『三塚』佐久市三塚遺跡緊急調査概報 佐久市教育委員会 昭和50年
竹内恒『儘田遺跡緊急発掘調査報告書』佐久市教育委員会 昭和46年
森島稔・笹沢浩『上水内郡誌・歴史編』
佐原真『紫雲出』香川県詫間町文化財保護委員会 昭和39年
杉原莊介・大塚初重『土師式土器集成』本編3・4 東京堂
大場磐雄・坂本太郎他『信濃史料 第1巻 上・下』信濃史料刊行会 昭和22年
米山一政・小林孚他『浅川西条』長野市教育委員会 昭和51年
服部敬史・比留間博他『船田一東京都船田遺跡における集落跡の調査I』八王寺市船
田遺跡調査会 昭和44年
大井晴男『野外考古学』東京大学出版部
桐原健・藤沢平治・土屋長久他『佐久市所在埋蔵文化財分布調査報告書—昭和46年度
一』長野県佐久市教育委員会 昭和47年
井上義安『涸沼手帳 1』ひいがま遺跡発掘調査団 昭和52年
岡田正彦「平安時代土師器等の編年試論—特に長野県中南信地方の住居址出土土器を中心
として—」『信濃』第29巻第9号



1 上桜井北遺跡全景（南より）



2 A地点東側全景（北より）

図版二
遺跡



3 A地点西側全景（北より）

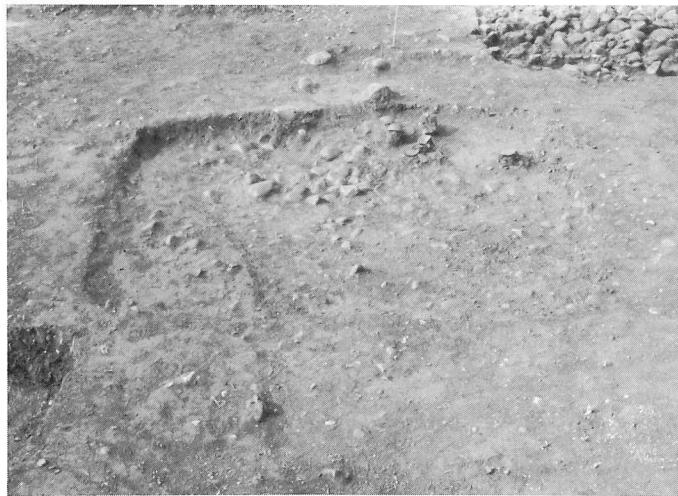


4 B地点全景（南より）

図版三 遺構(住居址)



1 H 1号住居址(南より)



2 H 2号住居址(南より)



3 H 3号住居址(南より)

図版四 遺構（住居址）



4 H 4号住居址（南より）



5 H 5号住居址（北より）



6 H 6・7号住居址（北より）

図版五 遺構（住居址）



7 H 6号住居址（南より）



8 H 8号住居址（南より）

図版六 遺構(住居址)



9 H 9・13号住居址（南より）



10 H 10号住居址（南より）



11 H 10号住居址（西より）

図版七 遺構(住居址)



12 H11号住居址（南より）



13 H12号住居址（西より）

図版八
遺構(住居址)



14 H14号住居址（南より）



15 H15号住居址（東より）



16 H17号住居址（北より）

図版九 遺構（カマド）



1 H4号住居址カマド（南より）



2 H4号住居址カマド（西より）



3 H6号住居址カマド（西より）



4 H6号住居址カマド（南より）



5 H8号住居址カマド（南より）



6 H8号住居址カマド（切開後）

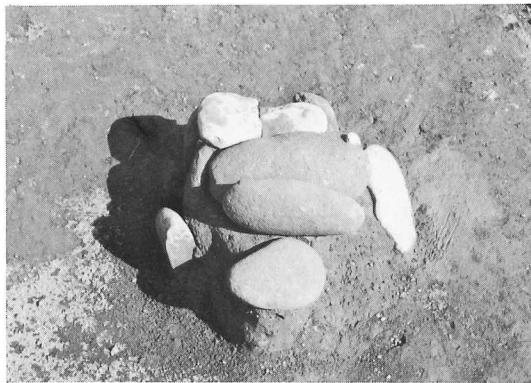
図版十 遺構(カマド)



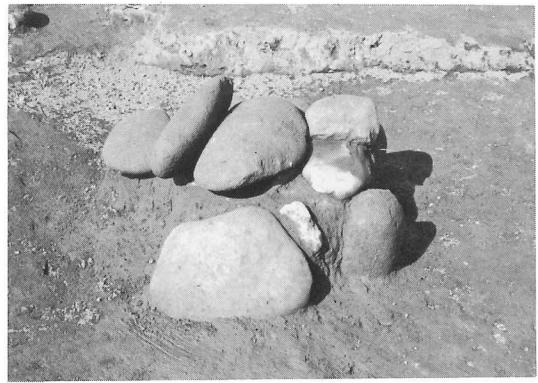
7 H10号住居址カマド（南より）



8 H12号住居址カマド（南より）



9 H16号住居址カマド（西より）



10 同住居址カマド（北より）



11 同住居址カマド（東より）

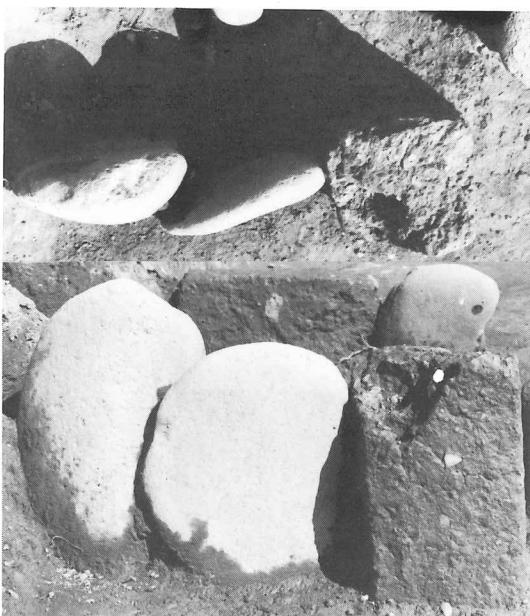


12 同住居址カマド（南より）

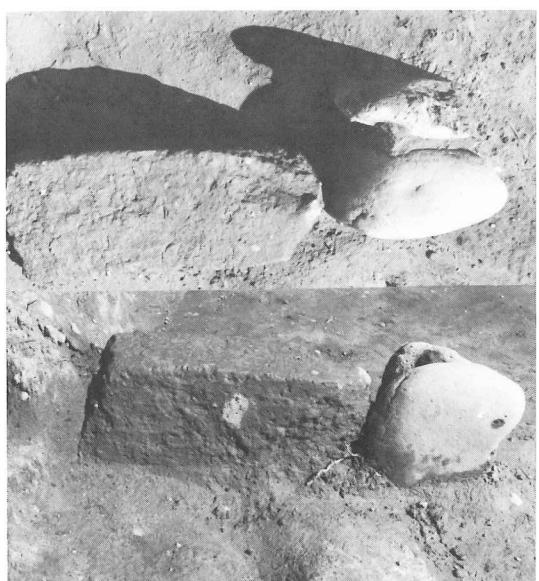
図版十一 遺構(カマド)



カマド全景(南より)



西袖部



東袖部

図版十二 遺構（特殊遺構）



1 T 1号特殊遺構内礫群（北より）



2 同 上（西より）



3 T 1号特殊遺構（完掘後）

図版十三 遺構(特殊遺構)



4 T 3号特殊遺構



5 T 8・9号特殊遺構



6 T 4・5・6号特殊遺構内礫群(南より)



7 T 4・5・6号特殊遺構(完掘後)

図版十四 遺構（住居址覆土内礫群）



1 H 6号住居址覆土内礫群（西より）



2 同上（北より）

図版十五 遺構（住居址内礫群）



3 H 8号住居址覆土内礫群（南より）

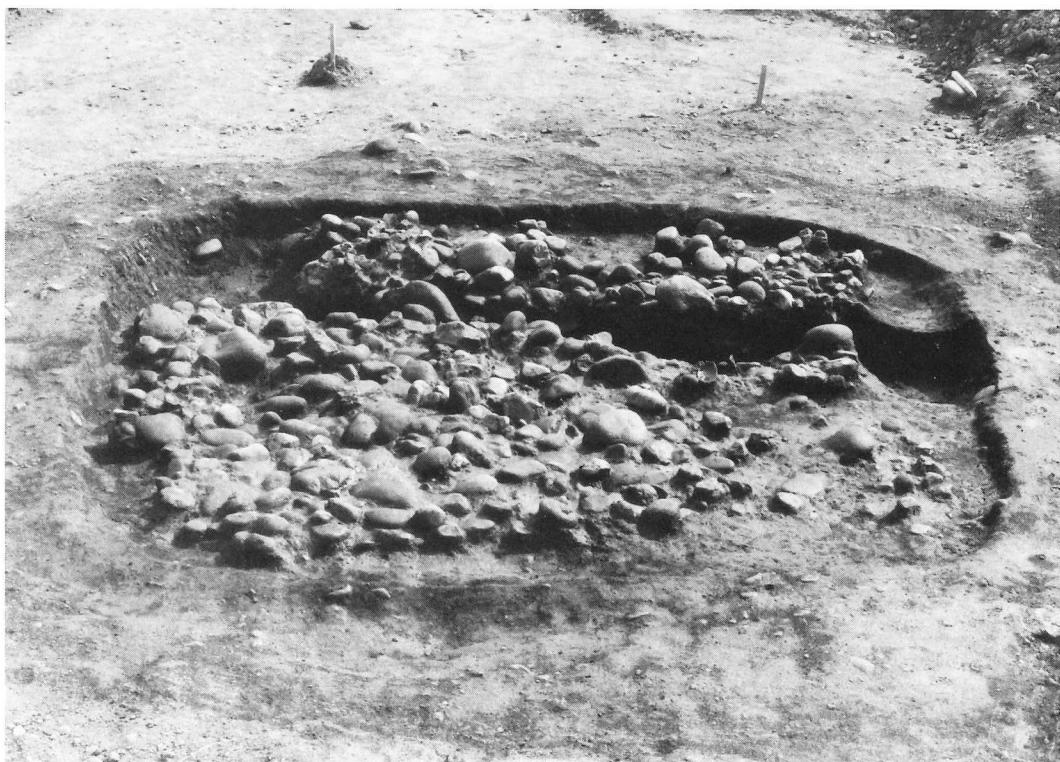


4 同上（東より）

図版十六 遺構（住居址覆土内礫群）

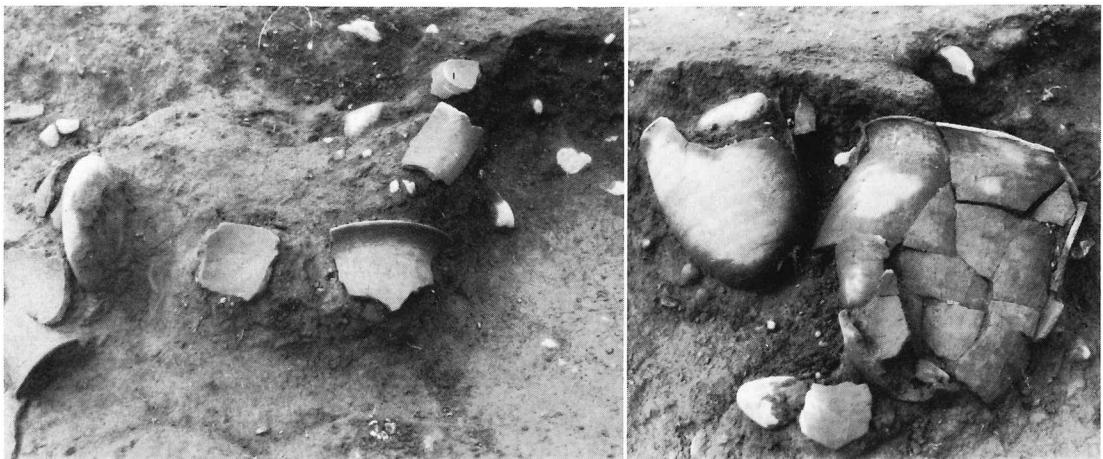
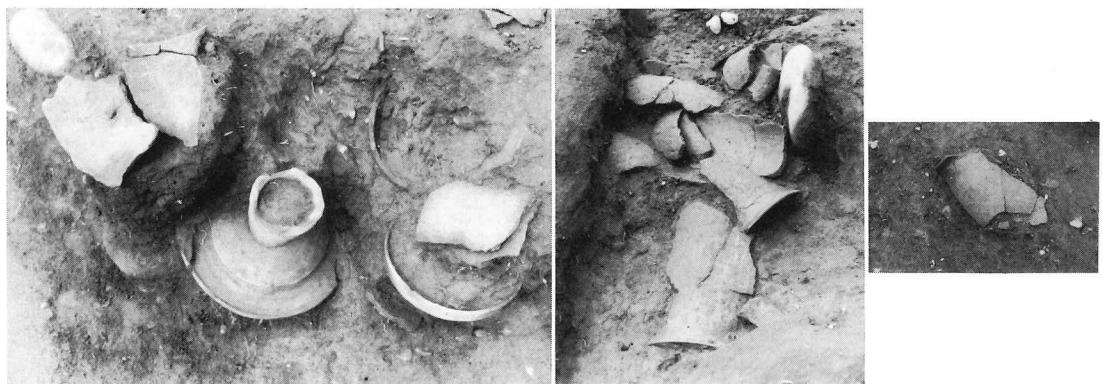


5 H10号住居址覆土内礫群（北より）



6 同上（西より）

図版十七 遺物(出土状況)



1 H 4号住居址遺物出土状況

図版十八 遺物（出土状況）



2 H 8号住居址遺物出土状況（その1）

図版十九 遺物（出土状況）



3 H 8号住居址遺物出土状況（その2）

図版二十 遺物



H 4-1



H 8-1



H 4-4



H 8-2



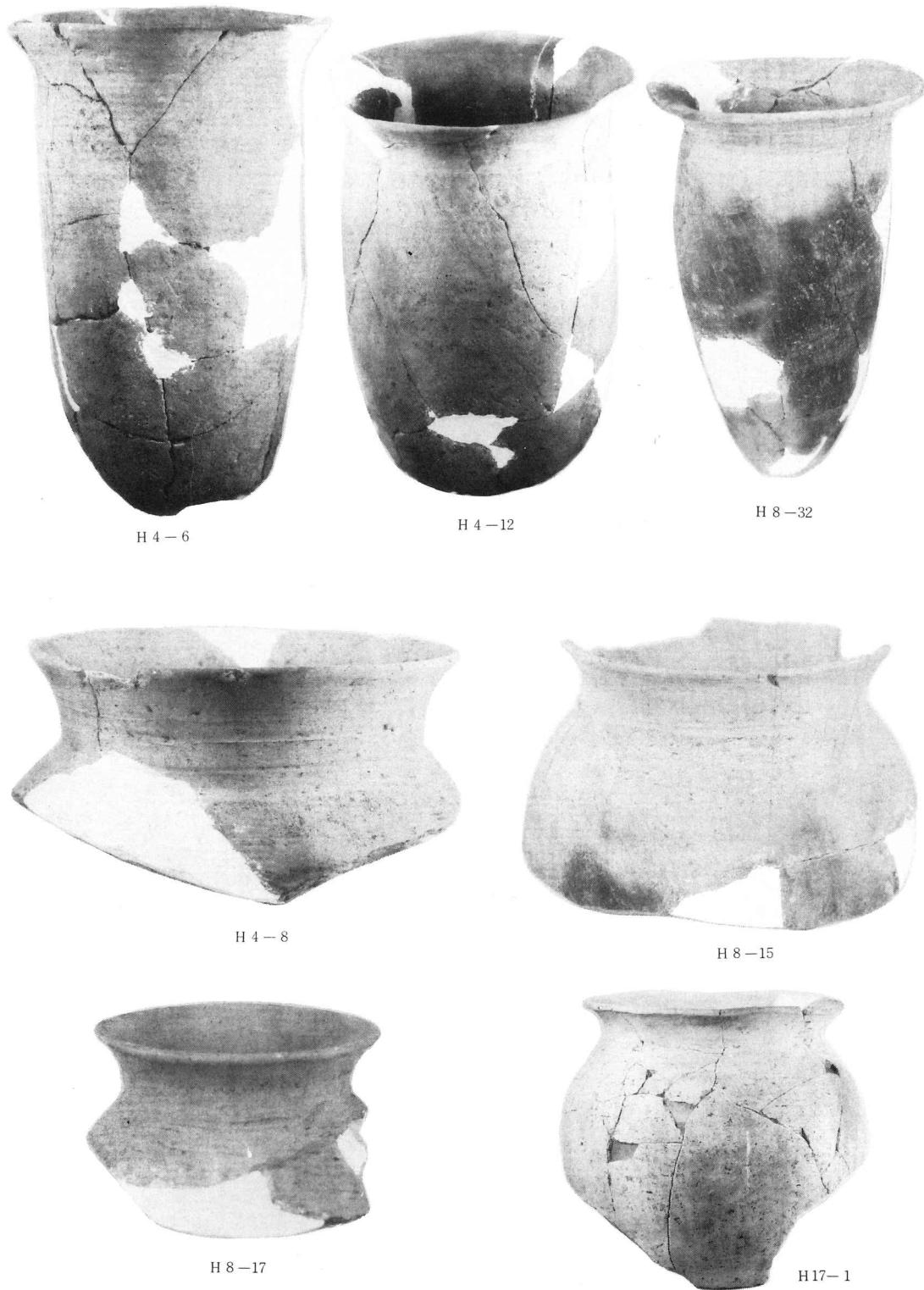
H 4-10



H 12-2

1 H 4・8・12号住居址出土の甌

図版二十一 遺物



2 H 4・8号住居址出土の甕

図版一二 遺物



H 4-5



H 4-9



H 8-3



H 8-14



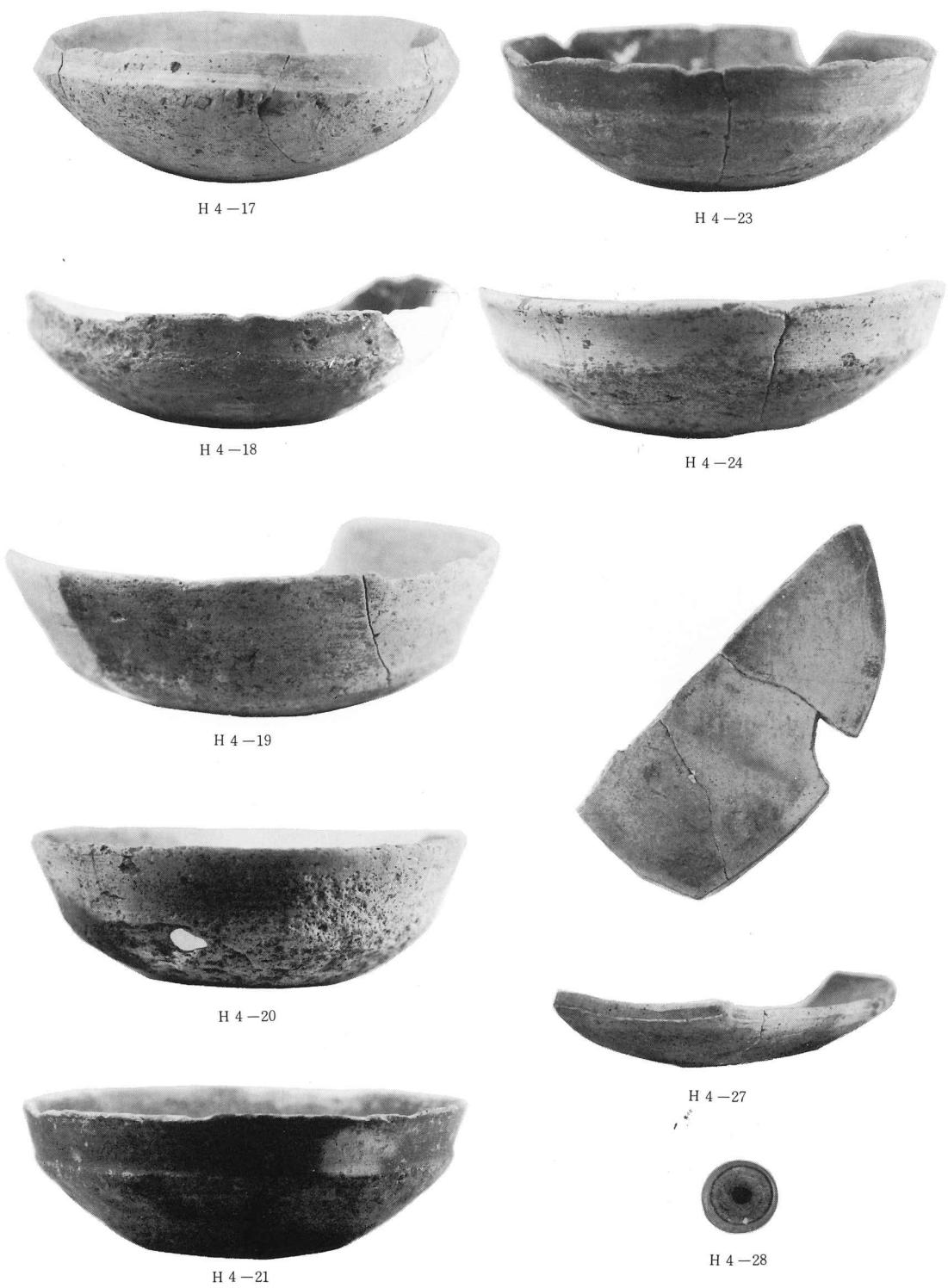
H 4-25



H 4-26

3 H 4・8号住居址出土の甕・高坏

図版二三 遺物



4 H 4号住居址出土の壊・紡錘車

図版二四 遺物



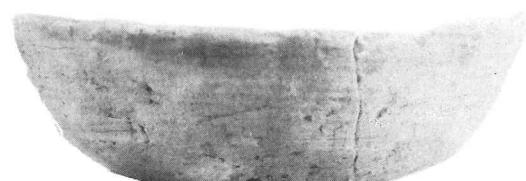
H 8-19



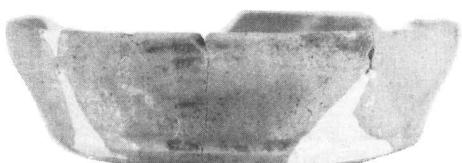
H 8-26



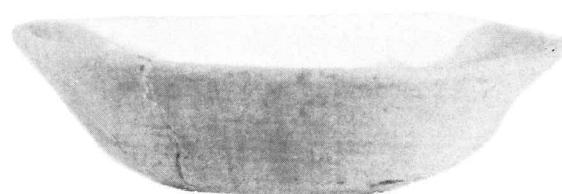
H 8-20



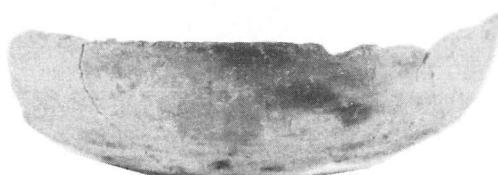
H 8-28



H 8-21



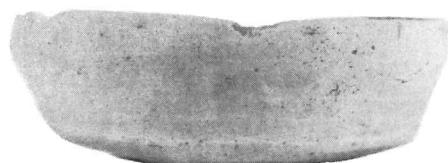
H 8-29



H 8-22



H 8-31



H 8-24



H 8-39

5 H 8号住居址出土の环・臼玉

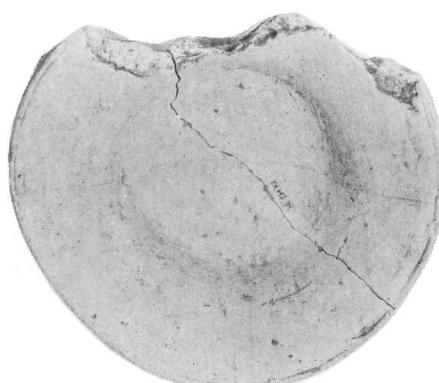
図版二五 遺物



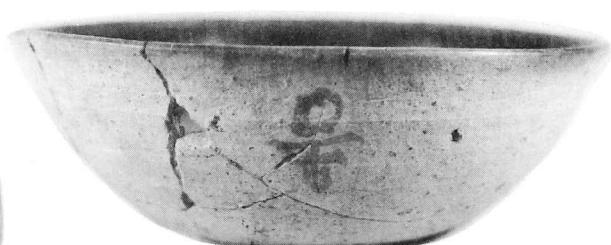
凹線(H 8)



糸切り底のヘラケズリ(H11)



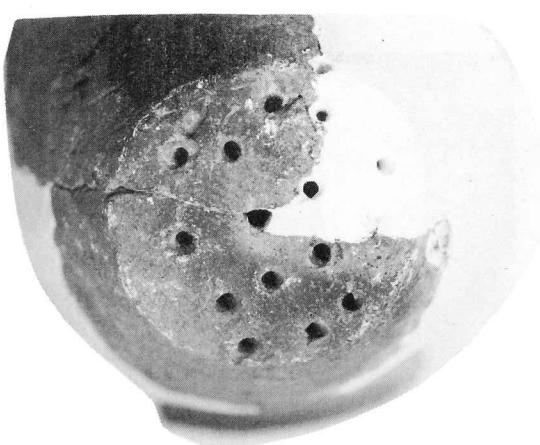
凹線(H 8)



墨書土器「吉」(H 1)



墨書土器「月」(H 6)



多孔盤の底部(H 8)



灰釉陶器(H 16)



手捏土器(H 17)

6 成形・調整の特徴(凹線・多孔・糸切底のヘラケズリ)・墨書・灰釉・手捏

図版二六 風景



1 上桜井北遺跡発掘調査スナップ

長野県佐久市上桜井北遺跡

昭和53年3月発行

編集者 上桜井北遺跡発掘調査団

発行所 長野県佐久市教育委員会

印刷所 株式会社 佐久印刷所
